力士は力自慢を好み今の力士は利口振たるの差あるに過ぎず、此等の實話を讀まば古今力士の技倆の程も大凡は察し得らるべし

相撲の名家

愛花

相撲檢査役中に於て才ならずと雖も不才ならず、噴々の名なしと雖も輕侮するものなく、醇樸にして而も愚ならず誠實にして、能く精細なるものを故關の戸億右衛門となす、關の戸客臘を以て物故す、其死に先つこと數月曾て予に語つて曰く我敢て我家の世系を誇らんとするものにあらず、然れども斯道の歴史にして我家に關するもの少なからず願くは君の力を假りて之を世に傳ふることを得んや與と因て一卷の舊記を予の許に致せり、而して未だ之を繙讀せざるに先ち關の戸俄に世を棄つるに至れり、予深く彼の志を其生前に果さゞりしを悲み直ちに其一部を抄出して之を萬朝報紙上に錄載したり、

按ずるに寛永元年始めて江戸勸進相撲を四谷鹽町に興行するに當り之が創立に力を盡

せしものを初代伊勢海五太夫と云ふ、後に力士關の戸億右衛門と云ふあり、五太夫の系を襲ふて伊勢海億右衛門と稱す、是れ二代の伊勢海なり、寛政年間に至り億右衛門歿して柏戸村右衛門に襲名せしめ之を三代伊勢海となす、既にして村右衛門亦歿し其門弟柏戸宗五郎、四代伊勢海を襲ふに至り、二代億右衛門の寡婦加野と呼ぶもの大に其不順を責め之を故億右衛門の門弟荒熊と呼ぶものに襲名せしめんと欲し官に訴ふること凡そ十數次、之に因て相撲社中の紛擾絶ゆる時なく殆んど血を以て爭はんとするに至りたれば官屢ば原被兩造に諭す處あり又相撲年寄總代等をして兩者の間を調停することを勉めしめたれば宗五郎已むことなくして一旦伊勢海の名稱を辭し、傳來の家資と共に之を年寄總代の手に保管せしむるの約を結び幾年の葛藤始めて解くることを得たりき、爾後十數年の間伊勢海の門葉兩派に分れ一は寡婦加野、亡夫の門弟を率ひて場中に顧盻し一は柏戸宗五郎其力士名を以て故村右衛門の門弟を統轄し相撲年寄の宗家伊勢海の號を相撲番附面に見ざること數年の久しきに至れり、後加野老ゆるに及んで再び調停するものあり、伊勢海の號は宗五郎の襲ふ處に任せ、以て今代の伊勢海に至りしが加野一派の門弟

は加野の歿後に及んで各〻欲する處に從ひ、終に其承繼者を中絶すること十幾年、相撲道の名家此に斷絶し了はらんとしたり

故關の戸は舊鯱の戸と呼ぶ先代伊勢海の門弟にして義正に其號を襲はざるべからず然れども彼別に欲する處ありと稱し伊勢海の號は其の義弟たる柏戸宗五郎《現今の伊勢海》に讓り自ら出て二代伊勢海の絶家を再興し其力士稱を襲ふて關の戸億右衛門と稱せり現今八十餘名の相撲年寄中、予の彼を呼んで相撲の名家と爲すは即ち之が爲めのみ、而して關の戸の名號久しく中絶したるを以て世人多くは新たに設けられたるものと疑へり、是れ故關の戸の予に托して其歴史を世に紹介せんと欲せし所以なるべし

關の戸の逸事は既に別章の中に於て錄されたるもの多し、然れども大抵皆其滑稽談に屬し未だ彼の爲めに氣を吐きたるものなし、是に於て予は彼のために彼の美事一二を錄し其の死後を美にせんとするの義務あるを信ずるなり。聞く慶應四年彼鯱の海と稱し地位幕下の第四次を占め當時の大關不知火右衛門を土俵上に破ぶりし日、偶ま警報あり力士三代の松清五郎、能登ケ濱金次郎の兩名猿若町二丁目の劇場市村座に於て爭援を爲し其

庵看板を撤して淺草觀世音の境内に護衛しつゝありと、蓋し舊時は相撲社中よりして庵看板を劇場に貸與せしものにして三代の松等兩力士は之を鑑察の爲め此日亦市村座に在りしものなり、此警報に接するや鯱の海は土俵を下りて未だ衣を着するの暇なく裸体に締込と稱するものを結び曾て島津侯より賜はりたる銀作りの一刀を其腰に帶び、相生小柳の兩力士を隨へて飛ぶが如くに觀世音境内に走せ行き劇場よりして來り襲ふものあらば四肢の動く限り刀の折れざる限り一人能く百人に當らんと叫びたり、時に淺草の俠客新門辰五郎と云ふものあり來つて調停を試み幸ひに事なきことを得たれば乃ち其場に於て和解の式を擧げ引出ものと稱して蕎麥七千盤、酒七駄を積み互ひに鯨飲して後日に事なきを盟ひたるは世に神明の喧嘩と稱するものと相ひ並んで一時の壯觀なりしと今猶ほ記憶して賞揚するもの少なからず、關の戸亦强記精細、其社中に在りて『生きた帳面』と稱す其故を問へば相撲興行中米錢の出納を始めとし平時の出納に至るまで一人能く其任に當り其他百般の事、處理して毫も誤ることなく數年前のこと亦能く問ひに應じて答へざるなく時に力士の逃亡して在らざりしもの歸來復舊を乞ふに當り言辭を巧みにして舊

地位の上下を瞞了せんとするものあれば、關の戸來つて必ず其實を看破し毫も不正を許す處なかりしと云へり、彼又病篤きに至りて尙ほ能く斯道の盛衰を心とし、時々頭を上げて枕邊の人を顧み何々の事は如何に處せりやと問ふ、彼事は某年寄が處理せりと答ふれば即ち安意して眠に就き其起たざるに至るまで常に興行地に在るの心なりしと云ふ、關の戸の如き死に及ぶまで其任を忘れざるものと云ふべし、而して今や乃ち亡し、彼が名家の後を襲ふものは誰、彼が重任の後を承くるものは誰、追思すれば關の戸亦惜しむべからずとせんや。

相撲談片

好角翁

◎梅ヶ谷の氣焰　聞き置きの話なれば人も既に聞て居るかは保し難いが梅ヶ谷の鄕友に某と云ふ者がある、目下帝國大學にて修業中だが或日梅ヶ谷と會談した時、梅は之に向つて貴公は未だ學士に爲らぬか己は最早大關となつて立派に暮して居ると云つたので某

は撫然としたさうだ、學士と大關、其選は異なつても梅の言は世の怠惰學生を諷鍼するに足ると云つて可なりである。

◎三府の横綱　或年の夏の比、大坂力士が東京で興行した時であつた大關秀之海に向つて横綱八陣は弱いものだ貴公に勝つたことは有るまいと云つたら秀の海の答へが意味深長であつた、ソレデモ三府の横綱中では八陣が一番強いかも知れません、と云つた横綱と云へば日の下開山で一番強い代名詞となつて居るに揃ひも揃つて三府に三人の横綱があつて夫が或る意味で弱い代名詞の如く使はれるも奇であるが《此日小錦既に衰ふに因てなり》其一番強いが我よりも弱いとの秀の海の微言は流石は力士だけに遠慮のないものだ、併し好角翁の見る處では三府の横綱では矢張り八陣が一番弱いだらうと思ふのである

◎源氏山の新聞嫌ひ　或る時或る人が源氏山に向つて僕の近所には貴公と常陸山が住んで居て毎朝兩人の家を出かけるのを見て双方ともに高砂部屋へ稽古に行くのだと思つて居たが常陸山は正しく稽古場で見かけるが貴公は頓と見懸けることが少ない、何處へ稽

古に行くのかと探つたらば實は賭場へ出勤するのだと云ふものがあつた然れば稽古をせずに彼れ程強いのだから稽古したらば大關になれるだらうと云つたら源氏山苦笑して、ソンな事を新聞や雜誌へ書ては困ります、私は能くも惡くも新聞へ書れることは懲々です、先年源氏山と改名した時に九州へ巡業に出ましたが、九州では源氏山と云ふ力士は何な強豪力士かと思つて居ると私であつたので度々の巡業で豫て顏は知て居ますから『ナンダ源氏山と云ふのは今泉のことか彼奴はヅボラもので仕樣がない』と評判して居ました、私だとても九州の果まで行てヅボラを遣た譯ではありませんが皆な新聞や雜誌で書たからてせう、何か最書ぬやうに願ます、實際改心したのですからと眞面目に賴んで居たが九州では餘程閉口して來たと見にる。

◎荒岩の人氣　荒岩等が高知で賭博嫌疑で捕縛された時の話であるが世間で傳へて居るのとは大に話が違ので當人の直話を掲げて置ふと思ふ、結局無罪となつたのであるから其場で賭博を爲て居なかつたのは勿論であるがソレ巡査だと云ふに吃驚して一同逃げ出す氣になつた其時荒岩には八人の巡査が取り纏たのを蹴たのか突たのか夢中に振り飛して堅固な大きな杉戸を眞中から打ち破つて表へ駈け出したが二丁計り行て初めて我に返へり此に立留つて息を容たが此時の胸の動氣と云つたらば生れて始めてのことで夫以來今日にても何かすると動氣の生ずる氣味があるので兎も角非常に力を出した事と思はれます夫から段々聞と礬矢などが捕へられて行つたと云ふので仲間と相談すると貴樣などが逃げて居ると矢張賭博を遣つて居たことゝ爲る夫よりも自分で警察へ行て賭博を遣て居らぬ事を辯解するのが自他の利益であらうと云ふので實は此方から出かけたのですが私等の口ですから辯解が十分に屆きませんので却つて留め置かれるやうな次第となりましたが其時に我ながら驚いたのは差入ものでした、先づ鰻飯などが山のやうてあつたと云ふ程でしたと飾りのない話であつたが當時の人氣は目に見るやうに思はれる。

◎谷の音の述懷　谷の音は頗る悟りの好き男で物言などの時も餘り八ケ間敷苦情を云はず敵にも花を持せて愛嬌のある力士と云ふことは世人の能く知て居る處だが或人が之に向つて今度の出來は十分であつたから次の場所には定めて出世するだらうと云つたら谷は答へて、イヱモウ今でも十分すぎます相撲にならずに國に居たらば今ごろは矢張

鍬鎌を肩にして田畑へ出て居たので御ざいませうが相撲に爲たれ蔭には斯して絹布を着て旦那方の前でも筵座をかいて甘いものを頂だき時々は藝者にもチヤホヤされますのですと、一座の藝者と面を見合はして微笑したるは心憎くも亦愛嬌のあることであつたと或る人の直話なりし。

◎大纏の二人曳　出來山の大纏が或る日旦那筋の家に至り夜に入つて歸宅せんと云ふので人力車を雇てやらうと云へば大纏頭を搔きながら云ひ惡くさうに、人力車ならば何か二人挽に願ひたう御ざいますと云ふに旦那は腹の中で二人曳でなくては曳ぬと云ふ体量でもないのにと心可笑思ひ、ナゼ二人曳が必用ぢやなと云へば大纏少し困つた体にてイヱ是から少々花美な座敷へ參りますのでと云ふ、花美な座敷とは誰の處だと問へば大纏益す困り只頭を搔て居るのみなので旦那も最早追窮せずに其云ふがまゝに二人曳の二人車にて送つてやつたが其後人力車宿より勘定を取りに來た時に大纏の行つた先きを見しに『吉原』とあり、ヱ、彼奴に一ぱい喰された彼奴の女房は吉原の藝者であつた、アンな体で二人曳が可笑と思たらば、彼奴人の車で女房の前に見榮をしやがつたナ。

◎力士の自轉車　力士中に自轉車乘多し小緑なども上手に乘るとは聞たが殊に上手なのは朝日龍である或る時好角翁の觀角の友某氏が回向院よりの歸途、二人曳の人力車を走らして麻布の方へ向つた時に横合より自轉車を走らして某氏の人力車の前に顯はれたものがあつた、不圖見れば大髷に結んだ處が力士に相違ないので、ハテ力士の自轉車は珍らしい、誰であらうか顏を見てやらうと頻りに車夫を急して之を追かけさせた處が先方も之を知たと見えて某氏の人力車が追付さうになれば彼は全速力にて一二町を駈けの け既に遠ざかれば兩腕を組み兩足を蟲んで曲乘を爲しつゝ徐々と輾しらして某氏の人力車を待て居る鹽梅である、某氏は心惡き奴と思ひ益す人力車を急がせしも先方は自轉車の事とて到底駈け越して前に出ることが出來ず散々曲乘で愚弄されて顏を確むることが出來ずに仕舞たので翌日相撲場で其事を語り出した處が居合はした相撲年寄と力士等は大笑して、ソレは朝日龍で御ざいます、斯道の大通、大旦那を散々愚弄したと云ふ朝日龍は後を見なかつたので飛だ罪のないもので御ざいますと詫るが如く答へたさうだ。

◎大關は　輝　擔ぎ　先年二段目の小石崎が小相撲の連中に加はつて自分の故郷へ行て花

相撲を興行した事があつたが小相撲の事なれば番附面には幕の中に列してあり殊に生れ故郷のことなれば他の力士等は大關までも小石崎に花を持たせて千秋樂まで小石崎の勝ち連けて大働らきを爲したれば郷里の人等は大に感服し、小石崎は東京相撲の中でも大關よりも強い大層出世したものだと賞贊して居た處が其後に大相撲の連中に加はつて再び故郷の近くて興行した事がある其際に故郷の連中も見物に來て居たが小石崎が番附では二段目の末の方に在り相撲でも他に澤山立派な強い幕の中が居つたので故郷の人は呆れ果て、ナンダ大關よりも強いのが今度は褌擔ぎとなつて來た消魂て仕舞たとて其より故郷で小石崎の評判が無なつたさうだ。

◎雷の音の衣物　或年の五月場所興行前日のことであつた二段目の愛嬌力士雷の音が好角家某氏の邸に至り早く縮緬の單物が着て見たいと述懷したので傍らに居た令閨か當場所に勝ち越したらば縮緬の單物を買て遣ふと言出したので雷の音大に喜び其勢いて中日比までは旨く勝ち越して來たので彼は益す喜び今年は地方へ巡業に出ても縮緬の衣物を着て居れば大に巾が利くと心にも口にも安心して居た處が中日過からは段々と强敵が顯

はれ最後の日には其一番が勝ち越し負け越しの分れ目となつて來たので彼も甚だしく氣が揉めて殊には縮緬の單物が既に相撲茶屋まで届て居るので大に工夫を凝らして立ち合た處が餘り注文過ぎたので譯もなく負て仕舞た、ソコで面目なくて其客の棧敷へ來れないのを迎ひにやつて、サア負越しに爲たが縮緬の單衣は何したものだと云へば、雷の音ぬからずに、ナニ今日の相撲は十分勝つべき筈であつたが單衣の爲めに体が固くなつて働らけなかつたので御ざいますと丁度其單物を着て相撲を取たかの如く答へたので客も一笑して單物を與へた處が軈て其を着て今度は意氣揚々として棧敷に來り初めから之を着て居れば十日とも勝たので御ざいますとは、能くも言へたものと却つて愛嬌となつたことがあつた。

◎讙嚴の力士　相撲協會の規約に賭博を禁じあるにも拘はらず力士の賭博を遣ぬものは殆んどないと云つて可なるほどである、是は地方を巡業中に雨天に逢ひたる時など外に樂しみも消遣の道もない處より自然に其味を覺えるのであるが、此中に幕の中力士で花牌を手にも採らぬと云ふは元の小錦、大蛇潟、北海、狹布里の四人のみであるさうだ、

殊に小錦の感ずべきは或る席て酒宴も倦て客も藝者も力士も車座となつて花合せを始めたので小錦は迷惑さうに傍らから見物して居るのを一人が關取一番加はつてはどうだと勸めしに小錦は、ナニ之は協會で一番八ケ間敗ございますからと苦笑し辭て席を辭して歸り去たことがあるさうだ協會も斯云ふ役員が出來ては益す萬歳である。

力士美談

正面子

◎朝汐の義奮　前代高砂浦五郎の未だ世に在りし日なりし高砂の妻女の所置に朝汐の心行かざることありしかば、朝汐は我地位の大關なるを恃み、幾日も師匠高砂の家へ足踏みをせず、終には不平に堪へずして高砂部屋を脱せんとまで憤ほり、人に對しても屢ば之を口に出すに至りたりしが、或る日豫て寵遇を蒙りたりし前の大審院判事兒島氏より朝汐に來られよとの使ひ參りたれば、朝汐は何事かと直ちに兒島氏の邸へ伺候したりしに、兒島氏は朝汐を測近く呼びよせ、今日御身を呼びたるは用事ありてのことならず、

然れど御身に語り聞かすべきことあり、御身は近き比師匠高砂の妻女の處置面白からずとて出入もせずと云はずや、妻女の處置に憤ほることあるは、誠に然ることならんが、御身知らずや師匠の高砂は幾年健忘の病に罹り、家事上の一切は專ら妻女の手に治められつゝあるにあらずや、女性の身として彼の如き大なる力士部屋を支配し行くこと如何ばかり心を費やすかを推し見るべし、然るに一本の腕とも頼む御身が頭となりて不滿を抱くごときことありては、高砂部屋は終に破滅することもあるべく、斯ては師匠に對し不忠となるべく、病者に對して不仁となるべく、斯道に對して不義となるべし、上下數百人の力士中にも大關の榮位を荷ふ御身なれば、女々しき事に憤ほることなく、此上にも一臂を妻女に添へて高砂部屋の永く繁昌することを計られよと言詞を盡して理解を與へければ、朝汐は始めて夢の醒めたる如く我が是までの心の曲みたりしを恥ぢ、今日よりは心を改めて十分師匠夫婦のものに事ふべきことを誓ひ、兒島氏の教訓誠とに肝に銘じたるよしを謝しければ、氏も言ひ甲斐あることゝ喜び夫より酒肴を取り揃へて、朝汐を馳走せんと爲しけるを、朝汐强て之を辭退し今日は有りがたき教訓を頂き、酒肴の馳走

にも勝りたれば、之れにて御暇賜はられたしとて、直ちに其處を辭して歸途我家へも立ち寄らず、先づ高砂の家へ人力車を走らせ、敷居高げに座敷に通り恐る〳〵妻女の前に兩手を突き、今日ぞ我過ちを悟りたれば向後心を改めて御言詞に背むき參らせざるべしと涕落さゞる計りに詫たれば、妻女も感に打れ、夫ぞ高砂部屋の萬歳なりと姑くは嬉し涙に咽びたりしとなん。

◎松ヶ關の素行　松ヶ關は見かけのむくつけに似ず人に對して愛嬌多き力士なれば、贔負客とても少なからず、大相撲興行中には毎夜贔負客の許に呼ばれ、尾車の部屋に眠ることゝてなきほどなれば、衣服調度の賜はりものも多く、常に美服を纏ひて他の力士に羨やまれつゝあるも是れ其素行の修まれるに依れるものと云へり、若き力士の獨身なるは概ね賭博に耽けりて衣服を典じ調度を賣るの習慣多きに獨り此松ヶ關は日々の塲所入りにも同じ衣類を着ずと思はるゝ計りにて、平生此力士が土俵上にまで戯言を吐き其擧動の誠に磊落たるを見し人は必定素行の修まらざる力士なるべしと思ふもの多かるべきも、人は見かけによらずとの諺此力士には偽はりならずと思はれたり。

◎野州山の銀金具　今の野州山の師匠にて年寄の尾上と云ふは即ち先きに野州山と呼びし二段目の力士なりし、此力士が太き銀鎖と銀金具の附たる烟草入を常に白縮緬の兵子帶に下げたる姿の當時目に留りたる看客もあるべし、然るに近き比なりし此銀金具を何處にか紛失せしめたりとて人に對して落膽の色を示し居たるが、其のち之を拾ひたる人のありて再び其銀金具を尾上の手に屆け來りたる時、尾上は微笑して其人に謝しけるやう、斯る品なれば價を吝む程のものにはあらざれど我此品を吝みしは、此銀金具が天晴れなる天下の力士を生み出したる因由あればなりとの言に其因由はと尋ねけるに、今旭の勢ひある常陸山谷右衛門が始めて力士たらんとの心を起せるは、我野州山と呼びて水戸の相撲興行に赴きたる時我此銀金具の付きたる烟草入を白縮緬の兵子帶に下げたるを見て、常陸山は如何にも勇しきことゝ羨やみたるに依れりと尾上の答へられしは或は然ることも有るなるべし。

◎不知火の節儉　不知火光右衛門は(今は年寄となれり)土俵上の手取りなるごとく家事向きにも如才なき男なれば未だ關取と呼ばれざる前相撲のころより、其心がけめてたく

地方巡業の途すがら、他の力士等は立場茶屋など稱する處に憩ひ團子駄菓子扨は又煎餅と云ふものなど腹膨るゝまで食べ、師匠より與へられたる僅かの小使ひ錢を浪費する習ひなるに、不知火のみは斯る費を省かんため他の力士よりは少しく先きに歩み越して、草原の上、又は辻堂などある處に憩ひ此に同行の來るを待ち受くる如し、萬事斯の如く節約かに心がけたれば家事向き常に裕かにして曾て三段目に居りし日、故郷の父が仔細ありて傳來の田畑を他に典じたりと聞き日比貯蓄したる金子もて之を賠なひ返したりと云へり三段目の力士にて斯る貯蓄ありしは珍らしき事なり、然りとて義理人情を欠き交際もせぬと云ふ吝嗇にはあらず、爲すべきだけの事を爲しての節約なれば力士の間にも之を惡しざまに云ふものなく最貧客もひいき甲斐ある男と喜ぶもの多し、此に可笑物語は前相撲人足などが旅行中に立場茶屋なく途次にて草原、木株の上に憩ふを『稻妻』と符牒し來りしが前に記したる如く不知火の常に此稻妻を用ゆる處より當時の不知火の業名『藤の嶽』と云ふに呼び換へ夫よりは無錢にて休憩するを『藤の嶽』と符牒するに至りたるは今も尙ほ知る人多かるべし。

◎狹布の里の品行　狹布里錦太夫は角力中に珍らしき篤實家なり、酒とては深く嗜なまず、衣類は素より美くしきを着ず、最貧客の餘り多からざるためには、常住師匠伊勢の海の部屋にのみ横臥し、他の力士の如く花柳の巷に眠ることなどゝては絶て聞かず、又賭博の場へ臨むなど云ふことゝてなく、興行毎に手に入りたる給金は其都度に貯金とし其通ひ帳は深くアケ荷の底に納め之を其身の道樂の如く心得居れば今にては力士中評判の貯金家と云はるゝに至れり、然れば部屋力土等は此力士を風上に置かれぬものと接斥するもの多けれど狹布里は之を少しも苦にすることなく、常に他の力士等に向ひて力士は五十六十までも土俵に上れるものならず、彼の智惠の矢を見ずや、御身等も我を笑はんより智惠の矢の今日を見て早く年寄株を求むるだけの用意を爲すか、然もなくば他に營業するだけの金子を貯ふることを忘れず四十を越せば力士を止むるも差支へなきほどの心懸けこそ肝要なれと、却て教訓めきたる言を說けば、今にては私かに其品行を賞贊するの力士等を出すに至りしと云へり。

◎鬼龍山の節義　現今友綱部屋に屬せる鬼龍山雷八は素は桑川新左衛門の弟子なりし、

此粂川と云ふは相撲年寄の傍ら本所津輕原の二葉亭と云ふ寄席を開き居たりしが、今より數年前の或る夜我家より火を失し、家屋器什に至るまで悉く烏有に歸せしめたりしのみならず、黑烟中に咽びたる一人の老母を救ひ出さんために、粂川は全身に火傷して治療の甲斐なく四五日を經て已れ却つて黃泉に赴き後には之も火のために不具となりし八旬に近き老母一人を殘したりしが鬼龍山は是ぞ舊師匠の老母なりとて之を我家に引き取りて母の如くに扶育し居れり、或年の一月場所の事なりし鬼龍山は足部に負傷して土俵の働き十分ならざりしが、尙ほ一日も休業せずして登場せしかば、然る贔負客は之を笑止なることに思ひ此場所には休業して足部の療養を爲したらんにはいかにと勸めしに、鬼龍は頭を振り『我が休業してはれ婆さんに甘きものを上げる事が出來ません』と答へたりと云へり、鬼龍の心事斯の如くめでたかりしかば夫かあらぬか其場所の成蹟思はしからざりしに拘はらず、次ぎの五月場所に其位置の下らざりしは協會の役員等も其心をめて且つ負傷に恕して、多少の酌量を加へたるものと語るものありき、力士の進退には情實の加はるべき謂れなしと思へど、天此人の節義を嘉したるものとや云ふべき歟。

晴勝負

河邊黑人

晴天十日を了り、其優劣の自然に知らるゝを待んことは興味少きことなり、未だ力士の歸京せざるに先ち未だ勝負の決せざるに先ち、豫め之が優劣を想像して之を土俵上に對比し其當れるや味やを試むることは、好角家の最も滋味ありとして喜ぶ所なり、而して之が優劣を豫想するには彼等が東京を去りてのち地方巡業中の成蹟を一々調査し置かざるべからず、且つ地方に於ける花相撲には其成蹟の一概に信用すべからざるものなきにあらざるを以て、單に勝負の數のみを見て其成蹟を判ずることの精確ならざるを思はざるべからず之は或る年の本場所前の豫評なり今日となりては十月の菊なれど當時力士の評判を知るには便利なるべし

◎荒岩と常陸山　荒岩對常陸山の勝負は一時好角家熱心の沸騰點に達したるものとなすべし、此沸騰點に達したるは兩力士初めて對顏の時にありしと雖も當時に在りては實は

未だ極點には達せず、深く荒岩を信ぜる三四の角通を除くの外は多くは常陸の優勢を說くものなりし、常陸の体格と云ひ力量と云ひ能く荒岩を駕するは誣ひ難き處にして常陸贔負の人が安心して常陸の優勢を信じたるは決して無理ならぬ處あり、荒岩びいきとても實は荒岩程の者なれば暗み〳〵と常陸の餌とはならざるべし、何とかして神變の術を弄し拙くも預かり、運よくば勝利を得ざることもあらざるべしと云ふ位に留り常陸びいきが常陸の勝を確信するが如くに荒岩びいきは荒岩の勝を確信することは無りしなり。世間の騷ぎこそ勝負は五分々々と稱し荒岩が勝つならんなど唱へれ實際角通の心中には荒岩を危むもの多かりしは爭はれざる處なりし、然るに勝負を土俵上に決するに至つては、全く荒岩の勝に歸し荒岩の秘術快腕今更らながら看客の舌を捲かしめたるを以て、常陸びいきの始めて首を捻ると同時に荒岩びいきは漸く安心の胸を撫で下し荒岩決して危むべきにあらずと確信し是に於て常陸びいきは當一月場所を以て常陸の輕重を定めんとし荒岩びいきも亦一月場所に於て荒岩の常陸に對する相場を確認せしめんと欲し、双方の熱度此に至りて一層を高め、即ち當場所に於ける兩力士の勝負こそ看客の熱心をして全く沸騰點に達せしめたるものなれ、因て其時よりのちの半年間地方興行に於ける成蹟を調査するに勝星の數は荒六、常陸四位にして精密に調査せば或は荒の勝六以上に登り居るやも知るべからず、之を以て荒が常陸より優勢にして次の場所に必ず常陸を再折すべしとは斷定しがたきも五月場所に荒が常陸に勝ちたるを以て僥倖なりとすべからざることは既に證明され當場所の勝負は益々汗を握らしむるの思ひあらしむるなり、且つ荒岩の得意は『掬ひ投げ』にして地方の勝負に常陸を敗りたるは十中の八九は皆此掬ひ投げの手なりし而して五月場所に常陸を敗りたる手も此掬ひ投げの殘りたる處を隙さず突き倒したるにてありしを思へば常陸に取りては此手こそ第一に恐るべきものなれ、更に常陸が荒を破りたる手としては著るしき定術なく概ね『寄り切り』にあらざれば荒よりの踏み切り多く單に力相撲のみに留りて荒に取りては左まで恐るゝに足らざるものに似たり、斯の如き取り口は荒が熱心に耐えて足を捲けば少なくも預かりを取ることは難からざるべく、然ればにや地方の勝負に往々預りとなりたるものあり、是等は常陸の優勢なる場合に荒が棄て身に行きたるもの多かるべく、之が爲めに此預りを控除して勝星の荒

に多くなりし原因とも爲りしならん、但し荒の投げに行きたるを常陸が体に優りたるだけにアビせかけて敗を免れたるものもあるべく、預りは双方に五分々々の勝を逸したるものとして要するに荒の勝星多かりしは誣がたき處ならん(然れど此時は荒が敗れたり)

◎荒岩と朝汐　荒岩が最強敵と思はれたる朝汐も既に兩度の敗を取りたれば、看客は忽ち朝汐を輕んずるの心を生じ荒岩對朝汐の勝負は最早論ずるに足らずとしたるものゝ如し、然れども是れ大早計なり、荒岩の朝汐に對するは實は其常陸に對すると甲乙なきものなるべし、常陸と朝汐を比較し梅の谷と朝汐を對照し、朝は梅よりも、常陸よりも劣りたるべきを以て、無論荒に對して論ずべき處なしと云ふは、其當を得たる說にあらず、力士は体質と取口とに依りて所謂『合ひ』の惡きものなり、荒に取りては朝の如きものを最も扱ひ惡き力士となし、萬一朝よりして注文通りに取り組まるれば之に勝つことは勿論、七分は荒の敗に歸せざるを得ず、此所謂朝の注文とは右に上ハ手を引くの得意にして若し朝が十分左を指して右に上ハ手を引きたりとすれば、今日とても之に必勝の力士あらざるべし、然れば荒の朝に對するには頗る早術を要し、朝をして右に上ハ手を引

くの暇なからしむるに在り、現に地方に於ける兩力士の勝負を見るに朝の荒に對する成蹟は却て常陸よりも好成蹟にして勝負の數、殆ど五分々々に近く縱令荒にして優勢なりしとするも、四分六分と云ふことは難きに似たり、殊に朝が荒に勝ちたる取り口を見るに地方に在りても常に右に上ハ手を引きたる時にありて即ち『上手投』の一點張りなることは新聞紙の勝負付を通覽したる人の殆ど奇なりとする程のことならん、既に時代の去りたる朝との勝負は其常陸に對する如き熱心を以て迎ふるものなきは、已むを得ざる勢ひなりと雖も眞に角力を見んと欲する人は此一番の勝負も輕々に逸すべからず

◎常陸山と梅ヶ谷　梅の取り口次第に大成して先年一月場所に常陸と引分けたる時に於ては五月場所こそ梅が常陸を敗ぶるの日なれとは梅びいきの一口に唱へし處、梅びいきならざる人も五月場所には梅の勝べき時代も來たるならんとは許して待ち設けたる場所なりしが梅の進境は未だ其處に至らず脆くも土俵の土を手にするの屈辱を受けたるは忽ち梅の相場を暴落せしむるの不幸を見るに至りたりき、梅が年々に進境に向ひ朝汐も源氏山も逆鉾も到底及を向ふること能はざるに至りたるは事實なりとするも、常陸山に對

しては尚ほ一着を輸するならんとの觀念は再び五月場所に依て看客の頭腦に注入され、次て五月以來の地方巡業成蹟を調査するに是れ亦常陸に六以上の成蹟を占められ居るものゝ如く、次の一月場所の勝負も之に準じたる四分六分が定評となりたるは梅に取り遺憾限りなかるべし、(然れども今は梅が常陸を凌げり)

◎梅の谷に朝汐　地方興行中の成蹟は梅八分朝二分なるべし、梅が連場の大相撲に皆朝汐を敗りたるは既に其處に進境したるものにして地方の成蹟七分三分なるは之花相撲たるの所以にして實際に梅をして堅固に相撲はしめば、十の八九番は梅の勝に歸すべし、朝の望む處は例の如く右上ハ手を引くにあれど梅の如く腰の幅廣くして且つ腹の張り出したる敵に對して朝の右も易容に引くこと能はず、强て引かんとすれば腹に上せらるゝか、又は一擧に突き飛ばさるゝの恐れありて勝負も大抵豫想し得られたるものなり。

◎常陸山と國見山　疑問なるは國見山なり、体格は益す發達し元氣も愈々盛んなりとは地方巡業先さよりして同行年寄等の消息に聞く處なるが、其成蹟を調査するに未だ豫期したる丈の進境に至らざるものゝ如し、脚部の負傷も早く癒治したるにも拘はらず、今

に至つて未だ著るしき進境を成蹟上に見る能はざるは好角家の頻りに怪訝に堪へずと稱する處なり、順當に進まば今日は東方力士に對しては常陸を除くの外は朝汐も逆鉾も稲川も殆んど朽を挫くの勢ひあるべき筈なるに是れ等の力士に對しては尚ほ然る能はず、殊に常陸山に對しては殆んど勝算なきが如きに至りては國見山の爲めに大に疑はざるを得ざるものなり、國見が幸ひに人氣の鼓舞に依りて常陸山の傲然たる虚に乘ずるを得ば或は以て勝を制すること無きにあらざるべきも、立ち合ひに五分々々の取り口とならば好角家の國見に望むごとき滿足を得ること能はざるべし、因みに記すべきは常陸と國見とが先年土佐高知に於ける勝負なり、此勝負は珍らしく國見の勝に歸したると其土地が國見の生國たりしと常陸の敗が踏み切りなりしを以て世間は之を常陸が國見に馳走したるならんと評するものあり、之れ道理ある推測にして斯ることなしとも限らざるべし、然れども常陸は土俵上に寸毫も假借なき力士なり、京都に於て大碇の情を容れず獨り之を敗りて京都の新横綱を屈辱せしめたる程の傲骨漢なり、縱令國見の生國土佐高知の相撲たりとも故意に勝を讓りたりとは斷定しがたきものあり、此間の消息は當時高知に於る

國見の人氣纏頭の多少を聞くにあらざれば、我も亦判定を下す能はざるものあり、然れども當時國見の人氣盛んにして勝敗に依りて纏頭の相違數百圓に上る如き豫算あり、且つ當地の人士が平生角力に熱心の餘り常陸にして若し國見を敗る如きことありては全体の興行人氣に防害を與ふる如きことありたりと假定せば或は年寄等の懇請を容れて常陸の讓ることなしとも云ひがたきものあれど、然からんには分、預り位ひに止まるべく、全然常陸の敗をまて年寄等の要請すべき權力を有したりとは信ぜられず、要するに此勝負は國見の勝を眞實のものと見るを至當なりとすべく、世間の之を八百長相撲なりと評するは、却て穿鑿過ぎたる言ならん。

◎大砲と常陸山　地方の成蹟は引分けの一點張なり偶ま勝負ありとしても要するに五分〳〵に過ぎず大砲に取りては常陸の恐るべきにあらず、亦侮るべからず、常陸に取りても亦同一の思ひあり、双方堅固に相撲へば終に引分の外に術なし、或る年五月兩力士對顔の朝、我大砲の稽古を見しに彼松ケ關を受けつゝ叫んで曰く『サア三十六貫押して見ろ今日は一番遣つけなくてはならない』とは常陸を想起しての言なりしならん、此を

去つて我亦常陸山に某所に逢ふ、常陸曰く『今日からが大敵で御ざいます三日とも負けませう』とは、大砲、梅の谷、荒岩と巡べて控かへたるを指せしものなるべく、大砲の氣や盛んなり、常陸の言や謙遜なり、然れども其組や大砲に手なく『今日は遣つける』了簡なりしと雖も常陸能く耐えて如何ともしがたく、常陸口には謙遜すと雖も心は必勝を期せるものゝ如く勇猛奮進滿身の汗をそゝぐに至りしと雖も、所謂三十六貫如何とも致しがたく兩士必死の攻め合ひも結局は引分に了りたりき。地方巡業中の成蹟に引分けのみ多かりしも亦已むを得ざる勢ひなるべし

力士の隱し藝

好角翁

裸百貫、無藝大食、只土俵上の働さへ怠たらざれば大手を振つて天下を横行し得られたる力士社會も、世の華奢に隨ひ時の流潮に驅られて藝人と云ふ部分に入れられ、酒席に呼ばれてれ客の機嫌を取り結ばざるを得ざるの今日に至りては小歌の一つ手踊りの半

分ぐらゐの心得では却て力士の仲間入も出來ぬ仕合はせ、之は賞むべきことか嘆すべきことか夫等の理屈は今此で論ずべき處でないとして、現今の力士等が土俵外に於ける隱し藝を素破拔たらんには面白かるべしと之に逢毎に聞て見たり、之を呼ぶ毎に注目して見たが矢張り小歌の一つ、手踊の半分ぐらゐは誰れでも遣ります、花合せと食ひ競べ、甚句磯節で其場を逃げると云ふくらゐに留り、美事に其秘密を素破拔て滿天下の好角家を驚かすと云ふ珍說も探り得ずに仕舞たのが、實体の白狀であるが、又一つ二つ書て見やうと思ふものもないのではない、最も力士の隱し藝として、若し藝と云ふを得べくんば例の賭博と藝妓荒しとについては隨分珍說も無いこはとない、然し之は新聞紙の雜報に讓るとして此處ではれ座敷へ出しても差支へのない隱し藝の一ッ二ッを書て見やうと思ふ。

◎荒岩の角力甚句論《附三味線の堪能》

荒岩は角力の器用なる男だけに外の事に懸けても小氣の利た方である磯節などを歌はせては之が鬼神をも挫くと云ふ力士の聲とは何しても思はれない、併し是だけの事は小錦もやる、谷の音もやる外にも遣る力士が澤山

あるから驚くことはないが只驚くのは荒岩が三味線を彈くことである、彼のは單彈くのではない、寧ろ上手の方である所謂段ものとか曲彈とか云ふ專門藝は出來まいが端物を彈かせては立派に其堂に入つて居る、生なかな藝者は撥を喰はへて引き去からざるを得ぬ程である、此事は好角藝者どもが噂さして居たのを屢ば耳にはしたが彼も藝者計の席か差向ひの眞猫遊びの時だけには興に乘じて遣たものと見ゆれど我々の席では容易には遣なかつたのである、然るに先年の五月場所九日目即ち常陸山に勝つた夜の事であつた、丁度好角萬歲會と云ふを藥研堀の大又に發會した席へ呼ばれて來て其席で好角家の勸めに依り自分も此日の愉快甚だしきに浮かされて大いに隱し藝を露出して終に三味線まで彈て聲かせたのであつたが、其時大又の女將が階下から上つて來て吃驚して何とも云はずに立つて居たから一人の客が何したのかと尋ねたらば、今下で聞て居たらば三味線の音締が何も藝妓衆と思はれなかつた誰が來て彈て居るのかと疑つて見に參りましたのでしたが荒岩關が遣て居たので驚ろいチマッたので御ざいますと云つたことがある、少しはれ世辭もあつたらうが兎も角荒岩の三味線は他の一ットや的にあらざることが知られ

て居る、又或る時に荒岩を始め四五人力士のが我々の席へ呼ばれて來て一同で角力甚句を踊つた事があつたが、其時に荒岩の角力甚句論と云ふのが始まつた、自分で研究したのか誰かに聞たのか一寸面白い理屈だと思ふから此に書て見やう、

『角力甚句と云ふのは踊りてはない、元來力士が土俵の上で踊りを踊るなどゝ云ふ不見識は無い筈だ、又土俵の上で踊りを踊るなどゝ云ふては土俵の上の神聖を汚すと云ふものだ、アレハ踊ではない角力の摸型を演ずるのである、即ち手を拍つは土俵上にて塵淨手をつかふの摸型で、向ふへ出す手は即ち敵を突き出す摸型、後へ引く手は即ち敵を引き込んで四つ身に爲らんとするの摸型、終りに足ぶみを爲るのは即ち力足を踏み、シコを固める摸型である、然れば甚句踊りの本行は只左右の手を上げ下げしつゝ手拍子を打つものと心得るは間違つて居るので、先づ手を拍つてウンと向へ突き出し再び其手を引ひてウンと足を踏み締める、之が本とうの角力甚句で力も入り活潑でもある、自然角力の手にも愜つて居る、是れならば土俵入りと同一のもので、土俵上で遣ても少しも神聖は汚がされない、宛も馬術の摸型、擊劍の摸型を演ずると同樣で、曰はゞ古實を演ずるやうなものである、然ればこそ關東では一般に甚句と云へど關西にては單に『かた』と云つて甚句とは云はぬ處がある、要するに甚句は歌の節の名で之を角力の『かた』に合はせて歌ふものと云つたらば差支へなからうが、甚句を踊ると云ふことは如何にも不服である』

是が荒岩の角力甚句論で、一寸聞けば牽强附會のやうであるが實は立派な論で全く此通りであらうと思はれる、特に關西では之を『かた』と云つて甚句と云はぬと云ふ引證があつて見れば、益す確かな說で甚句の原理が荒岩に依て發見されたと云ふのは一寸面白い話ではないか。

◎大砲の五目並べ　世間の大砲を見る目は全く違つて居て之を無藝大食の標本、大男總身に智惠が廻り兼ねの的證として想像して居るが、彼は決して世間の思ふ程の痴鈍ではない、相應に理屈も云ひ禮義も知り、客の座敷へ出ても話の相手が勤まらぬと云ふことはない、特に彼の隱し藝として感心すべきは當時流行の五目並べである、相撲年寄等は雷、高砂等を始めとして何も圍碁の横好に評判を取つて居るが、力士連中にては此な綴

関ノ戸
伊勢ノ海
友綱

漫ことは遣るものが少ない、其中に五目並べだけは雨中の徒然、客席の時間塞ぎなどに遣ることもあれど何れも幼稚極まつたもので二三手先きは見えぬのである然るに此な事には一番智慧の無さゝうに見える大砲が却つて一番に強いと云ふのは妙ではないか當時東京の力士中で五目並べでは大砲に敵するものはなく、之れも亦大關であるが併し何の位ゐ強いかと云ふに先づ普通人の、五目並べを遣ると、云ふものに敵する位ゐで、強いと云つても無論力士仲間の比較である、然ど五目並べの話が出れば力士等は誰でも大砲關が強いと云つて居る、地方巡業中などに惱まされて居るも

阿武松
雷
鬼面

のと見える。序てながら大坂力士には相應に五目並べを遣るものがあると見えて先年の夏に大坂力士秀之海八陣の一行が東京で興行した時に一夕彼等の數名を某酒樓に呼んだ際、酒間に五目並べを闘かはした事があつたが誰も彼も相應に並べる中に大岬と云ふのが中々強ものであつた、次に貧乏神の彼の大林も東京の大砲ぐらゐは打てるやうであつた、秀の海とも遣て見たが之は大砲よりも弱いやうだが、其他も東京力士に比較しては總体に強いやうであつた、併し此の隠し藝よりも本藝の角力は東京が強いので聊か氣強く思つたことがあつた。

◎源氏山の書《附年寄等の手跡》　源氏山と云へば女と賭博にかけてのみの評判高く風流とまでは行かずとも小歌の一つを歌つたと云ふ話しも聞かず、飛だ話に乗らぬ男とのみ思ふ人もあらうが、之が隠し藝に書を書くと云ふは誠に破天荒の報道なるべし。とのみにては首肯せざる人も多かるべしと思ひ、此處にて同人の書を讀者に紹介せんとの考へを起し、或る日、酒席にて彼を煽り立て『關取りは書を書さうだが此て一枚書て見ては』と逼つた處が彼は私の書などを何になさるのですかと反問したから『力士の隠し藝を探すだのから』と不圖本根を顯したので同行の一人が『イヤ源氏關の隠し藝は書よりも外にあります』と交返へしたので源氏山苦笑して『イヱ彼の方は隠し藝ではありません、本藝で御ざいます』と答へた、是は賭博の事を指したので之が爲めに調子が外れて其場では書を書す事が出來ずに仕舞たので此處へ登ることが出來ずに了つた、之は其中に再擧を計ることゝし、代りには現今の年寄等に自筆で業名を書したのを内々で出さうと思ふ甘い拙は評すべからず是も彼等に取りては一の隠し藝に過ぎないのであるから、又當今新聞紙や雜誌にて流行する名家筆跡など云ふものとは性質が違ふのであるから。

此外に力士等の隠し藝は逆鉾の鐵砲と弓、小錦の二上り新内、立花の出雲節と三味線、若者頭大綱の將棋初段の如き皆此仲間中にて評判し得らるゝものであるが是と云つて逸話に登すべき程の個條がないので書くことが出來ぬのである。

滑稽相撲一夕話

好角老人

之は或る夜、雷、阿武松、故關の戸、伊勢の海等と快談の際、其もの等が自身の物語りの中から記憶を呼び出して書た滑稽談である

○高砂浦五郎の夏袍　高砂の物故せしについては種々の逸話が新聞や雜誌に見にたが、未だ何にも出ぬ滑稽談がある、其中にも高砂の氣象を全て描き出した滑稽談と云ふは、彼が脱走組を率る來つて初めて東京に旗幟を樹てた當時の事であるが、東京は未だ大相撲の爲めに固められて居て、高砂が始めて下谷對州が原での興行も思はしき收入もなく一貧洗ふが如き境遇に陷りたれば、自分等夫婦の物品は云ふまでもなく部屋力士の衣類

までも大抵は質屋へ運び盡した上に常州土浦の興行に又々大失敗して歸京する事も出來ぬ場合ひとなつたから、大抵のものならば悄々と逃げ歸るのであらうが、流石の高砂ゆゑ態と大利益を占めたと云ふ顏で、アケ荷《化粧廻の葛籠》を七疋の馬に付け悠々と歸京の途についたが、其アケ荷の中なる化粧廻しは悉く土浦の或るものに典物して葛籠の中は一切薪雜木を容れてあつたのである、然し其當時は交通不便の時であつたから、東京では高砂が大層土浦で利益を得たやうに評判したさうだ。ソレから程なく東京相撲と和解が整ひ高砂の勢力が段々と加つて來た時であつたから、其合併興行には一番花々しくやらぬでは外聞に關はると云ふので、部屋力士を始め夫々關係のものへ仕着を出すことに極め之を女房に相談したから、女房は據なく百方金策をして見たものゝ、立派に太物屋へ注文する丈の金策がつかぬ處から、越後の縮屋某と云ふものに少し計りの內金を渡して出來合の浴衣地數十餘反を借り入れ夫を仕立て力士等に與へてやつたが、其頃は五月とは云へ雨ふり續きの爲めに時候薄ら寒き日多く、爲めに力士等は折角貰た仕着の上に汚れた布子などを被り居るので甚だ見憎い事であつた、之を見たる高砂は或

る日大に怒り、野郎どもは未だ汚ない物を被て居やがる、何の爲めの仕着だと叱つたから、女房は取り爲して、雨が降て未だ寒いからでせう、ソンナニ叱らぬが宜ございますと云つたら、高砂は大口を開て、ナニ寒いことがあるものか、己ア暑くて堪らぬと態と大袒を脫で見せたが、高砂の暑いのは當然で其時高砂には未だ夏の仕度が出來ないので冬のまゝなる黃八丈の大袍を着て居たのであつた。

○高砂、女の爲めに大關を一喝す　高砂は女好きの男で女には極優い方であつた、或る日、相撲茶屋高砂屋の二階で馴染の柳橋藝者を呼んで遊んで居たが、此日門下の一の矢藤太郎も高砂屋の下座敷で或る女を相手にして遊んで居たのである、其中に高砂は便所に行かんとて二階から下て來て一の矢の居る座敷の前を通ると、襖越の中で男女が面白さうに酒宴をして居るので、高砂は忽ち嫉妬心が起り微と透見を爲し處が、豈料らんや男は我弟子の一の矢で向ふ鉢卷大肌脫と云ふ姿で女と睦まじさうに遊んで居るので、高砂は吾知らずに襖を押し開き、『藤太郎、鉢卷を取れ。』と一喝したので、大關の一の矢も吃驚して急に鉢卷を取り、肌を押し入れながら、『親方、何處の殿樣がれ出て御ざいます』

と改たまつて問ひ出されたので、高砂も始めて我失敗を悟りたれど、弟子に對して詫も云はれず扨らぬ顔して『イヤ貴樣、女中の前で鉢卷は失禮だ、ソレて鉢卷を取と云つたのだと小便を放ることも忘れて匆々二階へ逃げ上つて仕舞た

○小錦怒つて娼妓を投倒す《治療代五圓の事》　今の取締二代高砂が未だ高見山と云つた時に劍山《今の武藏川》と兩大關で奧州筋を巡業した時、二本松の興行中或る夜、劍山と妓樓に泊て居たが、其夜近隣に火事があつて、高見山も駈つけて消防に盡力したが、鎭火後濡鼠の姿で妓樓へ歸り同樓の妓夫を呼びて『私の定宿へ行ば小錦と云ふ野郎が居るから衣換を持て來いと云つて下さい』と命じたが、其頃小錦は僅かに序の口に附け出された位のもので清淨無垢の男なれば娼妓になぶらして遊ばうと命令を含めて待ち構へて居る處へ、小錦が高見山の衣換を持て來たから年嵩の娼妓は小錦の傍へ行て、『可愛い力士さんだ事』と云ひつゝ凭れ掛た處が、小錦は吃驚、飛び退たと思ふ中に、『コノ阿魔、何を爲るのだ』と引捕らへて平庭へ投つけ面を膨らして酒を飲ずに歸つて仕舞たが、投られた娼妓は其爲めに腰を痛め二三日は休業との騷ぎに高見山は氣の毒に思ひ五圓の治

療代を出してやうやく娼妓に詫をしたと云ふが、其小錦が後に横綱になつて其妓樓の娘を女房にすることゝなつたとは、人間と云ふものは誠とに不思議の動物である。

○小錦、猪に食はれんとす　是れは滑稽談とまでは行かぬが、前章の小錦が始めに淸淨錦が未だ關取分とならぬ頃であつたが、山形より莊內へ巡業の際、幕の中力士は船路を行たが、小錦等の幕下力士は陸路羽黑山の麓を通つて行たのである、其時一行中の谷の川《今の年寄桐山權平》が用事あつて少し遲れて獨り後からたどり行きしに、林の中に呻吟居る行き倒れがあるから傍へ寄て見たらば、圖らざりき先發の小錦であつたから大に驚て介抱しながら樣子を聞くと、小錦は苦しい息を吐き乍ら『私は脚氣て一歩も進ひことが出來ぬから連の連中は先へやつて姑く此て休んで居たが、其中に段々氣分が惡くなつて此に倒れて仕舞たのだが、若れ前が後から通らなかつた時は、夜分になつて猪狼の餌食となつて仕舞た處だ夫に旅費は一文もなし』と涙を覆して話したから谷の川も棄ては行かれず小錦を肩に掛けて一二町歩き出して見たが、其時は小錦も相應に肥太

つたのちてあつたから、之を肩に懸けては歩くことの出來ぬ仕末に或る茶店までたどり付けて小錦を頼み置き、半圓の青札一枚を與へて分れて行たが、翌日此谷の川の知らせにて高砂から迎ひの人を寄越し小錦も無事莊内へ乘り込むことを得たと云ふがそれから、數年を經て小錦は大關と云ふ榮位に昇り谷の川は年寄となつて誰も此時の事は忘れて仕舞た時だが、或る日谷の川が花合せに失敗して動きの取れぬ場合ひとなつた事があつた、之を聞た小錦は直さま金五十圓を谷の川の手へ屆けてやつたので谷の川は蘇生の思ひを爲し其日は醜体を顯はさずに濟みたれば、其翌日となり金子を調達して小錦の處へ持參し段々の禮を述べて之を返却したるを小錦は更らに之を受け取らず、昔貴殿から五十錢を惠まれずば羽黒山の猪、狼に食れて仕舞た處であつた、ソレなり折がなくつて未だ其恩金を返さなかつたが昨日のは其つもりだから返却には及びません』と强て谷の川に收めさせたので、谷の川も流石は大關になつた丈の人だと感心し之を聞き傳へた人も皆敬服したとの事である。

○近代の滑稽力士　近代の滑稽力士と云へば彼鞆の平である、同人は一時大獄と云ふ年

寄となりしも後には廢業して故郷の鞆の津に歸つて鰯の網元となつて居たさうだが、此力士は至つて無筆であつて實はいろはのいの字も書けぬのであつた此話は何かの新聞に出たそうだが序でたから一寸書うが、或る時梅ケ谷《いまの雷》と酒を呑みし席で梅が『貴樣は餘り無筆だ、いの字も書まい』と云つたらば、ナニ、いの字位は書ぬ事はないと云ふので、梅はソンならば、書て見ろ出來たらば一分やらうと云つた處が鞆は早速筆を援て、丶と云點を引て右へ跳さうだから梅は驚いて、サア仕舞た一分取られたと叫びしに、鞆は、ドッコイ其手は食はぬと其點を左へ丶と跳てチョイと小點を加へたから、到底〳〵と云左り字のいの字が出來て海は一分を助かつたさうだ、次はまだ何にも出ぬ話しだが鞆の平の一行が或る地方へ乘り込んで宿を取つた處、鞆は一行の力士に向つて此町に『平村』と云ふ好料理屋があると云ふから、貴樣は始めて此地へ來て能く知つて居るなと問ひしに鞆は鼻を動めかして、ナニ今通つて來た道にあつた家だが『平村』とチャンと書てあつたと答へたので、一行は益す不思議に思ひ、貴樣は字を知らぬに何して『平村』が讀めたかと尤めたれば、鞆は益す得意となつて、平村ぐらゐが讀めぬ

事があるものか、平は鞆の平の『平』と云ふ字で、村は己の宙字、岡村の『村』と云ふ字だと云ふので成程其では讃めた筈だと一行が感心したが、念の爲め宿の若ものを呼て此町に平村と云ふ料理店があるかと聞たらば、イヽエ平村と云ふのは有りません『平林』でございますと答へたから、ハヽア鞆が矢張り村の字と林の字の見分が付なかつたのだと大笑ひとなつたので鞆は苦い面をして『村』と『林』といふ字に違つた處が何處にあると力んだのは益す抱腹であつたさうだ。

○華族の前で女房の自慢を爲す　是も鞆の平の話だが、彼は至極の女房自慢で誰の前にても女房の話を持ち出さぬことのなき男なりしが、或る時ひゐきにさるる莊内の舊藩主酒井殿の前にて酒を賜はりし際、例に依て女房の自慢を始め、私の女房は新吉原第一の貸座敷新萬の花魁で隨分評判の女で御ざいましたと憚りもなく話しかけ、尙ほ段々と抑馴染の初めからを說き出さんとするに、傍らに居たる家扶殿は腋の下に冷汗を流し、屢々目を以て注意したれど鞆は少しも悟らずして終に一代記を興あり氣に話して仕舞たので、其のちは殿樣から、常も『どうだ女房は無事かな』とのね言葉があつて一時仲間が

鞆に逢ふと、『どうだ女房は無事か』と云ふのが『今日』はと云ふ挨拶の代りとなつたさうだ。

○親の仇だ覺悟しろ(伊勢の海)　故關の戸と伊勢の海が力士を率ゐて關西地方を巡業中の話であるが或る宿屋で女按摩を見かけた處が其女按摩が中々の別嬪で兩眼ともに滿足し且つ年も三十前後くらゐであつたから伊勢の海は私かに之を小蔭に呼び何事か秘密の談判に及びし處、豈に料らんや早くも關の戸が先約を結びたりしとの事に伊勢の海は嫉妬の念に堪へず此上は何か故障を入れて關の戸の約束をも破談にしてやらんものと暫く考案を凝して夜に入るを待ち居たるが軈て夜に入つて其女按摩が關の戸の室に至るを伺ひ伊勢の海は白地浴衣の尻を引からげ手拭にて後鉢巻をなし有合はしたる洋杖を一刀に形どりて腰に横たへ、今しも關の戸は餘念なく例の女按摩に肩を揉せて居る處へ飛び込み腰の一刀ならぬ洋杖へ手をかけて大音聲を張上げ『關の戸、覺ゑがあろう三年跡に殺された親の仇だ覺悟しろ』と叫んだので、關の戸よりも女按摩が驚き。忙て階子段を落る計りに逃げ延びたので伊勢の海は大に溜飲が下り『何だ關の戸、仇討は旨からう』と

云へば、關の戸は苦笑して『ナニ貴樣が旨めへものか』と之れにて女按摩は再び來らずなつて仕舞た

○關の戸の乳、故關の戸の住宅は本所區千歳町にあれど年中地方を巡業して歩くか又は在京中も協會へ詰かけ居りて自宅に居る日とては甚だ少き處から近處の小供は關の戸の顏を知らぬものが多いのである、或る日の事だが昼間少し用事の際があつたから近處の錢湯へ出かけ、今しも裸体となつて風呂の中へ入らんとせし處、水船の邊に八九歳の小兒が遊んで居て關の戸の乳の婦人の如く垂れ下りたるを見てれ叔母さんと云はんとせしが再び顏を見て『なんだれ叔母さんぢやネエや。れ叔父さんだ』と獨言したには關の戸も覺にず一笑したりと當人自身の物語りてあつた

○高砂の艶福　目下は檢査役兼取締として第一番に老實を以て目され居る二代目高砂が未だ高見山と云はれて居た比は中々の艶福家であつたさうだ、或る時岩手縣下の盛町と云ふ處へ一行と共に買れて行て興行中の事であつたが丁度其土地が蠶祭で近隣の男女はれ化粧やら衣飾るやらして夜に入るまで人出が多く町内が中々の賑であつたから力

士達も夜に入てから定宿を出て此處彼處と散歩して居た中にも阿武松の高見山は獨り村端の方へ差かゝつた時、一人の立派な年增が言語を懸けて終に何れにか引張て行つて何か面白い話があつたさうだ、それから其年增に別れて再び散歩して居ると今度は十七八歳の新造に行き合しが之も高見山に言葉を懸けて同じく桑畑かなんかへ引張行たそれから又其新造に別れて歸途につかうとすると又もや一人の婦人に引張られて到頭三人の女に可愛がられたから定宿へ歸つて後も獨り笑壺に入りて大々的の好男兒に爲た積りで愉快顏して居ると追々に歸つて來た力士が何れもにこ〳〵して愉快さうな面をして居たが其中の一人が終に口を切り出し、今夜は己は不思議に艶福家となつたと云ふので高見山が其譯を聞たらば、其力士は二人の女に引張られたと云ふ、其次の力士は己は三人、己は四人と各自同じやうな事を云つて高見山よりも更に艶福家があるので之は不思議だ一同が狐に誑されたのではあるまいかと夫となく宿の人を呼て聞て見たらば、此土地には云に云れぬ蠶風があつて蠶祭には細君でも娘でも多く男に逢ふのを目出度と稱し蠶が當ると祝し亭主や父が公然許してやつたものださうだ、斯る蠶風は今日では改まつたと

てあらうが、當時は全くの話であつたさうて阿武松自身の話だか、間違はない、些いかゞはしき話だが、隱約書て置位は差支へはなからう

○切符で花魁買ひ　今一つ高見山の艶福談を書う、彼が宮城縣下仙臺で興行中のことであつたが、時の知事故成川尙義氏が同郷(上總九十九里なり)の好みで大層高見山をひゐきにして毎夜酒席に呼だのちには、自筆て切符を書てやつて夫を持て行て何處の妓樓へても勝手に上らせ後で成川氏が勘定を爲てやると云ふことにした、之は現金でやると賭博に耽けるの弊があるからの事ださうだ、ソコて或る晩に成川氏の恩顧厚かりし中庄と云ふ妓樓へ登り其樓のれ職でれ金と云ふ別嬢を敵娼にしたが成川氏のれ聲がゝりと云ふので非常に待遇がよかつたさうだが、軈て翌朝となつて高見山は後朝の別れを惜つゝ其樓より相撲の場所入をしたが、此日も成川氏は棧敷で見物をして居たから高見山は例の通り御挨拶に行た處が成川氏が突然『どうだ昨夜は好遇たか』と問ひ出したので流石の高見山も急にノロケも出ず據ろなく『ナアニ酷く冷遇ました』と答へしに、成川氏は顔の色を變て後に居た男を顧みながら『中庄、貴樣に能く言つけて置たに何故ソンな事を

させた』と不興氣に小言を云たので、中庄は大に驚き早速棧敷を下て木戸を出て行たが軈て立歸り來り『關取の云ふのは悉皆虚言てございます實は是〳〵て後朝の別れを惜んだ位だそうてございます』と一々高見山の痴話を證據だてたから、成川氏も機嫌が直り『貴樣は切符だから冷遇と云ふだらうから、是からは現金だ』と早速若干かの祝儀を包んてくれたので高見山も今となつては極りが惡く漸やくのテレ隱しに『ナニ旦那さん私は彼位の好遇かたでは冷遇たのだと思つて居るのです』と言は言つたものゝ腋の下には冷汗を流したと之れも阿武松自身が此程の懺悔話しであつた。

○金歯を飲む　別章に年寄の冷水ならぬ豪飲豪食談が見えたが此にも少し滑稽に屬する飲食談を書う、檢査役で金歯を入れて居ると云へば知つて居る人は知つて居るだらうが、或る時のことに大勢で食競をやつたさうだ、然るに餘り急いだ處からして此男が金歯を呑み込んて仕舞たから、サア大變何したらば出るだらうと評議すると、一人が其まゝ棄て置けば大便と一處に出るから其を取り擧げて再び用ゐればよい、と云ふと大便と一處に出たものは再び口へは入れられまい、と云ふ說で排斥された、それから色々の智

慧を揮つた後に之は吐き出すのが一番だと云ふので目を黑白にして大苦しみて吐き出した處がむさい事には今食た菜ばかり出て金齒は一向出ずに仕舞たさうだが其後のことは聞かず。

○二升の鹽辛　或る年、銚子の興行を終つて利根川の汽船へ乘り込み歸京の途につく時てあつた、關の戸は好物の鹽辛二升を樽へ詰て家へ持て來る積りであつたが日和の宜のて自分は甲板へ出て四方の景色を眺めて居たのちに十二時の晝食となつたから關の戸は秘藏の鹽辛を飯の菜に取り出した處が樽の中は水計り殘つて居て鹽辛は少しもないので誰かゞ徒づらに外の器へ出して置たのだらうと思ひ、誰だ〳〵惡ひ徒をせずに早く出せよ〳〵と逼るに居合はした力士連は只クス〳〵と笑つてのみ居る中に同行中の伊勢の海が『親父そんなに憤るなよ外の關取等が二升の鹽辛は迚も食へぬと云ふから私が皆な食て見せたのだ』と云はれ豪食では誰にも引は取らぬと云ふ關の戸も之れには舌を卷て慙いたと之も自身の話であつた。

○澤庵五十樽　力士社會の所業は隨分馬鹿氣たことがあるが最も馬鹿〻〻しかりし話は

先年横濱にて興行のあつた時だが土俵を築くに米の空き俵を買んとしたるに之れは或る年寄の手相撲(自分にて勸進元を爲たこと)であつたので、土地の人から邪魔をされたのか又は實際空俵が拂底であつたのか俄かに買入れることが出來ず强て買はんとすれば格外の高いことを云ふので其年寄は意氣地になり、ナニ横濱で買ぬならば東京から取り寄せる計だと幸ひ東京へ歸る人のあるので其者に傳言して俵を五十俵送つてくれるやうに と相撲協會へ申越したが協會に居た年寄等は横濱で俵の五十俵や百俵の買へぬことゝは夢にも思はれなかつたので、之れは傳言の誤まりて澤庵を送れとのことならんと早合點し早速澤庵五十樽を送りやつたので横濱に居た年寄も大に驚いたが其中に初日も近き再び米俵を東京から取り寄せる時日も勇氣もなくなつて結局、高價の米俵を横濱で買ひ入るゝの段となり澤庵五十樽を持て餘して仕舞たと云ふが横濱から東京へ俵を注文するものも變りものだが、僅か五日か六日の興行に澤庵五十樽を送つた東京連中も餘り無計算で到底他の社會では想像の出來ぬことだ、併し本場所の開場中には日々澤庵數樽づゝを明けると云ふは事實だから、五十樽と云つても只計算の多過ぎたと云ふだけて、此社會

ては然まで不思議とも思はれなかつたのである。

○鮨の御馳走　相撲興行中には、回向院の門前に出方《棧敷賣の下に就て使はれ居るもの》と稱する者が立廻り居て見物に來る客を引くこと昔芝居道にて河童と呼びしものに似たるは看客の皆な知る處ならんが、此出方も新參では目が利かず相撲に關係して居る人の袖を引て大に恥かしめられる事がある、今の立行司木村庄之助未だ誠道と云ふた頃てあつたが樂屋入りをせんものと回向院門内へ歩んで來と例の出方で五月蠅袖を引くものがあるから誠道は一つ遊んてやらんものと態と其出方に引かれて或る棧敷で見物して居ると、鮨や菓子などを進めて來たれば、之も云ふがまゝに食盡したるのち軈て自分の番となつたので、誠道は行司部屋に行て仕舞たが其後へ廻つて來た例の出方は自分の客が見えなくなつて仕舞たのてキヨロ〳〵して諸方を尋ねて居ると傍に居た塲馴た出方が、れ前の連て來た客は土俵に登つて居るてはないかと云はれ變だなと土俵を見れば其客は杜杯を着け軍配を採て、ハツケヨンヤ〳〵とやつて居るのてハツと思つて自分の失策を恥ち入つたれば鮨や菓子の代價を請求することも出來ず泣き寢入になさんとせしを、誠道も餘り氣の毒に思ひ後に其代價だけを出方に拂つてやつたさうだが、之れは今ても出方中の一ッ話しになつて居る。

○猪口を嚙る　今ては故人となつたが綾瀬川が大關の頃であつたが關脇の荒虎と云ふ元氣の好力士があつた或る時、客に呼ばれて龜清樓に行た處が其客が酒癖が惡くて種々の難題を持ち出し散々藝者等を困らした上に荒虎の前へ猪口を獻したは好が更に杯洗の水を庭へあけて之に酒を滾々とつがせ、『どうだ關取杯は肴にして此盃洗の方で酒を呑んて見せぬか』と云はれ、荒虎は憤としたる顏て其處等にあつた盃を幾個も集め之をガリ〳〵嚙碎きながら盃洗の酒を鯨飲したので流石の酒癖客も之れには膽をつぶし終に荒虎に詫を入れて自分は酒を止て仕舞つたと云ふが今の年寄伊勢の海も若盛りには酒興に乘じて盃を嚙み碎いたこともありしと自身にての物語てあつた。

○力士は幇間にあらず、前のは滑稽談とも行かず是も滑稽談とは行かされど序でなれば書て置かう、八幡山が盛りの頃に大勢の力士と共に客に呼ばれて横濱の佐野茂へ登つたが、軈て牛飲馬食の大騷ぎとなり他の力士等は藝妓に打ち雜つて相撲甚句など躍つて面

白く座興を添へしに、八幡山のみは少も躍りも歌もやらぬのて或る人が、關取は聲も好し甚句は得意だと聞て居るが何ぜ默つて居るのだと聞たら、八幡山は左右に頭を振り、力士は幇間ぢやなし、れ客の座敷で歌つたり踊つたりするものてはありません、仲間のものと遊びに行けば隨分惡ふざけも致しますがれ客の座敷でナニモ私等が踊り廻はらずとも藝妓がチャンと踊つて居ます、强て私等の藝が御覽なさりたいと仰しやるならば、明日場所にれ出て下さい、隨分勉强してれ目に掛けませうと云つたそうだが、之れは高砂の持論で力士が座敷を務めるは不可だと云ふ說を八幡山が實行して居たので、時に取て不興てはあるが一見識は確かにあつた力士だ。

東西南北　漫嘲樓主人

○四角の土俵　南部地方にては四角の土俵を用ゐ其他諸事東京の相撲と儀式習慣を異にせり其由を譯ねるに往時南部出身の行司に長瀨越後守と稱せる人あり京都に在りて時の

行司職吉田追風と權威を爭ふほどの身分なりしが或る年の節會相撲に追風と確執を生じ鄕里盛岡へ歸りて別に相撲組合を組織したれば南部地方の相撲道は自づから長瀨越後守の司どる處となり東京相撲たりとも南部地方に至りて興行する時は總て其指揮に依り土俵までも四角のものに隨がはざるを得ざりしなり、京都方即ち吉田追風は方屋の行司にて其土俵は素より圓形を用ゐたれど長瀨越後は寄方の行司、且つは追風に反對したるものなれば南部に歸るや先づ土俵を四角となして著しく反對の實を示したり、其他當時の樣は今より想像し難きものあれど近年まで行はれたる土俵上の有樣を見るに土俵上の兩破風には薄板にて作りたる鯱を揭げ之は不細工なる赤紙又は萠黃紙にて張り粧ひたり、此鯱は即ち長瀨の後胤と稱する人より借り受け之れなくては相撲の出來ざること恰も東京の櫓太鼓の如きものなり然れば十年前までは行司も東京風のものを用ゐず長瀨の後胤と稱するものが從五位下御行司職の資格を以て土俵外に床几を据へ烏帽子直衣に中啓を握て控へ居り勝負も團扇を用ずして中啓にて判定したりし。

長瀨が西方の行司たりしゆゑを以て力士は總て西方を重じ隨つて東方を卑しむの風あり

故に東京力士の同地に乗り込む際には故意と人氣ある力士を西に廻し東方は成るべく風采容貌の揚らざるものを用ゐて看客を悅ばするの手段を講ぜり特に可笑は行司が軍配を引くにも東方には單に東の相撲何某と云ひ西方には西の御相撲何某と稱し別に御の一字を添へるを常となせり斯る有樣なれば看客は西方の負けたる時は非常の惡感を抱き東の負けたる時は大に悅びて其負力士が仕度部屋へ引込むを待ち花道までも立ち塞り我右の手首を左にて握り右の食指を出して力士の顏先きに突つけ『碌なし〳〵』と呼び更に其指先にて力士の顏を打つ眞似し『ゼー〳〵、障らなけれや、よいちやらう』と異口同音に叫び終には仕度部屋までも押し寄せて叫び廻れり若し力士にして之を尤め抵抗する如きことあれば直ちに爭鬪を起し血の雨を降す如き大事を惹き起さゞることなきにあらず先年東京の力士、中田川と云へるは之がために大爭鬪を爲し自己も負傷し人にも負傷せしめ懲役十年に處せられたること、あれば今日にては東京の力士は此『碌なし、ゼー〳〵』に對し少しも抵抗する事なく却て面白きことゝ思ひ居れり。

同地方にては千秋樂の日、三役は三番勝負を取ることに定まりあり之を『一德三番』と

稱せり又力士たるものは大關を除くの外は關脇までも初切の如く跳廻る相撲を取らざれば看客の意に滿たず若し四つに組て動かざる如きことあれば『離れろ〳〵』と叫び夫にても離れざれば看客は臀を土俵に向けて辨當を食ひ初め此相撲は見ずに了るを常とせり扨は四つ相撲のみ得る力士を輕んじて『彼は足の裏を見せぬ』と唱へ飛び上つて足の裏の見ゆる如く相撲ことのみを賞美せり。

○京阪力士の風儀　曾ては京阪より名力士を驅出したるも近年京阪の力士は大に衰退して先の大阪の横綱八陣の如きは東京の十兩力士だけの技倆なしと云へり、東京の力士は最負客の家へ伺候する時と雖も力士は只酒の馳走になりて歸るものと心得居り翌朝の稽古までには必ず部屋に歸りて稽古するを常となせり然るに京阪力士は多く宿屋、料理店の如きものに出入し三日も四日も甚だしきは一月も其家の寄食者となり部屋に歸りて稽古を勵げむ心なし。然れば其料理店等にても力士に掃除を命じ用事を達さする如きを伊達の如く心得、少しも出世の道を勸むることなし之が爲めに力士は終に本場所より本場所まで料理店等にゴロツキ居り碌々稽古もせずに土俵に上るものあり、誠に惜むべき惡

風ならずや、東京の力士にて曾て大阪に脱走し或る料理店に寄食居たるものあり或朝、据風呂の殘湯を擔桶にて酌されたりとて『れ江戸の力士に此な樞助の眞似が出來るものか』と憤慨し再び東京へ逃げ歸れりと云へり。

○開け放しの場所　秋田地方は城下を除くの外は相撲興行場に別段の小屋建をすることなく小松原などを場所に充て四方の區域には松より松へ繩を廻らして境をつけ木戸口のみ松ケ枝などにて疎に圍を爲せり然ども人氣醇朴にて相撲は無錢にて見るものにあらずと極はめ四方の圍なさも決して域區内に入り込むものなく又通行の人とても外より立見するものなきは珍らしき風儀なり殊に此地の可笑は相撲の見物には晴天にても大抵は蓑の簑と蓑の頭巾を脊負ひ早曉より辨當を腰にして押寄せ途中より雨の降出せる時とても決して入れ掛として中止せしむることなきは要意よきことなり。

○簑笠の見物　相撲場は異狀なさも見物人は矢張簑に頭巾を負ひ雨天となるも歸ることなく見物中は冷酒を傾けつゝ干鯡を生のまゝ嚙り居れり然れば打ち出し後には毎日小屋の中は鯡の骨、屑等に滿たされ之を集むれば小山を爲に至る。

○顔を見せず　仙臺は古より名力士を出したる土地だけありて總て整頓し居り然して東京附近に異なる處なさも只異狀なるは札場の構造なり（木戸札を賣る處）先づ板又は帆木綿にて之を圍ゐ賣買口としては胸に當る位の處に横一文字の窓を開き此より札の賣買を爲し客と興行人とは互ひに顔を見ること能はざる如くなせり之は自然懇意なる人にても面倒のなきことを計れるにて面白き趣向なり

○筵一枚　鹿兒島地方は人氣の昂き所なれば客と客との規律を嚴にし相互ひの衝突なきことを計れり、後には此が慣習となりて互ひに我買たる場所の外へは袂たりとも出さゞる風儀を生じ始終嚴格に見物し居れり、然ば場所とても東京の如く一桝毎に限り木を横たへる必要なく琉球筵のみを布て一枚の場所何程と定め之を買ひ切りたる客には三人にても四人にても勝手に使用することを任せ置けり。

此地の場所には小便所の設けなく客は我が坐したる筵を上げて其下の土の上に用を達せり然れど砂地なれば筵を汚すことなきが不思議なり。

此地の見物は東西の客が定り居りて興行毎に其方向を變ることなく始めて東にて見物せ

し人は何時にても東に坐を占むるを習慣となせり。

○酒を飲ず椎を噛む　土佐は名力士を出す土地なれば看客は頗る熱心にて嚴格に見物し居り我最負力士とても賞ることなく又た憎き力士に對しても罵詈の言を放つことなし之れは勝負に熱心なる爲め若し可否を稱ふる時には客と客と忽ち衝突を起すの恐れあれば互ひに相ひ戒め居れるものなり、斯の如くにして嚴格を守る風儀なれば隨がつて見物中に飲酒などするものなく只椎の實を口中にて嚙居れるのみ、相撲打ち出しの後に椎の實殼にて小山を築くこと青森の鯡殼と好一對なり。

○相撲中女房を離別す　豊後に日田と云へる地あり此地の人は極て相撲に熱心し甚だ面白き習慣あり、元來日田の地は小條の小川を挾んで其字を異にし一を隈と云ひ一を豆田と呼び平生は交際して婚嫁往來等も爲せど相撲興行に及べば宛然敵地の觀を爲し隈と豆田の人は必ず東西に分れて觀物を爲し決して相互入り込むことなし特に可笑きは相撲興行中は隈の人にて豆田より嫁を娶りあるものは其嫁を實家へ預け鞘入したるものも亦斯の如くし豆田の人にて隈より娶りしものも亦之に倣ひ老人夫婦に至るまでも其出生地の

隈たり豆田たるを調べて川を越して相ひ去り興行了りてのち始めて家に歸へるを習はしとせり、之れは管儀式のみにあらず若し相撲の爲めに兩地に爭鬪を生じたる時、女房の緣に引かされて卑怯の振舞を爲さんことを耻てなり。

雙方斯の如く相ひ糅れば若し隈方の力士中に化粧廻しの見憎きものあれば豆田方の客は口を極めて之を罵しり豆田方の力士の化粧廻し見苦しき時は又隈方の客の罵しる事一樣なれば自然に我方の力士の爲めに化粧廻しを新調し與へる事となり關西地方の力士は此地を一つの得意場と思ひ居れり、今の金山（前名隈川）は即ち此地の出生なり

相撲百話

漫嘲樓主人

◉力士が土俵に上るや二字口に相對して俵の藁を摘んで、塵淨手と云ふものを行ふ、是れ兩力士相見ゆるの禮にして、撃劍家が立ち合ひの際に於て互ひに叩頭相禮するに均しきものゝ如くなり來りたれど、其本意とては知る人少なし、元來此事の起りを尋ぬるに、

昔時の力士は今日の如く興行一方に傾かず生死を賭して立ち合ふまての場合ひなさにあらず、斯る眞劍勝負なれば、意恨又は種々の事情に基きて掌中に小さき凶器を隱し持ち敵手に不慮の害を蒙らしめし例しも無きにあらざりしかば、何時の比よりか此塵芥手なるもの始り互ひに双手を伸べ掌を飜へして必ず凶器など持ち居らざる意を示したるなりと云ふが、今日にては其等の憂ひはなきに至りたるも一の禮式として存し居れるものなり。

◉力士取組て勝負の付かざる中に双方疲勞したりと見れば、一時引分けて水を入れ、後再び取り組まする事は誰も見て知る處なるが、此水を入れるに双方の力士最初先づ敵方に行きて敵方溜り力士をして其水を汲まするの例あり、之れ亦人の見て知る處なるが、其趣旨を何故かと云ふに、之れ亦昔時武士氣質の行はれし名殘にして、抑も兩力士相對して土俵に見ゆるに當りてや眞に武士が生命を賭したる一騎打ちに均しければ其相勞るゝに及んでは、双方の溜りに於て互に義を重んじて敵手の爲めに水を出し之を介抱して十分の技倆を伸べしむるにありて往時鎌倉武士が敵の働きに感じて馬上に酒を侑たる古事にも似通ひ何如も味あることなり。

◉近年小相撲の取組などに引分けるまでに至らず取組みて立ちたるまゝの處へ水を呑まする事あり、是は先代高砂浦五郎の始めたる事にて、現今相撲仲間にては之を『立水』と唱へ居れり。

◉力士の化粧廻しを入れ置く文庫を其社會にて『アケ荷』と稱す、明治後兩國梶之助(今の年寄伊勢ヶ濱)の創意せしものにて、其以前には何れも風呂敷包みにて持ち運びしものなり、兩國が之を創意せしは彼が全盛の時に山内容堂君より賜はりし化粧廻しを成るべく鄭重に扱はんが爲めに特に長細き葛籠を造くらせしにて目下は力士一般の用ふる處となれり。

◉相撲番附の末に昔より『此外東西に前、中、相撲御座候』との意を記しあり、昔は此前、中力士の昇進に付ては非常に困苦を極めしものにて其順序は前相撲、相中、本中と取り上げて後に纏く『序の口』へ昇進し、此に始めて番附の末段へ名を署して『同』を五人十人にて擡ぐの榮譽を得るに至るなるが、困難は是のみにあらず元來此前相撲と稱

する力士の後補者は東西にて百五十人もあり、其内の九人づゝを一場所に登用して、序の口即ち番附面へ附け出すの規定なれば、餘程出來よきものにあらざれば選拔の榮を得る能はず、加之、取組は筆頭の前力士より未明の中に合するものなれば番數と時間とに限られて晴天十日間、一度も取組まずに終る力士さへ無きにあらず、之れがために後來有望の力士にても順序を經ざれば番附にだも登る能はざる不幸あり、其例としては、牛車、木村川など云ひし力士は『東西に御座候』を十一年づゝ勤めたりと云へり、然れど現今にては此不幸なく一足飛びに二段目又は幕の内へ付け出さるゝ力士もあり縱令前、中より取る上るとしても人數に制限もなく十日間取組まぬと云ふ程に込み合ひもせず技倆次第にて忽ち序の口へ昇る事を得るなり

◉昔時は力士の昇進困難なりしかば、幕の内力士は四十歲以上のもの多く彼の境川浪右衛門は五十一歲まで兩國梶之助は四十五歲まで玉の井村右衛門は五十五歲までも場所を勤めたる程なりしが、現今は五十を越す時は年寄仲間にても親父株に入れられ若手の年寄には一目を置く程の始末なれば、力士にては四十近きものすら甚た少なきに至りたり。

◉今の年寄の組織は人の知る處なれば說かず舊時の事を聞くに其組織は筆頭一人、筆脇一人《今の正副取締》組頭五人《今の檢査役》及び組下《今の步持年寄》平年寄《給金五兩》等の五級に區別し、相撲會所《今の相撲協會》の出納は一切兩筆頭にて監督し、他の年寄には一切帳簿の披見を許さず、純益金は大概兩人の所德となり了はり《各年寄力士の給金は別なり》、稀れに大入りにて大利ありと稱する場合ひに、始めて組下年寄へ一名一兩二步位づゝの配當を爲すに止まれり。

◉組下年寄り即ち步持となる時は、利益ある時も一兩二步位の配當に過ぎざるも當時の本場所は興行毎に損金多く櫓太鼓の音を『ドデン〳〵』と響くなど惡評し配當金に預る事とては容易に無く、却つて損金支出の責任を負ふに過ぎざりしが、此損金を覺悟にて尙ほ步持に加はり居る年寄は大抵自家の部屋に多少の力士を持ちたれば、步持ちに加はり居らざる時は種々權利に關する事あり、例ば床山《力士の髮を結ぶもの》の如きも步持ち年寄にあらざれば抱へ置くことを禁じられ門下に力士ありて床山なくては非常に不便なるのみならず之を他に囑みては日々の手數容易ならざる等、其他斯の若き特權を削

がるゝもの多きを以て損金支出を覺悟にて據なく歩持に加はり居るに過ぎざりし。

◉舊時筆頭兩人の專横にして他年寄等の不幸なりしは前章に記せし如くなりしが、明治十三年藤嶋甚助が勸進元興行の際、高砂浦五郎が兩筆頭玉垣額之助、伊勢海五太夫《共に前代》に對し、其專横を逞く爲めの訴訟を起し後高砂が筆頭即ち取締役を勤むるに當り、多く相撲道の改革を爲せしと共に年寄の組織を改定し歩持年寄は各五十圓づゝを積み立て其に對する收益金を配當するの法を設けたりしが、爾後歩持年寄の收入も漸く增加し、明治十七年稻川勸進元の興行に歩持年寄一人につき始めて四十圓づゝの配當ありたり、然るに日清の役終りて後相撲道俄かに隆興し、三十年五月場所よりは歩持一人につき百圓內外の配當あるに至りたるは人の知る處の如し、但し歩持年寄の加入金は其前年五月よりは前の五十圓を增して七十五圓とし翌年五月よりは更に百圓づゝと改めたり。

◉舊時力士へ給金を支出するに一々之を數ふることなく、各其給分に應じて大凡の目分量にて小粒などを椀に盛りつゝ與へやるに、力士も亦金勘定を知るもの少なく之を其ま

ゝ受け取るに過ぎざりしが、其中の利口ものと稱する輩が椀の周圍に覆れ居る小粒を拾ひ『れ覆れを頂きます』と云ひながら貰ひ歸りし位に無邪氣なりしと今の相撲年寄が笑ひながら我に語りたる事ありき。

◉番附の編輯は今日にては相撲協會に於て取締檢査役相談の上、大關より序の口に至るまでを洩らさず査定編成するものなるが、舊時は他人に知られざるため筆頭筆脇の兩人及び帳元根岸治右衛門《代々此名あり》の三名のみ柳橋の船宿藤岡より屋根船に乘りて隅田川を溯り鐘ヶ淵邊の河中に於て各力士の昇降を協議し、三役を始め幕內及び二段目丈は筆頭、筆脇の兩人にて選定し、三段目下は總て帳元に任せて後酒宴に移るを例としたれば藤岡よりは本場所の初日に相撲會場へ蕎麥を贈り、番附編輯當日の恩顧に酬ゆるを定例となしたり。

◉舊時は『會所付』と稱する一種特別の力士昇進法あり、其は平生筆頭の供に立ちて相撲會所へ出入する力士は相撲は拙なきとても特別を以て相中より直ちに『序の二段』に附け出さるゝの慣ひあり、是れ即ち『會所付』と稱するものにして其中の甚だしき話と

して今も此社會に知られ居るは、先代玉垣額之助の弟子に松山三五郎と云ふ力士あり、相撲抽くして毎場勝星を得ることなかりしが、數年間師匠玉垣《即ち筆頭を勤務中》の供にて會所へ出入せしため玉垣より帳元根岸へ口添へありて、或る年俄かに相中より一足飛に三段目へ附出されたれば、他の中相撲は一同驚ろいて末代までの語草なりと稱しけるが、果して今日までも此社會の話に殘れり、現今にては斯る情實は一拂されたりとは云へ多少は此弊殘らざるにあらずとなり。

◉前代雷權太夫の部屋には鏡岩、平石、象ケ鼻、朝日嶽、磐石などを始め有名なる力士も多く殆ど東部屋を占領したる程なりしかば、其力士等の勢力も自から盛んにして是等の力士が場所入りの際は孰れも黒縮緬五ツ紋の羽織に雪踏を踏み腰には一刀を挿さんで供力士には化粧廻しの入りたる風呂敷包みを擔させ、相連りて裕かに兩國橋を練行きし有樣、如何にも眼覺しきことなりしは今も尙ほ知る人多かるべし、近年に至りて小錦が横綱を張りし當時、古例に倣ひて高砂部屋より朝汐、源氏山其他の力士にて小錦を先だてゝ場所入を行なはんとの協議ありしも、第一の粧飾たりし帶刀の禁制たる事に心づき斯ては見立なかるべしとて其企ても終に中止するに至りたり。

◉明治十七年五月場所の時なりし今の相撲茶屋高砂屋が開業したりし際は、東西正面土間、百二十四間、廻し樓敗百三十八間、東西向ふ樓敗四十四間のみにして、新たに開業せし高砂屋は然るべき穴を得がたかりしより《土間樓敗共に穴と云ふ》更に取締役高砂浦五郎に交渉して捻《紙捻を持ちて見物する下等場所》の場所を改造し、新に正面樓敗八間を設けたるが、是れが今日にての唯一好樓敗となり、五月の場所を一月より付込み置くも得がたきまでとなりたれば、相撲協會にても大に樓敗の利益を知り漸次に其擴張を計りて、目下は正面樓敗九十四間、東西九十六間、西高八十間、向ふ九十二間の多きに至り、斯く土間を切替へて樓敗に改造したる利益は毎場莫大の事なりと云へり。

◉行司の軍配に付する房に今は第一を紫房とし、次を朱房としたれど以前は紫房は無きことなり、朱房を第一として其も紅房と稱し朱とは云はざりし。

◉現今年寄と稱するもの凡そ八十名にも上れど、兩取締及び檢査役八名を除きては物の道理を解し得るもの皆無とも云ふべき社會なれば、多數の年寄が時々に思ひ寄ることあ

りても常に少數の取締役と檢査役に押へられ、何ごとも爲し得ずして相撲内閣は此十人の專有物なり、其代り又無事なることを得るなり。

◎十人内閣員は各長所あり雷は十分權力を維持するの貫目あり、高見山は溫厚直實にして自から人望あり、友綱は才氣他に特出し八角は意見に富み伊勢の海は剛柔宜しきを得、二十山は君子なり、尾車は事理に敏くして覇氣に富めり。

◎前の梅ケ谷の斯道に於る今の力士に見難き心懸けあり体格の好き爲めに横綱を張るに至りしのみならざるなり、今の力士は敵と立ち合ふに必ず先づ敵の長所を避くるの術を研究すれど梅ケ谷たりし時の雷は全く之に反して敵の長所に當りて之を敗るの術を講ぜしとなり、長所既に敗るべくんば其短所は敗らずとも敵自から敗るゝことを知ればなり。

◎先きの小錦程のものも『當り矢』の張手を避くる爲めには自から顏を引て体を反する心あり、然ればこそ勝負は兎もあれ一度は土俵ぎはまで突き立てらるゝ事あり雷之を評して之れ即ち敵の長所を避くるの失なり、若し敵が張り手に來ると知らば我より頸を進めて我が頷を打たせ其隙に乘じて突き進まば乃ち敵の長所を敗つて我勝となること必

然なり云々、今日此心懸けあるもの少なかるべし。

◎雷云ふ素人は力士の女に關係するを以て体力の弱るものと思へど力士程の者が其位の事にて急に翌日の敗を招くものにあらず、元氣盛んなる時は土俵に出てシコ踏み締る場合には多少の病氣すら却て逃げ去る程なり、只女に關係するを忌む所以は遊興の爲めには徹夜又は流連し易き者なり、徹夜又は流連する時は翌朝の稽古懶くして大抵は其まま土俵に上るものなり、力士にして稽古を怠る時は心逸るも体動かず体動くも腰極らず土俵にて我にもあらぬ敗けを取るが普通なり、若し女と關係する爲め弱しと云はゞ女房を持ちし力士は悉く弱る筈なれど其然らざるは女の恐るべきにあらずして、一日にても稽古を怠ることの恐るべきなり云々と斯道名家の言自から理に合せり。

◎今の梅ケ谷が未だ梅の谷と稱せし時雷に對して梅の谷に梅ケ谷の名を襲がせよと勸むる最負客あり、梅の谷亦『の』を『ケ』に改めたきの色あり雷一睨して曰く今から梅ケ谷と改名して滿足する氣か梅ケ谷の名は汝の技量極度に達せし時の名と心得べし、其次は汝が技量傾ひて雷と改名して年寄となるべき日なり、若し今日『の』を『ケ』に改め其上

技量が進まば今度は何と改名する梅ヶ谷の次ぎは雷だが乃公が逝者の中に汝が雷と爲つては乃公は何と改名するのだ、何だ分つたか。

◉雷が相撲内閣に權力あるは素より其人の近代の名力士たりしにも依るべしと雖も其門下生には有力の年寄ありて之れ等が今尙ほ雷に師事するを以て他の年寄等も自から之に師事するの風あり、其一例を見るに取締檢査役等が雨天休日などの時に唯一の樂しみとするは圍碁の勝負にして雷自から一方の大將となり、之が敵手としては伊勢の海八角の兩人なるが、其間に勝敗ありと雖も數年の間依然として白石を占むるものは雷なり、近來伊勢の海八角等雷を敗ること多く之を見たる最負客或る時戯れて此分にては雷も最早白石を讓らざるを得ざるべしと云へば、年寄等皆口を揃へて曰く、『雷君が白を渡しては相撲協會は暗だ、たとひ井目まで置ても白を持つて御ゐてなさい』と、之を聞く雷も不道理とも思はず敵手も亦餘り無理とは聞かぬ者の如し、素より此社會の無邪氣に依ると雖も權力の重きも推し知るべし。

◉十人の内閣員が圍碁を戰はすには其中の二人が勝負役と爲り、他の八人は四人宛に分れて双方に味方し甲の組の勝ちたる時は乙の組の五人醵金して甲組の五人を饗應するを常とす、而して此饗應は其場限りにあらず、他日我組の勝ち返すまでは時々饗應の義務を繼續さるゝなり然れど無邪氣にして約束を守り毫も苦情を持ち出すものなし。

◉二代高見は溫厚直實は求めて得がたき處あり、其談話百姓爺父の如しと雖も其一言一句は常に相撲内閣間に重んぜられつゝあり、縱令ば一力士の番附面進退に就て衆年寄多少の利害に依て意見の合せざることあるや甲是乙非容易に決せざる如きの際に及んで高砂が重き口を開て『公等は其云つても某力士は何々の地位に据ゑるのが正當だ』と只一言するや、大抵其議に一決すと云ふ、平生の德望に依らずと云はざるべからず。

◉他の取締檢査役等は衆に越えると稱しても力士社會にての比較に過ぎず、獨り友綱に至りては才氣鋭發此社會外に出しても天晴れの策士なり、先代高砂浦五郎に比するに膽力は素より劣るべしと雖も才氣は却て之に過ぎ紳士間に對しての應對懸引き協會に一人無くてならぬ男なるべし。

◉今の年寄伊勢ヶ濱が兩國梶之助と呼び全盛なりし比、或る日柳橋の川長より客の招き

を受け直ちに其座敷に至りし處、其客は兩國が唯一の最負旦那山内容堂公なりしかば、豫て公より賜はりし化粧廻しの御禮を申上げしに、公は其廻しは此に供せる家扶の酒井が萬事計ひたるものにて、予は未だ一見せずとの事に兩國は早速之を取り寄せて公の御覽に供へたりしは、黑白二引に龜甲繋ぎを繍たるものなりしが、公は之を見て左右へ頭を振り存外見苦しき廻しなりと酒興の餘りに戯れたりしを兩國は却て心に喜びながら早速次へ引き下げたれば、家扶の酒井も扱ひに困り『御前、兩國へは別に化粧廻しを新調して遣はされませうや』と伺ひしに、容堂公も然るもの微笑しながら『イヤ今年は夫てよい』。

◉相撲年寄は監査役及び機敗見廻りを除く外は興行中其々の役目ありて、如何なる好取組も之れを見る事出來ざるものあり、或年の森場所の如きは前代未聞の人氣を惹きし程の好勝負ありしにも拘はらず、木戸部長の如きは十日間に只一番の勝負を見たるのみにて紺屋の白袴とは此事なりと笑ひ居たり。

◉身の丈の高さを以て評判ありし武藏潟伊之助が大阪に於て同地の力士熊ケ嶽と取組み

し際、立ち上るや否や諸手に金剛力を込め、何の手ともなく上より伸懸りて熊ケ嶽の兩肩を押つけたるに熊ケ嶽は提燈を疊むが如くシリ〳〵と委縮込みて遂に膝を突きたれば、見物は四十八手外、提燈疊みの手なりと興がりたり、此勝負につき尚ほ可笑話の殘りたるは、勝負は斯美事に武藏潟の勝に歸したれば行司は其通り團扇を武藏潟に上げたりしに、大阪方の山響は其取口の異樣なるに故障を入れ非常に時間を費したるため夜の八時過ぎまで打ち出すこと能はず、漸くにして場所預り勝星武藏潟との裁斷にて落着したるものゝ之がため溜りに居たる東西力士ども大抵寒冒に罹り翌日よりは欠席力士頗る多かりしとて今も此社會の笑ひ話となり居れり。

◉明治十九年大阪に於て三府合併相撲ありし時大阪力士熊ケ嶽と東京力士雷電震右衛門との顔合はせに熊ケ嶽の上手投げ極り土附ずの雷電を美事に土俵へ投つけたりしに、行司式守鬼市(東京方)は口にて『勝負見なた』と云ひながら急いで團扇を袖の下へ隱し、軈て『熊ケ嶽』と名乘りを擧げたり、其擧動如何にも不思議なりしかば或る人之を鬼市に詰りたるに、然れば大阪にては好勝負ある時に空德利、烟草盆其他の器物を投げつけ

る弊風あり、萬一累代相傳の團扇へ傷けられては大變と思ひしより我れ知らず團扇を隱せしなりと答へ互ひに一笑したりと云ふが、此勝負の人氣ありしは當時大阪にて『吾妻ては鳴り響きたる雷電も浪花の熊が取つて押へる』と云ふ落首の傳はりしにても知られたり。

◉先年東京相撲が大阪へ乘り込み合併相撲を興行せし際、大阪の釋迦ヶ嶽と東京の外の海が立ち合ひ釋迦に踏切りありしに拘はらず、大阪行司木村清兼が團扇を釋迦に擧げたりしを、東京方の年寄關の戸億右衛門が見尤め『土俵に居る力士が負けて土俵に出たる力士が勝とは不思議なり』と詰問したれば、行司も我失策を悟り反對に外の海へ勝星を付する事となりたるが、其中に見物の中より大男が顯はれ『其勝負は私が承知せぬ』と云ひながらノサ〳〵と關の戸の傍らに來り、懷中より短刀を出しかけて、アハヤ椿事を引起さんとせしが大阪の年寄中村芝吉の悴が飛込んで其男を引き連れ去り、後改めて關の戸の處に詫を入れ來りしかば其名を聞きしに其男は釋迦ヶ嶽の親分たりし同地有名の博徒なりしと。

◉京坂相撲の規律なきは珍しからぬ事ながら、去年五月の始め西京にて東西兩京台併相撲の有りし際は一日土俵の上へ蝙蝠傘を携へ下駄穿きのまゝに上り來りし醉客あり、京都の年寄等は之を制せんともせざりしかば東京の年寄井筒嘉次郎《即ち西の海》は大いに激昂し、其醉客を木戸外に摘み出せといきまきしを關の戸が豫て知る所ありて井筒をなだめ幸ひに事無きを得たりしが、後に關の戸の井筒をなだめし所以を聞くに、彼醉客は丸山の朦朧組と稱し警官も手を出しかぬる無賴の輩にて若し此際井筒が彼を摘み出したらんには、先年神明の喧嘩の如き騷動を引き起すは必定にて由々しき場合ひなりしとなり。

◉京都の悠長なるは警官までも前章の朦朧組みを取り締ることを憚る程なれば、相撲年寄の權力とては更に振はず、井筒は之に對して『他郷なれば我も彼の無禮漢を見許したれど、此地のれ前達は何を營業になさるか天下の力士と云ふ事を知らざるや』と大氣焔を吐きたりと歸京後の物語りなりし。

◉本場所を除きて花相撲などには隨分相談角觝ありて、初めより今日は引分、又は預り

と相談の上に立ち合ふことあり、之を此社會にて『八百長』と符牒せり、我未だ何の意味より始まりしを知らざるも實に斯の如く云ひ慣はし居るなり、又相談を懸けるは多く其日の立合ひに負て大利害ある力士より頼み込むものなれば別に『今日は』とも符牒せり、是は挨拶の語より起りしならん。

◉八百長につき可笑話あり、先年五月上旬京都にて興行せし東西兩京合併相撲には京都の大關大碇が横綱を張りたる事とて、最貧客に對し東京力士に負たる事を見聞さするの心苦しく、日々の勝負皆八百長にて取組み扨こそ小錦、朝汐、荒岩、梅の谷の如き强敵との勝負も悉く引分、又は預りとなりしが、最後常陸山との取組みの日、例の如く八百長を申込みしに、常陸山は彼の如き氣象の上に、大坂、神戸、德嶋と勝誇りたる餘勢なれば、何の京都の横綱、一番土俵へ埋めて呉んとの心ありしかば、斷然大碇の八百長を拒絶し、土俵に上つて立ち上るや直ぐに引捕へて土俵ぎわに攻つけ、大碇の耐へる途端を劇しく蹴返して土俵外まで跳ね飛したれば、是れにて大碇の技倆を下げ是まで他力士との引分、預りは定めて頼み込みしならんとの評判喧ぴすしきに至りたり。

◉小錦が末年本場所にての成蹟は梅の谷荒岩等に對して勝算少なかりしこと人の知る處なるが、若し地方興行に際し横綱の敗るゝこと多からんには人氣に拘はるもの少なからざるを以て其勝負には往々八百長を用ゆると聞けど、人望に富める小錦なれば之を尤む る人とて無く、何れに至りても横綱の評判高かりしとは德のある力士なり。

◉鳳凰は近年來成蹟あしく或る場所に大砲に地位を奪はるゝまでに至りたるが、是につき一笑話あり、先年一月場所の時なりし吉原の最貧客より頗る華美を盡したる座布團を贈りくれたり、鳳凰は大に喜びて之を土俵溜りへ持ち來り、臀に布居りながらも喜色自から顯はれければ、或る相撲年寄が可笑き事に思ひ惡心とてもなく『闘取其布團を嬉しさうに思ひなさるが夫は臥てくれとの謎のやうだ延喜てもねエ』と戯れけるに、鳳凰大に氣に懸け之が爲めにもあるまじきが其場所の成績甚だ面白からず常陸、朝汐、黑岩等に連敗し終に中途より休場するに至りたるは氣の毒の事なりし。

◉荒岩を評して彼は柔術を堪能したるものなりと云ひ、新聞紙なども其事を書きたるものあれば、一般に荒岩の柔術と云ふことを傳ふれども、荒岩は柔術家にあらず我

は荒岩と熟知の間なれど、彼が柔術を知る事を聞かず、彼が柔術を知ると思はれたるは其取り口の早きと小錦を再度蹴返したるとに依りて想像家の爲に傳播されたるなるが、之れ等は實とに荒岩を知らざるもの丶雷同説にて、新聞紙まで誤傳を描き寫せしは可笑きことなり、斯まで云ひ傳へられたるを我一人虚説なりと云ふ時は却て信ぜざるものあるべしと雖も、我は荒岩を知るに於て人に讓らざれば、憚る處なく衆説を排して疑はざるなり。

◉荒岩が柔術の手ありと云ふは如何なる手を認めて斯は云ひ傳へしにや、荒岩は小錦を蹴返し源氏山を蹴返したる外は大抵、撓め出し、突き出し、掬ひ投げ、及び上は手、下た手投げの如く普通の手のみにして、決して柔術に近き手を出せしことなし。

◉荒岩の取口は素より敏活なりと雖も別に珍らしき手、變化の取口あるにあらず、若し手の面白きを云はば不知火などの方遙かに優りたるべし。

◉荒岩を手取り力士と云ふも非なりとは某年寄の説なり、然か云へば荒岩は取るべき處なき力士に似たれども今日世間に賞賛されつ丶ある處は其實彼の思ひ設けざる浮名にして、彼が實際の長所は不幸にして未だ甚だ人に知られざるなり。

◉荒岩が人の豫想し得ざる第一の長所は体量不相應の怪力を有する事なり、彼は力量のみを戰かはすも優に今日の力量專門の力士等に抵抗し得るの怪力を有せり、同じ部屋の松ケ關は力相撲として人に知られしものなれど、荒岩と力競して毫も勝つこと出來ざりしとは兩人の共に語る處なり。

◉荒岩が或る場所には連日突き出しを以て勝を制し更に手を出せし事なかりしは人の知る處なり、之れ怪力のある所以にして柔術には係はることなし。

◉荒岩は撓出しの長所あり、當り矢を途中に撓め上げて土俵の外へ持ち出したる怪力は人の今も記臆する處なるべし。

◉荒岩の第二の長所は土俵に上つて隙間なく取り組て猶豫なく、機先を制し、敵をして体を定むるの暇なからしめ、第一手、第二手續發して勝を取るに在り、然れども其手は投の種類に止り、柔術に近き『反』『透し』『ウッチャリ』など云ふ棄て身の手を出せしことなし、彼が人に知られてより出來既に數年の間、只一度朝汐を冠らんとして腰の挫け

たる外は決して『反』『透し』などの柔術に近き手を出せし事なきは我が數年來一日も欠かさず本場所を見物したる眼の保證する處なり。

◉荒岩の第三の長所は强敵に對するの取口を研究するにあり、彼は敗り難き敵あれば平生其敵の短所を見出すを勉め其短處を見出せば次ぎに之に乘ずるの手段を研究するなり、而して其研究の成るや之を花相撲には利用せず本場所眞劍の日に於て突如として之を利用す、其平生の心かけ斯の如くなるを以て强敵と立ち合ふに及んでも殆ど成竹あるものゝ如く然るなり。

◉荒岩が强敵を破ぶるの手段を研究するには自家の稽古場に於て同門の力士を相手として幾十遍も其手を繰かへし、自得して神に入らざれば已まざるなり、小錦源氏山に用ゐたる蹴返しの如きも即ち其一例にして彼が其前年より小錦源氏山等の爲めに練磨熟達し置きて始めて之を用ゐしもの素より蓄時よりの有り合はしたる藝なれば、柔術の手など云ふべき故なし。

◉荒岩が研究し了りたる手にして未だ一度も施さゞるの敵あり、若し番附の入れ換あり

て今の味方中敵方となるものあれば、彼は其研究し置きたる手を以て一度は之を破らんと自信し居れり、故に花相撲にて平生自家の敗込み多き力士に對しても若し本場所に顏を合はする時あらば其勝負未だ知るべからず。

◉荒岩と常陸山とは望みを囑されたる取組なり兩力士共に取つて讓らず、前日京都に於て兩力士の顏合せあるや常陸山、樂屋に在て大言して曰く『今日は荒岩をヒドイ目に逢してやるぞ』と、蓋し常陸の意は荒岩を侮りしに在らず、花相撲と云ひ人氣多き取組なれば『初切』を取る覺悟にて面白く立ち廻らんとの考へなりしが、餘り逸りたる爲め存外勝負早くつき終に荒岩の勝となりたれば、常陸自身も呆れたる計りなりしと云へり。

◉大砲は話も出來ぬ鈍物の如く世間より思はれ居れど、彼は力士中の口利なり、先年西部屋に紛紜あり《大戸平を關脇に墮せし時》一同場所入りをせざりしかば、本所警察署に於て西部屋力士一同を招ぎ署長より仲裁を兼たる說諭ありしに、他の力士等は一言も辯明することなく、平生酒席の取り廻しには妙を得たりと稱さゝる谷の音すら警察署なればとて一句もなかりしに、大砲のみ一人口を開き縷々年寄等の處分宜しからざる理由

を述べ、容易に署長の言に伏せざりしかば署長も其道理ある言を聞き大いに當惑したりしより大砲の鈍物ならざる事、始めて角通の間に知られたり。

◉大砲が始めて尾車の新弟子となりて東京に來りし當座は故郷を追慕して袖に涙の乾くことなかりし程なりしが、近年三役とまで進み時々興行の爲め故郷へ乘り込むことあれば、『我家は穢い』と稱し旅店に止宿するを常とす父母に面會するにも旅宿まで呼び迎へるを例とすれば或る人之を笑ひ『先年は故郷が戀しい〳〵と涙をこぼしなされたのに、折角此まで來て何故家へ寄らぬのぢや』と戲れしに、彼は憚りもなく答へて『私は故郷は嫌らひだ』。

◉大砲尾車の弟子となりし際、燒蕎が好きなりと云ひしかば之を馳走したるに十錢餘の蕎を咄嗟に食ひ盡せりと。

◉朝汐は謙遜家にして品行宜しく家政極めて整備す、逆鉾は禮儀を知り品行亦甚だ可なり、高砂部屋の力士中、此二人は尊敬すべき値いあり。

◉關西にては土俵へ烟草盆、德利、土瓶の如き器物を投じ頗る危險の弊あり、或る時の

興行に東京の呼出し勘太《今の呼び勘》頓智を利かせ大聲にて『御客樣、勝力士への花ならば東京のやうに衣類を投げて下されませ、別に衣服は持ち行きません、直にお歸へし申します』と呼び立てければ見物も大に耻ぢたる氣味あり關西ものとて矢張り衣類は投げざるも其代り器物を投げることは少なくなりしかば、其のちは興行毎に此手段を用ゐ居れりと。

◉現今相撲社會にて廢りしものは力士の櫓落《髪風》と雪踏に提げ烟草入れ、流行るものは『サヒタ』のパイプに白縮緬兵子帶、又び紺天二本の下駄鼻緒なり。

◉土俵の四本柱を卷くに赤、白、青、黑四色の布を以てし、天幕の四方を絞りたる打紐及び其房も同じく赤、白、青、黑の四色に分ちたるは之れ春夏秋冬の四季を表したるなりとは世人の共に云ふ言辭なるか單に四季を表したりとのみにては未だ其故事を盡さず實は禮記の四神に模倣り青龍、白虎、朱雀、玄武を形はしたるものにて青龍は東にして春、白虎は西にして秋、朱雀は南にして夏、玄武は北にして冬を意味したるものなり。

◉回向院の相撲場にて西方力士が東より出て、東方力士は西より出づるを以て其意味を

疑ふものあり是れは方角の東西を以て力士の東西を分ちしものと思ふ故の誤りなり元來力士の東西を分ちしは方角に依りしものにあらず往時京都にて勸進相撲を興行せし際、近江の國より以東の力士を東方と稱し其西より來るを西方力士と稱せしより濫觴しものにて今日は只東西部屋の名を存せしだけにて方角の東西には關係なきことなり。

◉力士の給金は本、中力士より序の口へ榮進するに及び初めて一場所に一兩の給金を取る事となり之を此社會にてス一《素の一兩と云ふ意》と呼び夫より本場所の成蹟に依りて漸次給金を增加する規定なるが先代振分の弟子に四ッケ濱《前年五月場所の勸進元振分忠藏の兄弟子なり》と云ふは場所毎の不成蹟にて給金は少しも昇らず永年ス一にて勤め居たりしが律義の男なればとて番附面は三段目まで進みたり。

◉二段目筆頭より十枚目までの東西力士を俗に十兩取りと稱し舊時は序の口より漸次取り上げて給金十兩以上に爲らざれば此地位に據えることなかりしも近時は最初より幕下へ附出す力士多く從つて番附面は十兩取力士の中に入りても實際の給金は尙ほ五六圓のものあり斯る力士は縱令成績よろしくして次の場所に幕の內に榮進するとても地位と給

金の相應せざるより幕內力士の交際費又は身の廻りの費へに差支ふるものなきにあらず是等の爲めに相撲協會中には一法を設け當今にては十兩以內の給金のものは幕內に昇せざる內規を設け萬一成績十分にして是非とも幕內に昇せざるを得ざる場合には規定外に給金を增すの特議あり。

◉相撲勝負付は寬弘九年秋七月相撲召合せの時始めて作りしものにて、番附は遙か後に作りしものと『相撲起顯』に見えたり又勝負付の末に翌日の取組を記す事となりしも後の工夫なりしが其取組みは前と中入後を判たず總て力士地位の順序に依りて記載し來たりしかば我が好める取組みの何時比なるを知りがたくして多用の人などには不便尠なからざりしを去る日我知人某は協會役員に忠告して其五月場所よりは中入前後を判ちて記載することに致させたり是れ勝負付の一革新なり。

◉未だ番附面へ載らざる本、中力士の昔を聞くに其權力非常に强くして興行中は場の內外を監督し關取力士と雖も規定に違犯する時は直に筆頭《今の取締役》に訴へ相當の處分を爲すに憚かる處なかりしが其代には中力士の品行は最も嚴しき慣ひあり未だ序の口

へ昇らざる前には朝も齒磨を用ゆることなく鹽のみを使ひ烟草を喫することを嚴禁し穿物は總て麻裏草履を用ひ今の如く下駄など云ふものを穿つことなし殊に目覺しかりしは場所の打ち出しとなるや中力士一同は裸体に締込《即ち取り廻し》を締めたるまゝ回向院境内の小屋廻り及び細小路《今の兩國橋より正面の入口》より兩國廣小路へ出張し歸路の看客に間違ひ無きやう警護の任を盡したり當今にては巡査と云ふものあれば此必要はなきことなれど往時斯る風俗ありしは床かしき事ならずや。

◉目下にては斯道の規律亂脈となり前力士迄も兄弟子に貰ひし草履附の駒下駄を穿つゝ兵見帶にて場所の近傍を徘徊し居る程なれば關取力士などは總体に白縮緬の兵見帶に姿をやつし三四の力士の外は角帶の結方さへ知らぬ程なりと云へど維新後までの力士風俗は其規律頗る正しくして先づ初日前、觸れ大鼓の廻ると同時に關取力士を始めとし前力士まで悉く下駄を穿つことを嚴禁し大關より二段目までは雪駄、三段目以下新弟子までは就れも麻裏草履を穿ち角帶を貝の口に締たる腰には悉皆脇差の一本を挿し《但し三段以下にて木刀をも持たざるものは薪、又は竹の類を手拭、風呂敷などに包み其を差して往來せり》威儀いかめしく場所入りを爲し若し其規律に背くものある時は中力士より直ちに處分方を筆頭に請求すること即ち前章にも記せしもの丶如くなりし。

◉舊時力士の規律嚴重なりしことは前章に記したる如く脇差の無きものは場所入りも叶はざる程なりしが是れにつき一笑話あり先代の出來山、即ち大纏長吉とて人氣隆々たりし力士が尙ほ三段目にありし頃、木太刀をも所持せざりしかば何時も尺八へ手拭を卷いて挿はさみ居りしを或る時他の力士が嘲けり笑ひしに大纏は大口を開て打ち笑ひ、武士の刀ならば、戰場へ行く必要があるが己の刀は會所《今の協會》へ飯を食ひに行く手形だから尺八でも不都合はないと答へたりと云へり然れば力士として假にも一刀（中身は尺八にても）を挿ざる時は會所にて焚出しの飯を食せぬ程に嚴重なりしと思はれたり廢刀の今日なれば直ちに之を今日に移さんとの事はにあらざるも規律は斯ありてこそ天下の力士とも云ふべけれ

◉尙ほ舊時力士社會の規律正しきことを語らば原庭の玉垣、元町の伊勢の海《何れも先代》の聲古場の全盛なりし頃には關取力士が合部屋の力士へ稽古を爲す際、互ひに其順

序を慎しみ順番を以て稽古を勵み若し此規律を背き稽古場の土俵外などにて勝手に相撲ことあれば《此社會にてヤマと通言す》大に嚴責して尙ほ度重なる時は破門せし程なりしと云へど目下は何れの稽古場にても亂脈となり兄弟子の稽古中に新弟子が慎しんで見物し居らざるのみならず勝手に他の力士と相撲ふなど甚だ見憎さこと多し。

◉永く大關の地位を占め居たる綾瀨川が深川八幡境内の花相撲の際に友禪縮緬の襦袢一枚にて力士溜へ入り來りしを本、中力士等が見尤めて襦袢にて溜りへ入ることは大坂力士の晴とする處なりと云へど天下御免の江戸大相撲が襦袢一枚にて溜りへ入る如き不体裁あるべきや綾瀨川とも云はるゝものが斯る事を知らざる筈なし是は當時日の出の大關なりと云ふを鼻に懸け自から規律を破りしものならん其まゝには差置かれずと其苦情を筆頭まで持ち出したれば筆頭も大に處分に困じ以後大關たりとも襦袢一枚にて溜りへ入るを禁ずとの條件を設け其時だけは事濟みとなりたりと云ふ前章來記す如く本、中力士の勢力は斯の如く強かりしを以て皮肉なる力士は序の口へ出世するとを望まず却て本、中に居るを愉快と思ひ居りしもの多かりしと

◉化粧廻も昔は其抱へ屋敷の徽章を市松繋ぎにせしもの又は輪違ひ、子持山道、二ツ引き等の勇ましき模樣を好みたりしが目下の力士は景色、動植物、又は緻密なる縫とり模樣を化粧廻に現はすことを好み大に高尙の如く思ひ倣せど實は文弱に陷りし證にて或る年寄は之を評して『女郎の襠裲見るやうな廻しより昔しの方が力士らしくて勇ましい』と云ひし事あり之を聞き居たる多くの力士等は孰れも赤面の体ありて苦笑したる事は我親しく見聞せる處なり

◉現今力士の給金を增減するの內規は一番勝越二十五錢、二番五十錢、三番壹圓、四番壹圓五十錢、五番二圓、六番二圓五十錢、七番三圓、八番三圓五十錢、九番四圓の增給となし、關取の給金は四十五圓を最高度とし、九日皆勤力士には勝負に拘はらず一場所毎に五十錢を增給し、幕下二十枚目迄の力士にして土俵入を爲さゞるのは幕內は壹圓を幕下は五十錢を減給し、幕の內より二段へ、二段より三段へ、三段より序の二段へ落つるものは各段下げ毎に給金の一割を減じ、實際の病氣と徵兵の外に全休場、若しくは脫走せる力士は給金を半減し、行司の給金は十圓を限りとし、相撲取締役は年給金百圓、檢

査役は年給金二十圓の外に二季大相撲毎に取締役には十五圓、檢査役には十圓づゝを支給す、以上相撲協會に於ける給金の增減內定なり

◉勝星は一番勝ちを以て一ッと數ふことは、勿論なりと雖も其星を三等に分ち我より上級の敵を破りしは一等星なり我と同級は二等星なり我より下級は三等星なり協會は其星の上下を參酌して次場所番附面の席順を上下する事あり《當今は等級を廢す》

◉前章に幕下附出し力士が實際十兩の給金を取らざる中に所謂十兩取り關取りの中へ附出さるゝ慣例を記したるが之につき再び某年寄の語るを聞くに始めて此例を作りしは明治十七年の比なりし大坂より荒石、八幡山の二力士、京都より嵐山の一力士が來り荒石は境川の部屋に八幡山《即ち後の年寄湊川にて小錦の盛時に並んで人氣ありし力士》は玉垣の部屋に《後に友綱の部屋に移る》嵐山は藤島の部屋に入りしが此三力士は何れも京坂にて相應の腕も磨き名も技量も知られたるものなりしかば以撲協會にては特例を以て給金に拘はらず幕下十枚即ち關取分に附出したりしが之を見たる東京の幕下力士等は大に不平を鳴らし終に同盟罷業を企つるに至りしを高砂浦五郎の仲裁に依りて『爾後給金

十兩に至らざるものと雖も成蹟よろしきものは幕下十枚の中即ち關取分に入ることを得』との意味なる條件の下に治まることを得たりしと云へり

◉引分、預かりにして故意に出ると認むるものは双方の力士に對し負星を與ふるの內規ありと雖も大抵の場合には双方半々の勝星を與ふるを常とす然れ共預かりの中には種々等差あり純然たる無勝負の時は『丸る預り』にして五分々々の星なり『場所預り』と稱するものは勝負ありと雖も土俵上のみを預かりて勝星は一方に與へ又勝負七分三分にして全くの無勝負と認めがたき時は一方へ丸星を與へ一方へ五分を與へ協會に於て五分の持ち出しを爲して增給することあり是等は檢査役の協議に成り豫かじめ定め置けるものにあらずと雖も近來屢ば行なはるゝ所なり

◉今の檢査役井筒嘉次郎が西の海と稱して取り盛りし日、撓出しの得意ありて其手を泉川と云はれしことは人の悉く知る所なり、又其撓め出しの手を泉川と假稱せしは昔時泉川と呼べる士士の得意に施こせし手なるに依て其稱ありしことも人の皆知る處なり、然れども其泉川と呼る力士が何時の時代なりしことを知る人は少なし因て我所藏せる舊時

の番附を調査するに泉川は文政年間の力士にして其元年の番附に東の方、前頭四枚目に位し其勝負付には餘程の勝越しありて其手は今日も昨日も撓出しにて勝ちを得たりと傳へられたり

○現今にては本場所興行中は警官が出張する丈にて極めて簡畧なれど維新前寺社奉行の監督を受け居りし際は嚴格と云へば嚴格、滑稽と云へば滑稽とも稱すべき程の重々しき事なりし、先づ正面には寺社溜りと稱する役樓敷《警官の役樓敷は今もあれど》を設けあり相撲會所よりは組頭《即ち今の檢査役》一名に平年寄が付添ひて日々早朝より兩國橋東詰の水茶屋稻毛屋と云ふに出張し寺社奉行の巡視役が供揃ひにて米澤町にさしかゝるや組頭は駆け拔けて出迎への挨拶を爲し夫より先き拂ひとなりて兩國橋に進み來れば櫓太鼓は寺社役人の繪先兩國橋に見ゆるを相圖に叩きつゞけたる音を中止し豫て稻毛屋に集し居たる平年寄等は其役人の警護となつて『控へませう』と制し聲を連呼しながら元町の細小路を經て回向院の本堂へ案内し此處にて役人が休息し居る際、會所よりは筆頭、筆脇、組頭、行司木村庄之助等が打ち揃ひて出張し今日も巡視ありし勞を拜謝し少時くにして回向院の住職附添ひて相撲場へ案内するや其木戸へ入ると同時に呼び出し奴は見物人に向ひ『被りものを取りませう』と大呼するを途端に櫓太鼓は再び打ち始め役人が座に就きて後には其幔敷下に突棒、叉、手錠の類を嚴めしく飾り立て威儀堂々と見物し居たるは今人の夢にも思ひ出されぬ有樣なりし

○現今にては本場所番附は興行一二日前に發表し其までは非常に秘密を守り居れど舊時は興行二十日前より板番附と云ふものを回向院門前を始めとし繁華の辻々へ掲出したれば熱心の好角家は態々回向院門前に至りて大板番附を見物し其掲出の遲き時は頻りに焦燥がりて日々の如く足を運ぶものも少なからざりしが之に引きかへ現今にては何日番附を發表すと云ふことも其番附面の大畧も一切新聞紙上にて報道するを以て故さらに板番附を掲出するの必要を覺えざるに至りたり然れど一利あれば一害あるを免れず、若し舊時の如く二十日前に紙番附を發表する時は各新聞が競ふて轉載するの故を以て大に紙番附の販路を妨げ且地方巡業中の力士年寄等が歸京の上、其土産として贔負客へ配布するの價値なきに至れば終に前記の如く興行一兩日前に始めて發表することに爲りたり

○次場所の勸進元は當興行の中日《五日目》に金百圓を相撲協會へ前納するを例とす此百圓は次場所出勤の幕内力士へ手金として渡すべき給金半額の中へ加ふるの前例にして協會よりは之に對し金二十圓を仕着料として勸進元へ贈與す勸進元は之に幾多の金子を添へて若干の仕着を作り相撲關係の者等へ配布す、呼び出し奴等の着し居る徽章つきの衣類是なり、舊時は此外に機敷一間と饅頭札《木戸通券》七百枚を勸進元に贈與したるの例ありしも現今にては興行税の關係あるを以て木戸通券の贈與は廢止し單に桟敷のみを贈れり又次の興行認可と爲ると同時に所轄警察署よりは警官出張して勸進元の身元調べを爲す、之れ勸進元は千圓以上の資産を有するものに限るとの表面上の規定あるを以て一應儀式上の取調べを爲すためたりと雖も實際は協會共同の興行に過ぎざるを以て縱令勸進元に一文の資産なしとても總て默許に附し居れり

○現今相撲協會にて焚出の飯米は興行中、一日に白米十三俵宛なり從つて香の物の澤庵漬け一日に四樽を要す、某年寄の談に五六年前までは白米八俵にて事足りしと雖も現今別段に力士の數を增加せしにもあらざるに白米五俵の增加を見るに至りしは甚だ不思議

のことなりとて或る時其原因を調査せしに之は世帶持ちの力士が殖へたる爲めなりしと

○協會の焚出しは興行中、幕内力士に對しては其部屋に贈り、並びに雜用金と云ふものを贈る《即ち菜料》其他は協會に赴きて飲食す、但し幕下十枚の力士も亦雜用金を受く

○舊時は三段目以上の力士にあらざれば羽織は着する事を許されず又年寄株を持ことを許されざりしが現今にては此二例を廢止したり

○本場所興行の際、四本柱の上に引き廻したる天幕は舊時は羅紗、呉絽等の舶來ものを珍重し其模樣は極めて質朴のものなりしが先代出來山《即ち有名の大纏》が勸進元の際に府下各消防組頭より贈りし天幕には四十八組の當番《纏の頭》を染め抜きたる縮緬のものなりしかば其比新意匠なりとて評判嚴しかりしと云へり然れど此天幕だけは昨今用ひ居るもの大いに進歩し、紫縮緬へ陸軍の徽章を崩づしたる山路に櫻花を白抜になしたるもの高尚にして優美なり、初めて之れを用ひたるは今より十年前のことにて偖行社にて花相撲を勤めし際、三浦子爵の手を經て小錦八十吉に賜はり之を師匠高砂が本場所へ掲げ始めたるに依れり

○本場所千秋樂《十日目》の日愈よ打ち上げとなるや本、中力士の中、成績よろしく當場所より序の口へ榮進するもの數人が土俵に顯はれて中改めの年寄《此年寄は未明より土俵の傍らに控へ本、中力士の勝負檢査を爲し其成績を見て序の口へ昇す任務を帶ふ》を胴揚にし連日檢査の勞を謝す之を此社會にて土俵マセの祝賀と云ふ然れど此式少しく改まり前年よりは新序の力士《次の場所より序の口へ昇るもの》が此土俵マセの役を勤むることゝなれり

○高砂浦五郎が全盛の時、西京西陣の織元に托て新調せし繻子の締込《取り廻し》は其比の代價にて一筋百三十圓餘、梅ケ谷《今の雷と》緋緘の同じく西陣へ注文せしは八十二圓づゝなりしかば其比高價の評判高かりしが目下各力士の用ひ居るものは其比よりは品質下りしにも拘はらず大凡百圓内外より安きも七八十圓の價なり

○一兩年以來相撲の隆盛を極め或年一月場所の如きは一萬餘圓の純益金あり各部持年寄への配當金は一人百餘圓以上に上りたる程の盛況なりしが之に就き雷權太夫の追舊談を聞くに今より十年前後は相撲道の衰頽を極め毎場損金のあらざることなく千秋樂の日

よりは部持年寄は何れも損金の割前支出を恐れて協會へ寄り附かざる程なりしが殊に或る年の如きは米價高貴のうへに世上不景氣なりしかば其時の損金最とも夥多しく十日目千秋樂の翌日雷は協會に出張して出納の決算、仕拂ひの仕末を爲さんとせしに一人の年寄も來會せず夫よりして日々協會に出張して各年寄を呼び集るに一人とし來るものなし因て然るべき使者を遣て來會を催促するに孰れも女房のみ家に居りて『損金の事を承知し居れば割前支出金の算段に出懸けまして夫は不在で御ざいます』と云ふ一樣の挨拶を聞くのみ、金策に出かけたりとの口實なれば深くも尤むる事出來ず終に雷は十日間計り協會に臥て暮したる程なりしかば斯ては果しなき事に思ひ今度は更に使ひを遣て『金策は此方にて出來たれば早々來會ありたし』と云ひ觸れしに初めて年寄どもの集り來りし爲め漸く諸事の相談を遂ぐるを得たりしが近年にては之に反して千秋樂の翌日より各年寄どもは頻りに協會へ詰めかけ『今日は純益金の配當ありさうなもの』との顏色を爲し居ること常なりと云へり盛衰の差斯まで甚はだしき事と見えたり

○故檢査役關の戸、曾て德嶋市に於て相撲興行の際、興行中七日間の約を以て臨時に一

美人(?)を雇ひ入れたり既にして雨天順延となり其興行を了りたる日は十一日間の後なりし是に於て關の戸は大に人に誇つて曰く我七日間の約を以て十一日間美人の厚待を蒙りたりと、聞くもの其僥倖を羨まざるなし其日各年寄各力士汽船に便乘して神戸に渡らんと欲し船將さ纜を解かんとするに際し麗の美人走つて船中に入り來り關の戸を拉駐めて要求して曰く『前約は七日間なり而して雨天の爲め十一日間を待候せり願くは四日間の增金を得ん』と關の戸先の誇言に對し大いに顏色を失し慰めて之を歸さんとするに美人頑として諾せず必ず四日間の增金を得ざれば此汽船の解纜を許さずと聲言す、之を見聞し居たる他の年寄力士等は高笑に堪へずと雖も增金を與ふるにあらざれば美人の決して去らざるを知り共に關の戸に勸めて其金を出さしめ漸く解纜することを得て、今も尙ほ同人間の談柄となり居れり

○取締二代目高砂　我に對して前章の物語りを爲す關の戸傍らに在りて之を聞き復仇の矢を放つて曰く『高砂予の失策を談ずと雖も彼亦屢々失策あり彼一日旅亭に在つて下婢に戲むれんとす遇ま人ありて其席に來る高砂大に周章し傍らの新聞を手にし知らざる爲

して之れを讀むの体を爲す、其人之を見るに高砂は其新聞を倒さまに繙き居たりと是にても尙ほ予の失策を嗚らさんとするや』と、兩人相見て大笑せり

○一時相撲社會を風靡せし高砂浦吉郎も病痾の爲め神經痴愚となり宛から小兒の如き有樣にて家人の認めだになきの悲境に陷り居れど去る一月場所は同人の勸進元なるうへに恰かも還曆の祝ひに會したれば諸所よりの贈り物夥多しかりしのみならず其興行純益金も近年第一の巨額なりしかば興行を終りてのち高砂の監理人阿武松緑之助は數千圓の紙幣を三寶に載せ縱令へ病痾なりと雖も是を見せて少しは喜びの色を見んものと恭やしく高砂の前へ持ち出て祝意を述たりしに病床に在りし高砂は之を見て大に憤り『ユ、穢ない早く棄ろ』と云ひ放ちたるに阿武松はアッと思ひ如何に神經病なればとて餘りの事なりと少時は恨めし氣に高砂の顏を詠め居りしが、後は涙に物も得云はで退ぞさしとは聞くも氣の毒の話しなり

○曾て力士等が協會役員の排斥を主張し延て數日の紛擾を重ぬるに至りし事あり某檢査役は我に對して述懷すらく『昔時筆頭の權力は甚だ大いなるものにて其會所に出張し居

る時は別間に居り組頭が何事にても協議を遂げんとする際には敷居を隔てゝ應答する程なりしかば其自宅に居る時は宛ながら大名の如く常に奥の一室に在りて次の室には妻女が控へ居り平年寄などの用事ありて訪問する時は妻女の控へたる室にて敷居越しに拶挨を爲し、機敏仲買ひ、出方のものなどに至りては格子戸の外より機嫌を伺ひし程に權威強よさものなりしが現今にては取締も檢査役も却て力士の機嫌を取らざれば無事に治まり行かざる如き有樣となり萬事六づかしき世の中なり』と嘆息したりき

○年寄千賀の浦(即ち大達)の部屋にて一日弟子力士等が大砲の大兵なるを評しあへる中に一人『彼は怪物なり』と云ひしを千賀の浦は聞き尤め例の大言を吐て曰く『今の力士は皆小兵だ己が盛んの比に立ち合ひたる武藏潟伊之助と呼びし力士は今の大砲よりも尙ほ三寸も脊が高く之と立ち合ふと己の頭が其乳の下へ付く位るであつたが力計りて手の無い力士だから、ナンの己には……』と腹を撫ての自慢話に大砲の怪物話しは扨止けり

○曾て幕の内前頭の中軸以上に進み多少人氣を博し居たる知惠の矢寅太郎の技量次第に

衰へ幕の内より二段、二段より三段に落ちいりしが先に幕の内に在りて次第に增給されたるの餘り其時尙ほ十八圓の給金にして(規定により二割減少されたりと雖も)目下の幕の内力士中には之れに及ばざるものあるさへ可笑きに能々計算する時は今の知惠の矢の給金は力士全体中の最高額なりとの奇談あり其は其時知惠の矢の位置にては大抵一場所に三日間位の取組なるのみ故に三日間十八圓とすれば一日の給金は六圓づゝなり然るに力士の最上位、横綱力士にても九日間四十五圓の給金にして大抵皆勤の毎場多ければ一日の給金は五圓に當るのみ即ち知惠の矢よりも一圓尠くして、知惠の矢は力士中第一の給金取りなりと或る算用に精しき年寄の笑話なりしが穿鑿すれば奇談あるものなり

○某年寄の朝汐を評する言辭に曰く休格力量、朝汐と伯仲する力士には源氏山、常陸山、其他數人ありと雖も殊に朝汐の秀でゝ勝ち氣多きは彼の出足早きとアピセル力の鋭きに依る源氏山の如き角觝は朝汐より上にありと雖も其出足遲きために機先を制するの利なく劇しき勝を得るに難んず近年を通じて同型の力士中朝汐に比すべき出足ありしものは大戸平なりしと雖も大戸平既に廢業したれば目下は朝汐一人となれり是れ朝汐の他力士

に恐れらるゝ所以なり且つ荒岩の如き敏健の力士にして彼の爲めに數度の不覺を取りしは之れ一に彼のアピセル力の强きに依れり云々と誠とに然るものあらん

○朝汐は地位、源氏山の上に居れり、然れ共其部屋に在るを見れば源氏山の爲めには朝汐常に一歩を讓るの觀あり其所以を聞に源氏山能く部屋力士を拾攬し殊に一二人の生死を賭して歸服し居るものあり若し源氏山に對して抗敵するものあれば此一二人直ちに蹴起して突進し之に勵まされて他の衆力士も起つて源氏の爲めに死地に入るだも恐れざるもの多し朝汐能く之を知るを以て敢て源氏の對に立ことなしと云ふ、源氏山の如き善に施さば古俠の慨あり

○力士が朝稽古を了りて入浴するには極めて微溫湯を好めり若し熱湯に浴して其後土俵に相撲ふ時は身体へ熱を釜し從がつて疲勞を來すの虞れありと云へり、此入浴につきて可笑きは大砲萬右衛門なり彼は入浴毎に一時間以上を要し長湯の大關との評を取りたるが或る人に戲れて彼は体内の面積廣き爲めに弟子力士が垢を摩るの暇の入る所以ならんと云ひしも或ひは然らん

○常陸山は豪酒家なり某醫師之を戒めて日本酒は極めて純良なるを擇飲むべしと告ぐ爾後彼は瓶詰純良なるを擇み栓を拔て一甞し若し不良なる時は忽ち肝癪を起して其壜を取つて庭石に打ち付け之を破ぶつて顧みることなし酒嗜の弟子力士常に嘆息して曰く

「寧ろ庭石に爲らん哉」

○行司に就て少しく記す處あるべし、先づ新弟子の入門するものあれば先輩行司は地方巡業中に於て土俵上の懸け引きを教授し然る後力士同樣に本、中より序の口へ漸進せしむ給金は矢張ス一（一兩）にて、夫より漸次進級して立行司に至り本給金十圓となることは既に前章の給金例中に記たるものゝ如し現今立行司と稱するものは木村庄之助、木村瀨平、式守伊之助の三人にして大關の出場には此中の一人づゝが土俵を勤むること人の知る處なり

○行司の格式は其用ゐる團扇の房色に依て區別す、其足袋免許となると同時に用ふる房は青白の交房にして力士の幕下十枚に相當し、次に進級すれば紅白の交房を用ひ幕の内力士に相當し、次に進級すれば紅房を用ひ三役力士に相當す、紫房は先代木村庄之助が

一代限り行司宗家、肥後熊本なる吉田氏よりして特免されたるものにて現今の庄之助及び瀬平も亦之れを用ひ居ると雖も其内に一二本の白糸を交へ居れり

○式守家に獅子王と稱する團扇を所藏す現今に式守の宗家、式守蝸牛の家に什寶として藏されあり其由緒を聞くに初代伊勢の海五太夫の門弟に谷某と呼べるものあり伊豆國加茂郡小稻村の産にして性怜悧なりしと雖も小兵にして力士として昇進の見込なきを以て師五太夫に乞ふて行司となり當時斯道の不規律なるを嘆じ五太夫と計り勸進相撲を創立せんことを企だて十六代（現今は二十三代）吉田追風を肥後熊本に訪ひ其賛助を得て德川幕府に請願し終に許可する處となりて初めて勸進相撲を四ッ谷鹽町に興行す當時の大關は明石志賀之助、仁王仁太夫の兩力士にして谷某之が行司を勤む因て吉田家より式守の姓を賜はり並びに吉田家の什寶獅子王の團扇と同一のものを賜り之を紫分團扇と稱す紫分とは重寶を分つの意にして眞の獅子王にあらず即ち獅子王の模倣なり

○先代式守伊之助、小錦八十吉の横綱土俵入りを引かんがために蝸牛、伊勢の海の兩人に計り紫分の團扇を用ひんことを欲し之を吉田家に計りたるに吉田家は紫分團扇は

『初代伊之助其人に特授したるものにて式守家に與へたるものにあらず』との意を以て故障を爲したれば伊之助は終に之を用ふる事なくして死沒せり

○蝸牛の家に別に南蠻鐵の古實團扇を藏す之れ亦初代式守の使用せしものにて代々の伊之助之を用ひ若し伊之助を名乘るもの死亡する乎廢業する乎の時は其團扇は伊勢の海家に取り上げ更に蝸牛の手に返附するを例とせり、斯式守家の伊勢の海家に附屬する所以は前章にも記せし如く初代式守伊之助が伊勢の海の門下に出でしの故を以て初代以來分家として屬隷し現今行司にて式守を稱するものは悉く伊勢の海一門たるに依れり、然れば伊勢の海の家は最も舊家と稱され初代伊勢の海が初て四ッ谷鹽町に勸進相撲を興行せし際の櫓太鼓の幕、及び寛永年間東叡山地固め相撲の天幕等を今尚ほ所藏し居れりと云へり又往時伊勢の海家にて相撲道を支配せし際、興行利益金を配當するに桝を以て量り與へたりとて今に其桝を存じ毎場所、警視廳の認可を得て御免札を回向院門前に建るの日に於て祝宴を相撲協會内に開き其桝を以て祝杯に代るを佳例となせり

○舊時の相撲は少しく名あるものは大抵大名の抱へとなり自から金錢を貯蓄して老後の

計を爲すの必要なかりしと雖も現今は力量衰ふると共に顧客の減少して其生活も困難に陷るの虞れあるを以て心ある力士は其盛時に貯金の心がけを爲すもの多し現に年寄には雷、高砂等相當の資産を有し相撲には鳳凰朝汐等自家の居宅を有し小錦亦新に家を求め資産尚ほ三千圓に餘り其他數力等土俵上に給金を取りつゝあるにも拘はらず多少の蓄金を爲して既に相撲年寄株を買ひ入れたるものも少なからず之れ好角家の知る處なり

○藝人社會には符牒語或ひは隱語の盛んに行なはるゝものなりと雖も力士は淡泊にして夫等の事を好まざれば符牒隱語等甚だ少く只時に依りて流行の通り言詞あるに過ぎず現今屢々耳にするものは急く事を『石炭を焚け』贔負客を捕へて饗應になることを『たにまち』破門さるゝ事を『御免を蒙る』勝星を得ることを『星を取る』必勝を期したる取組を『星に爲て置く』破れたるを『星を取られる』力任せに仕懸ける相撲を『强淫』と云ふが如き類にして是等は符牒隱語と稱すべきものにあらず一の流行語とも云ふべきものならん然れども全く符牒隱語なきにはあらず乃ち前章に記したる『八百長』の如き其類なりとす

○百話の了に呼び出し奴の事を記すべし、現今其數二十七八名あり勘太、勝の兩人を立呼出しと稱し其他は兩人の支配を受け美音の者は土俵の呼出しを勤め聲の惡きものは觸れ太鼓を叩くなどの役を勤む資格は協會の雇人にて極めて薄給のものなりと雖も觸太鼓の祝儀、飲太郎（一名につき木戸札一枚づゝを協會より貰ひ受け之を賣て錢に代ふを飲太郎と云ふ）其他臨時の貰ひ金等にて十兩取力士に相當なるの收入ありと云へり其地方巡業中に於ける收入は番附、勝負附、取組、錦繪を看客に賣るの外に飲太郎其他の收益少なからざるを以て給料の如きは其少なきを憂ずと云へり

相撲外の相撲

春塘

回向院の前に太鼓櫓が建始めると同時に、新聞雜誌で頻りと相撲の話しを歡迎するやうてはあるが、孰れの記事を見ても關取以外の事には、着眼をせぬやうに思はれるて乃で皮肉のやうだが關取連の區域を離れ、相撲道に關したる事項をのみ、こゝに載るやうな事にした、が、尋常の觀察とは少しく趣きが違う、局外者としては聞得られ

ぬ話しもあらう、先づ其一着として紹介するは

◎前相撲の散し取り

とて。相撲茶屋さへ未だ起きぬ先から、本場所の土俵にて相撲のを、前相撲の散し取りと云ふのだが、其前相撲の説明も或一部の、好角家を除いては跡は分らぬ方が多い、扨て前相撲と稱する相撲の種類は、相中、本中の位置てあるが、往昔は前相撲から出世をして相中、相中が出世をして後が本中、と云ふやうな順序であつた、が、當時では之等を括つて惣稱を、單に前相撲と呼ぶやうになつた、乃て此前相撲の運中を指して、兄弟子相撲は坊主〳〵と呼ぶのてある、散髪が延ぬから坊主てはあるが、去りとは強い惡口が通稱となつたものだ、所で前相撲の散し取りと云ふやつは、此坊主先生に限つて相撲のてある、場所が始まると呼出し奴が、毎朝疾く起き出て各所に散在する力士の部屋〳〵を、拍子木て起して歩く其

▲一番〳〵　の拍子木の音て眼を覺し、次ぎに打て歩く、二番〳〵の拍子木の音て、眠たい眼を擦りながら場所入りをする、東西合して二百餘名の前相撲が、溜りに控えて居るのだから後の方の先生は、人影は判然せぬも頭のみ黑く描いたやうに見える、土俵には伊勢の海、若藤の兩檢査役が、四本柱の本に控へて勝負帳へ、力士の成績を記して居る、其介添として、

▲若い者頭(部屋頭)が、　之も同じく星取帳を控えて居るが、之は東西の部屋を代表して居る、責任者であるから、今日は誰に彼と之までの成績を競べて、日々の組合せを選む役である、其傍の柱の脇に呼出し奴が一名宛、東西に分れて居て、大綱、若梅の差圖に依つて、前相撲の名乘を呼上げると、同時に上つて來て相撲のだが、

▲水を付けるや　待たの猶豫がないから、宛然て軍鷄が蹴合ふやうて、頗ぶる目覺しいものと、云つても可なりだ、夫に一番ても敗越せば、出世の出來ぬ所から、梅の谷と大砲が横綱爭ひに働いた、當時のやうな孰れもの働き振りてある、此

▲百番餘の勝負　を午後三時比より取始め、同六時比までに取り終るのてあるから、何程劇しい相撲てあるか見ぬうちは豫想がしにくい、虚と思はば眠たいのを耐えて、朝貌の見物に行くと思つて、一朝奮發をして見給へ、好角家としたら見て置くの、價値は

充分にあるであらう、夫に眞面目なる力士が、折節と

▲滑稽を演じる　事があるので、先づ西の溜から土俵へ現れたる力士が、東の溜へ降やうとして、檢査役等に注意され始めて顏を赫らめ、又は自分の名乘の上つたのを知らずに居て、傍の合弟子に促され、頭を掻きながら土俵へ登り、若い者頭より頭突きを嚙され（譴責される事の通言）、驚いて居る顏色など、中々に數へ盡されぬほど、可笑い事が毎朝澤山出來る、此無邪氣なる前相撲が、曠の勝負と力瘤を入れて相撲試驗日、則ち

▲出世の日取　は相中相撲が、三日目、六日目、九日目であつて、本中相撲が四日目、七日目、十日目である、本場所の中六日間が彼等の出世日で、其日に好成績を得たる力士は、相中が本中となり、本中は序の口へ附け出され、次ぎの場所から、一圓の給金取となつて、番附へ名乘が現はれ、加之天下の力士の數に入るのだから、本中の出世日は、殊更に奇觀である、此所で出世をすると直ちに中入前に親方の雜用廻しを締て、若い者頭に連れられて、東西から大勢士俵へ現れ、見物に對して行司が披露し、其歸途に花道にて脊中を、大勢の力士に叩かれるのが、斯道での身祝ひと云ふ事だ、往昔は序の口へ

出世をすると、親方から一分（目下の二十五錢）の祝儀が出て、其夜は公然と女郎買に、行く事に定まつて居たが、何時か失て今はないとの事だ、此前相撲等を組合せる、

▲行司の年齡　と云つたら、十四五歲が頭で八九歲までの子供で、兄弟子の古肩衣に袴を穿ち、禿た軍扇を携えて居るのもあれば、仕立卸しの定紋附の可愛らしい姿も見える、之等は親父の好機心より、忰を行司の群に入れ、服裝を贈るから立派である、何は併し子供が大勢だもの、行司部屋は宛然、寺子屋の幕明のやうだ、只敬服をするのは八九歲の小供が、獨りて肩衣や袴を着けるのである、馴と云ふものは恐しいものではないか、爰に不思議とでも云ひたいのは、惡戲盛りの子供行司が、溜へ這入ると、孰れも靜肅と構へ込んで居る、之は格足袋の行司が監督の爲め、見張つて居るからでもあらう、折に觸ると小供行司の中に、老行司の見える事もある、が、多く田舍の

▲草相撲の行司　てあつて、由緣を求めて出京し、本場所の土俵の砂を踏して貰ひ、何か免狀のやうな物を土產にして歸る、一場所限りの行司であるさうげな、去る春場所にも、白髮混りの老行司を見掛た、話しが元へ溯るやうだが、前相撲になる新弟子も、

季候に依つて增減がある、春場所には多い新弟子も、五月の場所になると、過半減じると云ふ事だ、其仔細を聞て見ると、雪の降る國では、雪中に職業がないから、相撲好きは、新弟子となつて出京し、東京を見物に、向ふ腮で來ると云ふ、至つて人のよい話しである、前相撲の事項は爰等て預つて、外の話しに移らう、扨て相撲協會の

◎焚出しの事

と、云つたら好角家は先刻お存じだが、先づ番附の發布と同時に相撲協會では、各部屋力士へ賄の焚出しを附ける、之に甲乙があつて幕の内より幕下十枚目迄は、自宅へ飯を取寄る權利を有して居る、所で孰れの新弟子も

▲飯櫃を脊負ひ　三度の食事毎に、協會へ飯を取りに行くが、鳳凰部屋の弟子力士なぞは、雨が降つても雪が降つても、京橋の本八丁堀から協會まで、親方の食ふ飯を、取りに行くと云ふ始末で、イヤハヤ誠に、割の悪い役廻りである、夫から幕下大頭（二段目十一枚目）より三段目迄は、協會の座敷にて食事をするのだが、朝は八杯豆腐、壹は平位のお馳走である、此手合は食事毎に協會まで行かねば、喰れぬと云ふ始末であれど、

行司も之に准じて本足袋は關取格、格足袋は幕下大頭同樣で、仍り協會まで出掛けるお仲間ださうだ、之等は甲の種類で乙の部と來たら、協會の臺所は宛然で

▲戰爭噪ぎの　やうだ、序の二段より序の口、本中、相中の新弟子、孰れも食事にかけたら、一騎當千の强者が、武者振ひをして掛る、夫に相撲人足の援兵が加はるから、別に菜らしい物はない、澤庵漬の香の物に、味噌汁か、辛唐子味噌が、お仕着の菜と定まつて居る、が、之等の菜に滿足をして、舌鼓を鳴し食すのも道理である、前章へ記したる如く未明から、場所入りをして、散し取りをやらかす、乃で腹は何程減るかも知れぬ、彼等に反して人足等は、餘り協會の飯は喰ぬと云ふ事だ、此菜の中の

▲唐辛子味噌を　嘗ねば、關取力士となつても、萬事につけ、唐辛子味噌の味も知らぬ癖に、生意氣な熱をふくと頭から、仲間の力士等に輕蔑される、夫が辛さに目下の雷なども、梅ヶ谷と云つて大坂で、大關の位置を占ながら、上京した當時は、態と前相撲より取上げ、後日に批難されぬやう、善後策を取つた位である、然ば唐辛子味噌に、何程の味が合味して居るやら、力士に對すると、餘程に困難の味噌と見える、其嘗づらい

唐辛子味噌と澤庵漬で、前相撲や人足は堪納して居る、其他關取力士を始め、年寄、行司等で日々喰ふ飯は、一斗二升焚の平釜を据へ、協會の臺所で焚いて居るが、此所で焚く釜數は日々

▲平均四十五釜　宛である、之を石數にすると五石四斗、俵に直すと四斗張り十三俵半、と澤庵漬三樽以上は毎日屹度、相撲協會員の腹へ、葬る事になつて居る、夫だから場所中は雨が續くと、協會の收益に影響を、及ぼして來ると云ふ次第だ、此飯を移す飯櫃も馬盥へ、蓋をしたやうなもので、直徑し四尺と四尺五寸のが二個ある、之へ飯を焚込んで蒸して置く、此位に順序を運んで置ぬと、各部屋より飯櫃脊負つて來る新弟子が協會の臺所で、衝突ものだから、焚出しの人足は例年の事とて、整然心得て居るのも可笑い、夫から前相撲が散し取りを了て、協會の賄につく形容を話さう、先づ臺所には

▲膳は算を亂し　例の又飯櫃より分たる飯櫃が、何個も竝んで居るのだから手盛八杯とやらかす、が、差しもに廣い協會の臺所も狹くなつて、飯を喰て居る後に立つて、膳の場所の空くのを待つて居る前者が喰了ると後者が、

▲兄弟子跡かせ　と云つて、(兄弟子とは尊稱した言葉、跡かせとは跡を貸してくれとの意味)膳の場所へ据る事になつて居る、扨て膳に直つて見ると、膳が汚れて居るから乃て、

▲お下り　と汚れたる膳を持つて、賄方の人足(彼等社會では俗に『チャンコウ』と通稱する、下世話に親爺をチャンと云ふより興りしなるべし)に渡す、すると人足は更に清淨たる膳を出し、

▲お登り　一挺(相撲道の通言として一を一挺と云ひ、二を二挺と云ふ)と云つて膳を渡す、尤も臺所の雜闘しない時には、お下り、お登りの通言は用ひぬてある、此通言の興りは今は昔し、力士が諸侯の抱えてあつた頃、道中を

▲本馬に跨り　天目を建さした比に、問屋場で馬士等が力士に對し、道中筋のお登り、お下りと云つた言葉を、終に前相撲等が飯を喰ふ時に、利用したのが、今では純然たる通言となつて了つた、乃て唐辛子味噌の難を越たる、關取の部分の菜と云つたら、三役で二十五錢位より、幕の内で二十錢内外、之も一定した譯ではないが、其階級に依つて

協會より、夫々に菜料を支給するやうになつて居る、此賄方の監督者として協會では、委員四名を設けてある、焚出し部長に武隈、焚出し方に富士ヶ根外三名、都合五名の年寄は、米薪炭其他の雜用買入方で興行中は頗る忙しい。

◎櫓太鼓の次第

聞くからに勇ましい音の、櫓太鼓に就いて種々の履歴がある、と斯道のものは云つては居れど、之といふ確實なる證據はない。或角通の謂のには、櫓は戰場の矢倉なり、乃で人寄せに打つたる陣太鼓が、何時か相撲道へ傳はり、目下本場所に用ゆる櫓太鼓となつたといふやうな事を仰しやるが、それは先それとして、櫓太鼓の話しを櫓と太鼓を別にして、記者が思ふ所を述べやうと思ふ。元來櫓太鼓と相撲道では云へど、

▲太鼓櫓　と云ねばならぬ。勸進能にも太鼓櫓へ毛鎗十本を立る云々、又歌舞伎事始にも櫓は京師に入る、伏見、三條、大原、鞍馬、長坂、丹波、鳥羽の七口の櫓を象とる云々、と記してあるが、勸進能では出來す、劇場でも櫓を廢したから、櫓も太鼓も相撲の專有物となつて仕舞つた。此櫓を建るにも昔は隨分とむづかしかつたので、

▲其寸尺も定つて　丈が五丈七尺とやらで、根元の巾が九尺、櫓の上の太鼓を乘せる所が六尺と云ふ事だ。幕府時代には御鷹狩がある、所で御鳥見などと云ふ役人の手を經ねば、勿々認可にならぬ事であつた。が、當時は开んな苦情のない代り高架の建物であるから、材木を選擇する必要が起り、目下使用して居る木材は頗る立派な物で、數百金を要したとの話しだ。て協會では櫓を建る日を卜し、

▲櫓建祝ひ　と云つて、在京の年寄達が集會して祝宴を開く、其日取りも『午』『酉』と定まつて居る。兎角に興行物は午酉の兩日を祝ふやうだ。或興行師に其所謂を聞たら、午は跳上げ酉は客を取ると、云ふ意味であるさうだ。夫は櫓を建るにも式作法があつて、先づ親柱を

▲其年の惠方　則ち明の方とか云ふ方角より建始るを例とするのである。扨て櫓へ乘せる太鼓は相撲協會の所有品でないと云つたら、異な感じが起るであらうが、今は昔寛永の勸進相撲に、始て年寄伊勢の海五太夫が、用ひたるとか云ふ事で未だに元町の伊勢の海の宅には

▲太皷數柄を　所有して居る。所で場所毎に伊勢の海から、太皷五柄を借り入れる事の習慣となつて居る。所で太皷に就て昔しは隨分と話しがあつた。舊幕府の全盛時代には、御三家御三卿と云つたら、飛ぶ鳥を落す程の權力を有して居たが此行例に行合つても下座をしないのは、太皷其者であつたさうな。先『下に居ろ〳〵』と警蹕の聲で、通行人は孰れも下坐をする、太皷觸に廻つて行合ふと、附添え居る呼び出し奴等は、一同に下座をして靜肅を表す、所が太皷を擔いて居る

▲人足は下座をしないで、却つて太皷を擔いたるまゝ、立て居てもお咎めのない事に定まつて居る。之は櫓へ乘せる天下御免の相撲太皷であるから、土間へ直に置く事がならぬとの意で結局默許の姿になつて居たのだ。夫程に特有の權があつたから、相撲協會が會所と云つた比には、太皷一柄に就いて二兩二歩（目下の二圓五十錢）の損料、五柄で

▲十二兩二歩宛　を支拂ひ、太皷を伊勢の海から借り入れ、夫で市中を觸廻したものだ、其習慣が殘つて、今だに伊勢の海の太皷を使用して居る乃で太皷觸の日となると、五柄の太皷を伊勢の海の稽古　から下し、夫々に人足を呼び出し奴が附添つて、回向院

の境内で勢揃ひをする。軈て勇ましく太皷を打ち鳴し、相撲小屋の中を一と巡りして、夫より各々の持場所なる、《協會は昨年始て六柄を新調す》

▲五ヶ場所へ五柄　の太皷を、觸廻すのであるが、此太皷の場所を稱して、下町太皷（日本橋、京橋、神田の方面）山の手太皷（四谷、新宿、麹町ノ方面）品川太皷（芝、麻布、品川の方面）淺草太皷（下谷、淺草の方面）深川太皷　の五柄に、定まつて居るが、昔しは四柄の

▲太皷で四宿　則ち、新宿、品川、千住、板橋と割つて、太皷觸を出したものだ、が、何時か五柄となつたので、五柄の太皷で市中を觸れ歩いても、各所の好角家の許で、相撲取組の披露をせず、只其道筋のみを打鳴して歩くを、俗に

▲流し太皷　と稱し、太皷を廻した翌日に雨でも降れば、取組の披露をする必用がない。乃で此流し太皷を廻すのである。此太皷を叩く撥音に

▲秘傳がある　櫓太皷を打つに撥の中央に力が這入れば、自然に遠音がさして遠方まで聞え、其所へ力が這入らなければ、音が冴ぬと云ふ話しである。夫だから青年の呼び出し奴は、頻りに太皷を打つのに、苦心をすると云ふ事だ、が、關西地方では太皷の趣

さが變り、手品師の疣打ちが叩く

▲豆太皷の大形　なのを相撲櫓へ登せ、呼び出し奴が調子を面白く打つ、其音色は『千兩幟』の淨瑠璃でやる、櫓太皷の曲彈さのやうてあるさうな。

◎勝負附の事

大相撲の場所が終ると、直ちに木戸際に居る勝負附け賣が、『相撲勝負附け』と聲高に賣り始める、其印刷敏捷なるには吾人も驚くより外なしだ。が、其印刷方のやり方に就いて又一つ話しがある。相撲の終前即ち結び相撲(大關の取組)の時、

▲勝負を豫想し　例令ば、大砲と常陸山の取組てあつたら、大砲の勝の方を五百枚なり三百枚なり、活字に組み込んで直ちに印刷し、又常陸山の勝の分も印刷に着手する、其中に勝負がつくから、大砲なり常陸山なりと、勝の方の勝負附を賣り始める事が出來るので、側より見ると機敏のやうだが、樂屋を話せば斯んなものてある。之がために始め勝と印刷した力士の、敗る時には、刷込んで置いただけ、反古になるのだ、夫から勝負附の、編輯方と印刷方とてあるが、俗に

▲板行部屋　と稱して、東力士の仕度部屋の隣りに、帳元根岸の出張所があつて、此所には活字と印刷器械が据てある、傍に活字を組む者、印刷をする者等が數名居る、孰れも根岸の手代て、別に活版屋の職工らしく見えぬ。乃て編輯方は長割(總て取組の事を割と云ふ、組割の略語呂)と云つて、序の口よりの取組を列記した特種の取組(此長割は檢査役、行司の外へは渡さぬ習慣なる由)を以て、行司溜の傍に板行部屋の溜がある、割始め(序の口力士)より其長割へ勝負を記す、之を

▲勝負帳と云つて　根岸の手代ても熟練家の聞えある、花屋、左清が主任て、外にも助手が居て交代て勤る。所て勝負を記した長割を、十分間毎に板行部屋へ送る、すると部屋に居る者が編輯して、直ちに植字方に廻す、斯う云ふ順序になつて居るから、終の太皷と俱に忽ち印刷して、賣出せるやうになつて居るが、此勝負附も昔しは活版などゝ云ふ重寶な機械がないから、力士の名義を記した、

▲駒彫を用ひたる　のてある、駒彫とは『國見山』『荒岩』と、一個宛に彫つてある板木を、小口から組合せると、完全した板木となる、夫をペレンにて印刷するのてある。け

れど駒彫には兎角凸凹があつて、活版のやうに中々刷上らぬ。夫をベレンの手加減で、旨く印刷するのを、板行部屋の腕としたものだ。其印刷する紙質も、

▲鼠半切を多く　使用したが、僅の時間に二三千枚を刷上げ、勿々活版刷に負ぬ程の敏捷てあつた、之も多人數の手を要せず、僅に八人の手代で印刷して終迄に間に合したと云ふ事である、是等の手代は他に兼業があつて、場所が始まると例年根岸方へ、働きに來るので、殆ど

▲株のやうになつて　居る、夫も是も收益が充分であるからだ。先づ手代頭は

▲十人程に極つて　居て場所中に日々刷出す勝負附を、割引きにて親方(根岸を指す)より買受、之を賣子に下賣をさせ、殘る純益金を配當するやうになつて居る。其枚數も勿々に莫大なもので、

▲毎夜三千餘枚　宛は、屹度區中で賣捌けるとの事で、此下賣先生は夜に入ると、『相撲ウ――勝負附け』と、何處やら勇ましい聲で、町々を流して歩いて居るが、之とてもチヤンと得意が定まつて居て、誰は何町彼は何處と、縄張中を呼び歩くのてある、斯んな

商賣でも巧拙はあると見えて、賣高も一定しない、巧者と云はれる者は、

▲毎夜二百枚　餘を賣ると云ふ事だが、拙な奴は百枚が乃至八十枚位で、巧者と云はれる者の恰度半分以下に當らぬ。勝負附を一番よく買ふ常得意は、投機商と車夫宿で、之等は云はずとも、相撲で賭博をやらかし、謂天下の力士を褰轉の代用、江戸馬鹿にした慰みであるから、勝負附を賣りに來ると、血眼で買ふ事になつて居る。其勝負屋の提て居る、提燈の表に

▲御免と記し、裏に　細字で根岸と書てあるが當時では何て御免だか要領を得ない、乃て御苦勞にも勝負附屋を捉へ、所謂を聞いて見たので漸と解つたが、元來提燈へ御免と記した始りは、太鼓觸れの歸途は間違があると不可んとて、之は寺社奉行より御免になつた、勸進大相撲の太鼓てあるぞと、豪勢に相撲の威權を振り舞はした頃の提燈の名殘で、當時では勝負附屋の、商標のやうになつて居るが、昔しは此提燈を

▲破つて牢死　をした者があつたと云つたら、虚のやうに思召さう。或晩に屋敷町で勝負附賣が、折助に散々に擲られたる上、例の御免の提燈を土足にかけて引裂かれた。

すると相撲會所（目下の協會）は、非常に激昂して、其趣きを、寺社奉行へ告訴をしたから、着て居たる屋敷の被衣が、目印しとなつて、其折助は忽ち縛され、取調べ中獄へ下され、終に牢死をしたとの事である。提燈と男一疋とを、取替は隨分酷な話しではないか。提燈の話しは爰等で止め、取組と勝負附の紙數を紹介しやう、先づ

▲一日の賣高　は、取組、勝負附を併せて、場所中は平均に四千枚より五千枚を印刷すると云ふ事だ。夫に今は廢されたが、以前は地方の巡業先へ、仍り帳元根岸が手代を引つれ、出張して取組と勝負附を印刷し、擴く販賣したとの事である。其當時の純益金は非常であつたから、旨い株だと年寄や老力士の羨んだのも道理である。

◎呼び出しの事

相撲協會では呼び出しを指して、無造作に人足と呼んでは居れど、頭から人足呼ばゝりは、彼等に對して憫然のやうに思はれる、元來呼び出しの名稱は、寛政度の上覽相撲に見えた

▲言上行司　が、則ち當時の呼び出してある。乃で服裝も裁付を穿つのは嬉遊笑覽

にも、『裁付を着て唐團扇を持ちし行司は延寶時代の古畫云々』とある程で、して見ると行司の服裝よりも、呼び出し先生の方が古風を保守して居ると云つてよい位のものだ。然し乍ら協會で人足と呼ぶのも、宛ら輕蔑したのではない、呼び出しの仕事に就ては、人足に似た節もあるからである。先づ

▲呼び出しの組織　を云つて見やうなら、昔しは帳元根岸の部下であつたが、會所が協會と改稱するに際して、呼び出しも獨立して協會雇員となつた。所が呼び出しが人足の名稱の許に働くは、多少理由のある話しで、土俵で力士の名乘を呼び揚げる外に、習慣の雜用が澤山ある。之を區別すると

▲年寄の小使　を專務として、場所中に大札場、新札場、木戸等に居て、夫々に年寄等の小用を達す、此外に

▲太鼓櫓に關し　たる者は、未明より櫓に登り太鼓を打ち、櫓に掲げある大招牌（庵招牌横招牌因みに記す庵招牌は蒙御免と記し、横招牌は東西力士と行司の名乘りを記せしもの）を、朝夕に揚げ降しをなす役、夫から

▲土俵を勤める　役等の、三種に分れて居て、呼び出しの初級が新札場、二級が大札場、三級が木戸、四級が櫓と順序を經て、卒業したのが土俵を勤め、始めて力士の名乗を揚げるから、乃で

▲呼び出しの　名が、興ると云ふやうなわけで土俵へ揚らぬ前は謂ば働らき人足であるから、協會では呼び出しを惣稱して、人足と單に云つて置くとの事だ。此人足の側を放れて眞の呼び出しになるには、隨分と相撲道に關し、種々の業を覺えて置かねば、地方の巡業先きで、呼び出しさんと云れ、仲間に兄弟子さんと尊稱される事は出來ぬ、其仕事は先づ

▲土俵築きと俵　初日前になると、土俵を築き直さねばならぬから、呼び出し連中の中で、熟練の者が土俵を築き直す、之に用ゆる土俵は、先年迄は例の相撲道の通言に殘つた、八百長の親爺が造つて居たか、目下でも呼藤の手になるのである其土俵の數は

▲惣計八十二俵　て、圓形に取つたる內土俵が十六俵、之へ二字口と稱し四方へ一俵宛置く其外にあるを俗に蛇の目と云つて二十一俵、角土俵が二十八俵三方の上り口（行

司、東西の力士溜り）が三俵宛九俵、檢査役の下へ一俵宛四俵、都合八十二俵であるが、式守蝸牛の著したる『相撲隱雲解』に、上覽土俵の古實を記して

一四本柱の間三間四方、柱より柱迄の內土俵七俵つゝ四ッ合せて、數二十八俵は天の二十八宿、東西南北に須彌四天を合せて總數三十六地理法劍相撲人古へ三十六人を司どるなり

一內丸土俵十五は天の九、地の六、東西の入口は陰陽和順の理なり、外の角を儒道、內の丸を佛道、中の幣束を神道、是れ神儒佛の三ッなり云々

とあるが、して見れば蛇の目土俵は、上覽相撲の時には用ひられぬものと見える。然し又其俵數に差のある所を見ると。好角家諸君の考を要さねばならぬ次第である。土俵の話は爰等にして、呼び出しが未明に場所入りをすると、直ちに

▲四本柱を卷く　のを役とする、此四本柱は四季に表するとかで、青、白、赤、黑の四色の布で卷くが『古今相撲大全』に、

四本柱は四季に標す、東は春にて其色青色、西は秋にて白色、南は夏にて赤色、

北は冬にて黑色なれば、其色々の絹を以つて卷くを差別とす

とある、これが之を禮記の四神に倣ひ、青龍、白虎、朱雀、玄武を摸したのだとも云ふ、此卷き方は北の柱から卷き始め、東の柱で卷き納めるを例にする、乃で陸海軍省から寄贈した天幕

▲則ち水引幕　の張り方も、柱卷きのやうに古式があつて、北方は陰にて水を司るとやらで、北から張り始め同じく北に張り納めると云ふ事だ、夫に千秋樂の弓取に用ゆる弓に、扇子と弓弦を添てあるが、花相撲や地方の巡業先きで、

▲弓弦の代用　に、奴元結を束の儘にして、中央の所を紙撚で結び、一見弓弦のやうに見せて、其塲を瞞着す法もある、之等の仕事が出來得ねば、呼び出しとは云はれぬので、目下

▲立呼び出し　と稱するは、呼勘、呼勝の兩人で、呼勘が東部屋附屬、呼勝が西部屋附屬、昔しは立呼び出しとなると、三役相撲の外には、名乘を揚げぬ事であつたそうだが、當時は幕内力士五名位の、名乘りを勤る事になつて居る。又

▲横綱の土俵入り　に、拍子木を打つて花道を警蹕するのは、仍り立呼び出しの役であつて、立呼び出しは柱卷の布、水引幕等を入れたる、大相撲協會と記した『アケ荷』を、保管する事になつて居る、此立呼び出しになる迄の苦心は、金錢では出來得ぬ事が多い。先、

▲寒中にめげず　太鼓櫓へ登り、太鼓の調子を勉强するのであるが、櫓の頂上の北の方へは、蓆莚を風除けにして置くか、交代で櫓を降りる時には、寒氣が骨まで透り、焚火で暖をとつて、漸く人心地の付く位である、所が呼び出し志願の者が存外に多いから可笑いてはないか。呼勘、呼勝の乾兒となつて居る、呼び出しは

▲三十四五名あるが　孰れも呼び出しを希望したものである。呼勘の乾兒で小由と云ふ小供は、本所横綱の左官棟梁の忰で、呼び出しにならねば死ぬと云た位の執心家だ、小供ながら櫓太鼓を打せたら、五本の指に屈められるとの話してある。斯う云ふ連中であるから、協會で支給する給金も一名に付き

▲一興行に一圓　日割にすると、日給十錢、夫に飲太郎と稱して木戸の通券を、十日

間則ち十枚を貰ふので、之を錢に替て酒を飲むと云ふ所から飲太郎と云ふ名稱が興り、呼び出し等の帆待錢には多くこれがなるので、此呼び出し人足を、相撲協會では昔しから

▲二十五錢に定めて　あつて、他の餘分の人足は立呼び出しが、自腹で小遣ひ錢を與へ、使役して居るやうなもので、立呼び出しの給金は僅に、一と場所が二圓なれど、地方巡業先で賣る

▲錦繪、番附、取組　の收益は非常と見え、慾じの相撲年寄よりは、勿々華美に生活して居るそうだ、所で太鼓觸れの日は、協會より太鼓五柄に就て、

▲五圓の費用　を支拂ふのであるが、太鼓を擔ぐ人足を賴むとすれば、太鼓觸れに廻る呼び出し連は、湯も茶も飲めぬ次第だが、乃は御法辨なもので、太鼓を入れる家では太鼓觸れ毎に祝義を出すから、夫を集めて各々に配當する、のみならず、呼び出し連の收益は總て合名會社のやうになつて居て、地方巡業中に儲たる純益は、立呼び出しが計算して、配當に甲乙はあれど、呼び出し全躰へ割付るやうにしてある。夫に衣類等は二

季の勸進元の仕着で足り、截付は最負を受ける力士より貰ひ、食事は焚き出しが付いて居て、衣食住には困らぬ、至つて暢氣な營業であるさうな、これから少し彼等が築く土俵に就いて、話しをするとしやうと思ふ、夫も古實なぞと云ふ復雜なる事を省き、

◎大場所の土俵

の上で、見た所の二三を述べやうなら、

▲初日の土俵淨め　立行司が祓にて、足袋格の行司二名を介添として土俵へ昇り、七本の幣束を土俵の中央へ飾り、御酒供物を備へ菅菰の上に立行司が祭祠を朗讀し、古式了つてから土俵の幣束四本を、四本柱へ配置し、殘る三本の中二本を太鼓櫓の出し幣とするのである、跡一本は協會の宿禰樣(野見宿禰を祭りしもの)に納め、夫から相撲を始めるので、此幣を

▲四幣と云ふて　四年程前に、立行司木村庄之助が九州巡業中、肥後熊本の吉田家から傳授を受け、之まで用ひて來たりし八幡幣(稽古部屋の土俵の盛砂に差してある竹の柄を幣と云)を廢して、四幣に代たと云ふ事だ。又十日目に

▲千秋樂の土俵祭り　當時では大場所後に、寄附相撲だの廣告相撲があるから、其式も多少は略したさうだが、三役の結び相撲が了つて、弓取りの式が濟むと同時に、本中に出世した力士に、若い者頭が付き添つて、大勢土俵へ現はれ、東西及び行司溜りの土俵を一俵宛つ土俵の中央へ積み重ね、夫へ四幣を建て、東西の水桶を竝べ、軈て行司が來りて、東西の力士に盃を以つて水を酌替させ、親睦を厚くする儀式を擧行し、夫より手拍子を打つて勸進元を祝す、所で勸進元は四幣を握んで、中本相撲の手車に乘るのを千秋樂の祝ひとするのである、が、此式の了ると俱に近所の小供が、

▲群集して土俵　を殘らず擔いて行く、夫を最寄の空地へ運搬て土俵を築き、小供相撲を催すと云ふやうな、順序になつて居る、其他土俵に就て焚き棄てる、雜用の

▲化粧紙　は、四本柱の東西に吊してある、毎日二十五帖宛の半紙を、力士が場所で鼻や口を拭つて棄てる、之を十日間に積つて見れば、二百五十帖と云ふ事になる。半紙の外に鹽、この鹽を力士が毎日

▲抓んで嘗る量　と云つたら、些少のやうであるが、本場所では鹽船と云つて、紙で、

船の形が折つてあつて、夫へ鹽を盛るから、二日に半俵位で濟むが、花相撲と來ると笊へ澤山、鹽が盛つてある所で、小綠などは面白半分に、土俵へ雪のやうに鹽を撒く、乃て其鹽は本場所と違つて、一日に一俵餘は屹度遣ふと云ふ事である。又東西の力士溜りに、

▲水手桶が据へて　あつて、之を力士が土場へ昇る前に、盃で水を付けるが、此水が一日に手桶で七荷宛を、數度に呼び出しが井戸より、汲んで運搬との話してある。

▲土俵の砂　は協會で初日前に二タ車ほど土俵へ入れるのであるが、三日目頃には砂が減て、新たに砂を買つて補なふと云ふ事になる、之が鹽や水と違つて、砂が何うして斯んなに減と思召さうが、力士達が足や躰へ付けて、湯屋へ運んで了ふからである。乃で回向院近傍の朝湯好きは、相撲の場所中は、風呂の湯は冷くなる、板流しは砂で汚れると、毎朝苦情百出で非常に困るといふ事である。

力士譚

山田春塘

◎尾車と大砲　或年の五月場所前に、各力士の部屋まはりをして、尾車部屋へも立寄つた、何がさて、當場所を以て、相撲名譽の、日下開山横綱を此部屋から張り出させやうといふのであるから、當さへ賑やかな陽氣な部屋が、又一層どよめき立つて、我れ知らず勇ましい氣持に成り了つた、稽古は最早仕舞に成つて、坊主頭の取的は、セッセと道場の掃除をして居る、主人の尾車は、大きな身体を、天井や鴨居に氣兼をしながら、茶やら煙草盆やら、人手にかけず取運んで呉れる、横綱はと聞くと、家に居ります、荒岩はと尋ねると、湯へ行つて居ます、今日は頭髪を洗ふといつて、外の湯に參りましたが、頓て戻りませう、誠に手狹な處で、其れに此邊は何うも濕氣まして困ります、其の内何處かいゝ處が見付つたら、引越をしようと思つて居ます、稽古場も、此度新築する樣ですと、屋根を亞鉛葺にでもしないと迚もたまりません、是れまでも、度々裏の方から、瓦が落ちて危險でならないと、苦情をいはれますので、其都度左官を呼むで、直させては居りますが、其れでもどうも又落ち、又落ち相だといふ話です、何ういふものかと立合つて見ますと、成程劍呑な事です、そこで早速其れは修覆させる事にして、さて段々考ひて見ました處、是れは大勢で、ドシ〳〵稽古をして、板目に打付かる、柱を蹴る、其の震動を受けては、自然と屋根がいたむで、其れで瓦が落るのだといふ事が分りました、其筈でせうなどゝ、話して居る中に、ニーッと大砲が遣つて來た、髪も綺麗に結ひ上げて、ゴリ〳〵した大巾の白縮緬を腰に卷き付けた具合など、今更ながら何うして、此んな大きなものが產たゞらうと怪まれる、そして、言語遣も叮嚀で、應對も中〳〵甲斐々々しく、決して其見た通りの者でない、其れは曾て某力士も話した事がある、大砲關の事を、世間では野呂間だなどゝ申す方がありますが、何うして其樣處ぢやありません、此間も、あるお客樣が、大砲は、何故あんなに間抜けなのだらう、最う少しハキハキやつたら宜ささうなものだと申しましたから、皆樣がさうお仰ますが、中々間抜處ぢやアありません、彼れが彼の人の利巧な處なのです、一体身体の大な力士は、ヤッ

と云つて立上がつて、ソラ來いと攝いて御覽なされ、迚も何處からも懸れるものてありません、其からヂリ〳〵敵手を逐つて居れば、敵手は次第々々に土俵を割つて仕舞ます、大砲關が、若しアの身体で矢鱈に働いた日にやア百年目、直に敵手に付込れて、自分は自分の身体が荷厄介になり、敵手は又其身体を利用つて、何んな技でも遣らかします、其れをチヤンと心得て居る大砲關、中々野呂間や、間抜てあゝするのては在りません、といふ話を聞いて居た、實に其通りであらう、種々話があつた後、大砲は語を改めて、『今の力士の中でも、私などは隨分古物てす、私が相撲取に成つたのは、今より十八年前て、丁度今の雷親方が東の大關で、楯山が西の大關の時でした、私は此な身体をして居ながら、カラモウ相撲が弱くつて、負けて計り居て、出世相撲を取つても一度も勝た事がありません、先代の尾車も、呆れて仕舞たと見へて、果は、わざ〳〵負けに往かなくつても宜いから、場所へはモウ往くなと言はれましたので、部屋に轉々して居て、到頭三年が間といふものは、出世が出來ず、番附へ名を出す事も出來なかつたてす、處が其翌年に成つて、尾車が勸進元をしましたので、私はお情出世をしました、此のお情出

世といふのは、今でもありまして、場所毎に年寄が二人宛、順番に勸進元に成ります、其勸進元に成つた年寄の部屋に居る相撲が一人づゝ、兩方で二人、出世相撲を取らなくても、出世相撲を取り上げた者と同樣に、番附面え附出されて、先づ力士の仲間へ入るのてす、私は明治十九年に此のお情で、始めて序二段に名を出したのてす、是れ迄永年の間には、隨分種々事がありましたが、此度は横綱を張る樣に成つて見ますと、どうも中々苦勞で、何方かと云ふと、褌擔で居た時の方が、結句心配が無くて、暢氣でよいと思はれます……』と語つたが、尾車は、最前から口を閉ぢて、是れには何の事も言ひ出さなかつた、世間では實に立派な横綱だと稱して居る。

◎常陸山の素行　力士仲間の御大將、大關となれば、仲間中で之れを尊敬するといふのものてある、其れに就て思ひ起す話は、例の相撲茶屋の高砂屋の女將が、關取評をした時に、『幾何腕節が太くつて、力があつて、相撲が強いといつた處で、其れて關取て御座いとは言はれません、關取といはれるには、又其れ丈の事が無くちやア成りません

や、私共は恁して、此な稼業をして居りますが、先づ是れ迄に、常陸山關の樣な豪い關取を覺ゑません』と言ふた事だ、されば常陸山の性行は何うであるかといふに、是れも某力士の話である、『常陸山關は別物です、何といつても腹が出來て居ますからな、何日でしたか……常陸關がモウ幕へ上つて居ましたつけかな、お客に連れられて、二人で八百松へ行つた事がありました、さうかうして居る中に、客は用事が出來たといつて、先に歸つて仕舞つて、二人は取殘されました、處が彼處の女將は、大層な常陸關贔負てすから、其席へ遣つて參つて、一つ二つ世間話の末、女將は常陸關に向つて、關取お前さんも、屹度大關に成んなさるのだろうが、大關に成ると昔と違つて、今は中々金も懸るといふ話だから今から其準備をして置く方が宜い、其れには關取のやうに愛想氣がなくちやアいけない、少しは上手を遣つて、お客を取る事にしないと、といふと、常陸關は、勃然とした樣子で、私は天下の力士だ、角力は取るが、未だれ客取りはしない積りだ、と斷然言つて退けたので、傍に居ても氣の毒な位でした』と、常陸は總て此樣風であるから、曾て戀意の者の外、大抵の人が招いたからとて、能々斷惡い場合でもないと、

滅多に其處へ出懸けない、或る年の一月場所中の事であつた、地方から上京つて來たといふ紳士が、常陸山を見て、是非一度會飲をしたいといふので、人を介して柳橋の某樓へ招いて、サア緩りと酌ふ、指居れ呑むは、呑み居れ指すはと、大分長時やつて居たが、其内常陸は、モウ遲いからといつて、辭して戻らうと、階子を降りて下へ來ると、トある一間の中で、本當にさ、いくら分らないにも程がある、口計り豪さうな事を言つて、隨分馬鹿にしないね、……常陸山關のれ客人さ、田舍者は眼が明かないつたつて……と語る二三人の女中の話を聞き付けて、『オイ』と計り、突然其部屋を明け放ち、アラ關取……とギョッとした女中共を見返つて、莞爾に笑ひながら、些とも氣が付かなかつた、些少いがといひながら、懷中から財囊を取出し、大枚三十圓といふものを、其處へ投出して、マア之れでも取つて置けと計り、優々として立去つたと云、常陸先年の夏稼業に、名古屋にて外耳炎に罹り、醫師は當分休場む樣にと注意しても、本人聊か心に懸けず、何に之れ位の事に休むぢやア、若い者の示しが出來ないと、相變らず日々土俵に上つて居て、引續き京都興行の初日にも出勤したが、此儘にして置ては益々重体に陷る計りだ

と、丁度負の醫師に八釜敷言はれたので、其二日目から同地の療病院に入院して居ると、何處をどう間違つたか、東京では、常陸山が京都で死亡したといふ風說が立つて、家族は勿論、多くの負客等は、角觝協會へ駈け付けるやら、出先へ電報を打つやら、大騷ぎをやらかしたが、不斷常陸の傍に付いて居る、長龍・常陸野なんどいふ門弟は、日頃稽古が八釜敷師匠が入院して居るから、當分は怠惰ても大丈夫と、何れも皆な祿々として稽古もせずに遊んで居ると、常陸は又、病院に居ても、弟子共の事が氣に懸つて堪らない、態々場所へ遣つて來て見ると誰れも是れも、鬼の留守の洗濯をして居たから、非常に立腹して、頭から叱り飛ばしたので、門弟共は大に痛み入つた、常陸又之れが爲に一層病氣を重らしたといふ事であつた。

◎源氏山の懷舊談　私は明治十二年の夏、國を出て來て、翌年の一月場所から相撲を取り始めたのだが、幕へ上つてからが今年で十六年、最初相撲の飯を食ひ出した時からだと、モウ廿二年に成る、隨分古手の方では値の高い方だらう、今に成つて昔の事をいふのも可笑なものだが、是れでも取盛つて居る時分には、點から相手を呑むで懸つて、お

前達位に負かされて堪るものか、サア矢でも鐵砲でも持て來いといふ威勢であつたから、歌でこそ、櫓太鼓に不圖目を覺しなんどゝ、歌つた事があつたが、些も取組なんどを苦にしなかつたし、又明日は誰と顏が合ふのだらうと、其れが樂しみで、若し自分より上手の者と取組む樣に成る時には、唯嬉しくつて成らなかつたものだつたが、今ぢやア中々老込むで仕舞て、……其れに其時分だと、此相撲を分て遣らうと思へば、少しも骨折れずに出來たもので、左を指して頭を敵の胸の處へ持つて行けば、其れで善かつた者であつて、又此の手から大抵技は施れた者であつて、組めばモウ直ぐ頭が敵の胸に喰付く事に出來て居つたが、今ぢや何ういふものか、頭が下へ下らなくなつた、爭はれないもので、モウ是れ好い加減にして、引下らうと思ふんですと、語り了つて煙草の煙を吐くと虹の如くであつた。

◎大江山の身上談　『私は石川縣鹿島郡、和倉村田村三松の長男松太郎といふものです、家ではお袋の名義、大塲もとゝ云ふ名で、旅人宿を營業にして居ます、明治十一年生れの今年は廿四歳、學校は尋常小學の四年生まで卒業しました、幼稚時分には、相撲など

を取つた事は無かつたが、十八の年の天長節に、七尾に宮相撲がありまして、其れを見に往かうと、村の若衆に誘はれて、見に往つて居ますと、飛び入り勝手次第といふので、誰れでも好きな者は、其の中へ入つて相撲を取つても構はない。スルと一處に行つた友達の一人が、何うだ皆な仲間入をしやうぢやア無いかと、言ひ出して、何れも之れに同意したが、私は相撲を取つた事が無いから忌だといふと、ナニ取つたつて、取らないたつて同じ事だ、松さん位の身体なら、大丈夫取れるから遣つて見ろ、と言はれても何うも進まない、何とかして取らないで濟ましたいと思つて、愚圖々々やつて居る處が、いやなら無理とは言はないが、折角皆んなで揃つて飛び込まうといふのに、何にもお前一人其樣事を云はなくつてもいゝぢやア無いか、其れても之れから若衆交際は出來ないといふのかと、言はれるので、漸々此間一升樽を以て仲間入をして貰つた計りだのに、茲で皆んなの云ふ事を聞かなければ、コラア除けものにされるかも知れないと、是非なく相撲を取る事にして、愈々土俵へ上つて見たが、何だか危なつかしくつて、動悸がして成らない、今なら其樣事はありませんが、始めて相撲を取るのですからね、空モウ夢

中で突いたり、ハタイたりして、飛付いて來るものを十七人でしたか、十八人だつたかを負しました、其れから急に相撲が面白く成つて、其年の暮に大阪へ赴いて、少しの知合を便に、千田川親方の門人に成り、翌る年の春場所に、十日間の相撲を八日勝ち、廿歳の春場所に序二段に付け出されて、到頭本物の相撲に成つて仕舞ひ、此場所には八番勝ち、二番負け、給金三兩二分貰ふ樣になりました、一体大阪では、前相撲の時にも給金として、一日に四錢づゝ渡されて、其れからは、一番勝ち越しが二分(五十錢)と極めて、給金を增し、其給金に應じて、番附の格式が付くのです、私は廿一の春に三段目へ上つて三番負けを取りました、此年まで大阪では、場所は年一回、正月と定まつて居ましたのだが、此年から改めて年二回興行といふ事に成ました、私は丁度年一度の時計りて、此の二度の興行がある樣になつて、春場所丈で、東京へ來て仕舞たのです、其れといふのは、同年の三月に、傳馬で京阪合併相撲があつて、私は、綾渡り、平の山、筑摩川、鶴勇などゝ取組むで、勝放しましたが、平の山も、以前大阪相撲であつたので、知り合ひてしたから、此方に居るより、相撲は本場所の東京へ來る方が宜いと、暮々勸め

られて、其れて平の山の師匠井筒の門人になつて、東京の者に成りました、實は此前に、常陸山關からも、東京へ來いと言はれて居たので、本來ならば、常陸山關の方へ往かなければ成らないのを、平の山の話で、今の井筒の處へ來て仕舞つたのです、常陸山關には誠に氣まりが惡い、左樣して東京へ來て、三段目に附け出されてモウ三年に成りました。』といふ事であつた、此男元來無類の好人物、曾て一度人と物爭ひをした事がない其れてまた切れ離れが能過ぎて、持つてる者、何んな者でも、些しも惜む事がない、最貧客が折角心に懸けて、贈つて呉れたものでも、一度大江の手に入れば、直に何處かへ飛むて仕舞つて、次會に其客に面會する時には、玉なしに爲つて居るので、時折は其の感觸を害して、お出入お差止めを喰ふ相である、是れ程圖法螺な樣てあつても、我が身の修養には、誠に勤めたもので、大阪に居た時分にも、稽古好きなので、土地のものに面を知られたといふ話してある、木村庄之助が、曾て大江を評して、『大江山は、前の大阪の熊ケ嶽の質ですな、熊ケ嶽といふのは、先代の高砂親方が、改正組を率ゐて居た時分に、大阪から連れて來た大關で、彼の雷電を投げ飛ばして、勇名を現はし落首までされ

た力士です、誠に强勢なものでした、彼れて大江が今少し上脊があつて、骨組がモ些と太からうものなら、其れこそ熊ケ嶽が、二度此の世に出て來たのですな、惜い事には最う少し肉を付けてやり度ものだが、元來脂肪のない身体で、太れない性質だから仕樣がない、だが地力が充分あつて、出足は早いし、四ツ具合はよし、前捌きはよし、夫れに上背がある故懐が深い、懐が深いから相手を寄せ付けてよい、寄せ付けて置てからが、吊はある、投げはある、其外の技術は何でも御座いといふのだから、恐ろしいものだ、先づ品格も言ひ分がない、腕からいへば、中々立派な惡力士だが、如何にも未だ小僧で、取組の數が足りないから、今一意氣勉强しなければいけない』云々

◎駒ケ嶽の身上談　生國は宮城縣六軒町、父は菊池敬治といつて、代々農業を營み、私は其次男で、名は國力、子供の時分相撲を見る事は好きてあつたが、取つた事は無かつた、卅年の九月頃だつたが、今の二十山親方と、朝汐關、常陸山關等が一組に成つて、奥州路へ稼業に來たので、仙臺でも五日間興行した、私も二三日見物に往つたが、或る日場所……が相撲が劣ねてから、私は一人てブラブラお城趾まて遊つて來て、大きな松

の樹の根方で納涼で居ると、此頃から相撲場で見馴れて居た年寄の井筒と、千代川といふ力士が其處を通りかゝつて、私を見て、何にか二人で話して居た樣子だつたが、千代川は二三度も此方を振返つて見ながら、行き過ぎて仕舞つた、私は變な人達だとは思つたが、別に氣にも留めず、又プラ〳〵家へ歸らうと町外れまで來ると、先刻の千代川が後から追懸けて來て、毎日場所で顏を見るが、お前は相撲が好きかね、好きならどうだ相撲取に成らないか、內の親方もお前を見て知つて居るんだから、成るなら直ぐに弟子に取持つが、と其れから段々話が進むて、私は其翌日、今の井筒の宿へ訪ねて行つて、其儘門人に成つて、其時駒ヶ嶽といふ名を號けられ、其から一處に東京へ來て、卅一年の一月場所……十八の年に前相撲を取つて、二番勝越して仕舞出世をし、五月場所に序の口に附け出され、卅二年の一月に序二段の後から八枚目に上つて、此場所に勝放し、其の五月場所には、三段目の中程に成つて一番勝越し、翌卅三年の一月には、三段目の頭から六枚目に、五月場所には、三段目の頭に成つて、一番預り四番勝ちで、給金を一兩三分直し、翌年の一月二段目の中程に成り、五月場所に漸く幕下の貧乏神に成りまし

たと、井筒が弟子を慈むの情は、生み親でも及ばず、逆鉾の弟々子を愛する事、兄の弟に於けるが如くだと聞いて居るが駒ヶ嶽の兩人に仕ふる事、實の父兄に對するよりも篤く、如何なる場合にも、未だ曾て其辭に逆つた事がないといふ、昨年五月場所の事であつた、逆鉾は膓胃を害ふて、場所をも勤めず、病院に入つて治療中の時などは、駒は痛くも心配して、好きな酒さへ廢する程であつたとか、其の中逆鉾の病氣も大に快方に赴いて來たので、駒も元氣を回復して、此中無沙汰に成つた贔負筋を訪ねて歩いて、某の處へ來た頃には、早や時刻にも近づいて居るので、マア有合せだと膳立して、飯を振舞たが、主人は急に思ひ出した樣に座を立つて、小さな瓶を持來つて、お前はこれが好きだつたが、此間越前から貰つたので、僅少計りに成つたが、モウ誰れも食らないから、皆んな食べて仕舞て呉れといふと、駒ヶ嶽は之れを手に取りあげて、海膳てすな、結搆てすといひながら、其れを膳に上げた切り、箸を付けない、主人の方では、奴食べかけだと思つて、其れで手を付けないのだなと、推量したから、別に强いもしない、やがて食事も了へて、膳を引く段になると、駒は氣の毒相に、旦那濟みませんが、此の海膳を

私に貰はせて下さい、といふので、好けりやあ持つて往くがいゝが、れ前は其れを如何するんだ、燒傷の咒にでもしようといふのか、ェイ其うぢやァありません、内の逆鉾關が之れを大好きで、三度々々食べて居ます、丁度此の頃は病氣が快く成つて來て、二三日前から、飯が戴ける樣に成りましたので、之れを頂戴していつて關取に食べさせたら、嘸ぞ喜ぶ事だらうと思ひまして……といつたから、主人は熟々聞き了つて、やゝ暫時は物をも得言はず、駒ヶ嶽の顏を打成つて居たが、如何にも優しい其の心懸けに感激して、ァゝ、持つて行けとも、持つて行くが宜い、だが大變少なくつて、折角のお前の志ざしを滿足させる事が出來ないな、と云ひながら、紙に包むで、それを與へて歸した後でも類りに之れに感心して、井筒に會つた節に、駒が之々であつたと、仔細に話して聞かせると、井筒も今更ならぬ事ながら、駒が心遣が嬉しいといつて、涙を落さない計りに喜むで居たと、

◎力士入幕の年數　木村庄之助の談話の中に、力士入幕の順序に付て、『最始に先づ前相撲といふて、番附へ上る爲に出世相撲を取る、そして其成績に依つて相中となり、又相

中から本中に成る、此の時分には未だ番附へは名が出してないので、彼の番附の末の方へ、此外中前角力東西に御座候、と斷つてある運中だ、此處に一場所、出世して序の口へ上る、序の口へ上つて始めて番附へ名を出されるので、番附の一番下の處である、先づ序の口も一場所として合せて二場所で一年間、序の口から序二段に上つてから、二場所一年、其れて三段目へ上つて、茲にも先づ一年、三段目から幕下へ上つて、幕下には一年半又は二年、据つて其れから幕の内へ上らうといふのであるが、是れはモウ順當に進めばといふ事であつて、さて此數年の間には、病氣に成つて、場所を休む事がある、惰けて負越す事もあるので、何うしても六年乃至七年はかゝる、又此位の年限がなくては、迚も取口が固まらない、相撲も矢張早熟はいけませぬ』と語られた。

横綱雜纂

好角翁

力士の横綱を張るは其の力士一人の譽れのみにあらず、前代に誇り後人に垂れ其の當に

斯道の隆盛を擧示するの考證たるを得るなり、故に或る力士をして一時敵なからしむるも其の敵なきは我秀て強きにあらず全体の相撲衰微して偶ま我に敵するものなきの時の如きは未だ以て横綱を張るべからず、況んや多少の情實を以て他力を假りて横綱を張る如きは終に横綱をして告朔の餼羊と同じからしむるに至るなり、翁を以て今の横綱を見るに梅ヶ谷以來眞に横綱を與ふべしと信じ得るものなし、西の海の如き小錦の如き近代の名力士たることは枉げずと雖も之を前後に誇垂すべき横綱力士と云はんことは翁の未だ首肯する能はざるものなり、然れば兩力士が横綱を得るまでの數塲所に於ては時輩に拔群の働をこそなしたれ、既に此の名譽を得たるのちを見るに決して當時一人の强者と云ふこと能はず、觀客をして横綱の價値斯の若きかを疑がはしめたるもの多かしり、或は云はん兩力士の横綱は其當時までの勳功を賞したるものにて既に盛時の極に於てしたるものなれば其以後に於ける勝敗は論ずるに至らず、月も滿つれば欠くるものなり其滿月の日に於て滿月を賞するは當然にして其欠けたる日に於て滿月の價値なかりしとて批難するは甚だ酷ならずやと此說一理あるに似たりと雖も、斯の如くんば横綱は贈位贈

官と同一にして力士の榮稱と云はんよりも寧ろ相撲年寄の勳章に均しく終には稻荷大明神に於ける正一位と大差なきものに至るべし、殊に大阪の八陣、西京の大碇等が横綱を張りて今尙ほ士俵に得々たるが如きは殆んど見戲に均きものにして横綱の價値此に至りて泥土に委したり先年の夏なりき八陣一行が東京に來つて相撲を興行せる日或る人、八陣の餘り弱は〳〵しきを見て三府の横綱中第一に弱はかるべしと云ひしに傍らに在りし一人が否大碇は之より弱はからんと云へば、又一人は否小錦は大碇よりも弱からんと說き更らに一人は否大碇も八陣も共に小錦よりも弱からんと異議し誰とて强からんと說くものなく結局横綱は弱はきものとの意味に解され一同大笑したることありき、實際は此時の三横綱中に第一に强かるべしと信ぜられたるは小錦なりしが之とても常陸山、大砲、荒岩、梅ヶ谷の如きを頭上に頂き八陣も亦秀の海に勝つこと能はず、大碇は更らに東京の幕内中軸以上には勝つこと能はざりしなり、横綱と云ふもの先年中は斯の如く兒戲となり了りたれば好角家は寧ろ横綱のなからんことを希望するの念を生じ前後に誇垂すべき横綱を却て前後に愧づべきもの〻如く思惟したりき、幸ひに小錦は顧みる處ありて自

から避けて後進の門を開きたるも大碇等に至りては靦然未だ土俵を退かず之を緣日の見世物に於ける看板の如く持ち歩き居るは好角家の常に嘔吐を催ふす處なりし、是に於て世の好角家は早く一人の眞横綱を得て斯道の神聖を維持せんことを希望するの念に堪へざりしなり。

既にして大砲萬右衛門が横綱を張るの報を得たり、大砲や土俵上の働きに於ては未だ十分なりと云ふを得ず且つ敵に常陸山の如きものありて一人塲を恣まゝにする能はずと雖も其体格に力倆に於ては近代絶無の巨人たり、若し敵ありとしても三府に只一人の常陸山あるのみ縱令ば谷風の横綱にして尙ほ小野川の敵ありしが如きに過ぎず且つ大砲の前途を豫想するに今日を以て既に極度となさず縱令極度となるも横綱を張りて後に俄かに下り坂となるものにあらず、爾後數年の間だは必ず今日の体面を保ち得ることを豫想し得るに難からず、況んや其体格力倆の拔群なる前代の横綱中に於て多く遜色を見ざるの巨人なるをや、故に眞誠の横綱を得んことに渴したるの好角家も多少の欠點は顧みるの暇なきが如く土俵上の技術は問ふに足らずとするものゝ如く敵に常陸山あるは兩横綱を

豫期するが如く或は比較的に或は眞實に其冷熱の度は高低ありとしても兎も角も近時の好横綱として之を歡迎せんと決意したるものゝ如し、之に因て先きに横綱の名稱に嘔吐し居たるものも共に起つて化粧廻しの贈與、幡の進物に奔走し世上は正に横綱々々の聲に滿たされ横綱の語は音樂の如く耳を傾むけらるゝに至りたり

◎横綱の起原　横綱の起原を說くもの諸書異同あり、蓋し谷風、小野川以前は信據すべき記錄なく諸家各傳聞に依て記するを以てなり、横綱の起原を以て谷風小野川と稱するものは大砲に至るまでを十五人とし明石志賀之助を元祖とするものは十八人となす、谷風以下は、

谷風梶之助　小野川喜三郎　阿武松綠之助　稻妻雷五郎
不知火諾右衛門　秀ノ山雷五郎　雲龍久吉　不知火光右衛門
陣幕久五郎　鬼面山谷五郎　境川浪右衛門　梅ヶ谷藤太郎
西ノ海嘉次郎　小錦八十吉　大砲萬右衛門

にして之に

明石志賀之助　兩國梶之助　丸山權太左衛門

の三人を加へて十八人とす然るに今回陣幕久五郎が、深川八幡宮境内に建設したる横綱紀念碑には二代兩國梶之助なくして之に代ふるに綾川五郎次と云ふものを以てせり、陣幕は何なる兎據ありて兩國を綾川とせしか就て聞かんとして未だ其暇を得ず只『陣幕久五郎通高事蹟』中に二代横綱綾川五郎次は下野國橡木の人、享保二年大關となる二代横綱力士たりとの意を記し、其出處を詳かにせず、其他の諸書には綾川五郎次と云ふ大關すらも見ず、横綱と云ふことは素より見るを得ざるなり、相撲の名を擧げたるものは相撲大全が第一に享保に近くして且つ完備したれども此中にも綾川と云ふ大關すら見ざるなり、兩國梶之助は元祿年間の大關にして、之は大關たりし確證もあり、丸山權太左衛門と明石志賀之助との間に在りて、年代も相應したり、故に親く陣幕の確證を示されざる中は綾川を棄てゝ兩國を入るゝを穩かとなすに似たり、而して明石より丸山に至る三人の横綱は著しき確證を得ず、只傳說中に德川三代將軍日光參詣の日明石志賀之助を見る、明石裸体の上に褌只一つしたるを面せなしとし傍らの神祠に在りし〆繩を取

り之を腰に纏ふてゆるぎ出でたれば將軍贊嘆して『美なる哉横綱の力士』と賞せしと云ふものあり、然れども之を證すべきの記錄あることなし、一說に泉州住吉の境内に於て力士の召し合はせあり、一人の力士連勝して之に當るものなし、即ち神前の〆繩を取つて褒美し之を腰に帶せしむと云ふものあり、此說やゝ近しと雖も之れ將附會に近し、思ふに〆繩を腰にするも斯る故事あるにあらずして相撲は極めて神聖を貴ぶを以て土俵に〆繩を懸け幣を建る等の例に依り最上力士の土俵入りにも腰に〆繩を帶ぶるに至りたるに過ぎざるなるべし、近世奇跡考に志賀之助の事を書ける中に『時に仁太夫、力やまさりけん志賀之助を引むすび、つとさしあげてなゞくると見ゆ、見物の諸人手にあせをにぎり、あはやとれもふ所に、志賀之助早業の達人なれば空中にてひるがへり、れちさまに仁太夫が胸を蹴て土俵にうちたふす、これより志賀之助、日の下相撲開山と名告る事をゆるさる』云々とあり日の下開山とは今日にては横綱と云ふ別稱の如くなり居れど、奇跡考の文意にては單に力士の最上と云ふに止まり、横綱を張りしと云ふことは證せられず、又此奇跡考の說も何を根據とせるや明かなることを得ず、次に兩國の横綱と云ふこ

とは全く記錄の證すべきなく丸山權太左衛門どても證すべき記錄なし、却て當時の一枚繪西村重信の舊畫を見るに丸山が土俵入の處を畫きたるにも只雲龍を畫きたる褌をゝめたるのみ、横綱を懸けたる樣を畫かず、又斯三人までも横綱力士ありとせは其後に出版したる相撲大全(寶暦年間)にも記載しあるべきことなるに曾て横綱と云ふことなきは寶暦以前には横綱と云へる定りたること無かりし證と見るべく其後谷風を以て横綱の儀式定りたりとするもの正しきに似たり、但し谷風以前にも何の力士か或る場合に於て腰に〆繩を纏ひたることはあらんも知らざれど谷風に至りて永世儀式の法となりしならん即ち下項に就て見るべし。

◎横綱の免許　上記の如く谷風以前に於て横綱の確證なし谷風に至りて初めて正實の記錄を得たり、即ち式守蝸牛著の相撲隱雲解に

一横綱之事

右者谷風梶之助依相撲之位授與候事以來片屋入之節迄相用可申候仍如件

寛政元酉十一月十九日　　本朝相撲之司御行事十九代

吉田追風　朱印

あるもの之れなり同日に小野川に與へられたる證狀あり。

右小野川喜三郎今度相撲力士故實門弟召加候仍證狀如件

と書せり之にては谷風のみ横綱免許狀を得て小野川は單に吉田の門弟たるに過ぎざるに似たれど其實は初めて門弟たるの證狀を與へ次に横綱の免許狀を與ふるものにて隱雲解には蓋し兩人を假りて兩件を示せしものなるべく、兩力士ともに兩狀を得たるものと推知すべし、故に今回吉田家にて大砲に横綱を與ふる際にも先づ神文に華押せしめて故實入門の式を濟ませ次に相撲故實の傳授を爲し、後に始めて横綱の免許狀を授けられしなり。

◎横綱土俵入　横綱を許されたる力士は一人にて土俵入を爲すこと今も古への如く人の皆知る處なり、而して此土俵入の方に古實あり吉田家に於て古實傳授と云ふもの是れなり隱雲解に『最手一人に限り天長地久の法、横綱の傳ありて一人の土俵入りをするなり、土俵に出て手を二ッ打つは乾坤、陰陽和順の義を表するなり、足を三ッ踏むは天地人の三才と智仁勇の三德を兼ね合はすの心なり、五ッ踏むは木火土金水の五行、仁義禮

智信の五常を兼ぬるの意、土俵の中央に立ち足踏を七度するは北斗七星にかたどるなり、云々』の意を記したるが之畢竟斯道を神聖にしたるものにして附會の説に過ぎざるものなれど、横綱の土俵入りは皆此意を以てするなり但し近時は足踏を略して此の如く多くはせずになれり。

◎劍持と露拂　横綱力士の土俵入に露拂ひと太刀持二人を前後に從へることは今も然る處なるが、露拂ひ即ち前驅は谷風小野川の時と同じく前に一人を進ましたれど後なる一人が劍を持ことは誰より始まりしか詳らかならず谷風小野川の土俵入にも只前後に一人づゝを從へたるのみにて太刀を持ちたるはなし、其圖は隱雲解にも出で又成島峰雄が『すまゐ御寛の記』にも『東の大關小野川たうささの上に横綱といふものかけ云々弟子のすまひ二人前後にひきつれてねりいづ云々立かわり西の大關谷風と云へるはこれも横綱をかけ達ヶ關秀の山といへる大にたくましきものどもを二人したがへ出て云々』とありて劍を持ちたることを記さず、將軍御覽の場なればとて劍を略したるにもあらざるやうなり、然れば劍のことは兩力士より後のことなるべし、此ことは尙ほ考ふべけれど知る人

あらば教へられんことを乞ふなり、

◎廻の色と横綱の結び方　横綱力士の帶る化粧廻しは紫の色を正しとす、紫は許の色なれば最上力士の廻の外は用ひざるを可とせり、然るに近頃は儀式禮法も崩れ各自己が心々に行なへば普通の力士が紫の廻を帶ぶるもあれば、横綱力士も他の色を帶ぶること多し、但し之れは客より與ふるもの多くして、力士自身の作るもの稀れなれば力士には如何しがたき時もあるべしと雖も、之れを作り與へんとする客こそ心すべけれ、翁の家に藏する谷風、小野川、兩力士の當時の一枚畫にも兩人ともに紫地に其名を白抜に書たる廻しを帶び居れり、先歳、萬歳會より大砲に與へたる廻しを作る際にも此古式に依りて紫地を用ゐんとの議あり、翁も其席にて是非に紫地を用ゐんことを贊し嘸て其議に定り三井に注文したりしが、事の急なりしを以て紫地の羅紗三領に充るだけ俄の間に合はず即ち神聖靈潔の無色を用ゐることゝなしたりと此事を擔任せる先輩の説なりし又横綱の結び方につきて説者あり、小錦は片結にして、兩端を揃へて上に跳たるも大砲は蝶の如くに兩結びにして場に上れり之を見る處の模樣は各見る人に依つて好惡あるべし

と雖も、甲が故實なり、乙が正式なりなど論ずるは未だ舊記舊圖を見ざる半可通の言にして昔時の横綱は今の如くに中に物を入れて固く綯たるにあらざれば片結にては一方には輪、一方には二本の糸が垂れ見惡きこと限りなし、故に谷風も小野川も大砲の如く蝶方即ち總角の形に結びたるは舊圖に明かなるとにて、要するに今の如く彼是の工夫はなく繩も今よりは甚だしく細ければ總角は矢張輪も總もダラリと下に垂て若し故實ありと云はゞ之こそ故實なるべけれ何となれば横綱は此二力士が始めたればなり、然れど之とて故實など云ふ心ありてのことと思はれず、今の人が故實々々と云ふも僞角通の沙汰なるべし、之に就て可笑かりしは先比の或新聞に大砲の結び方は八陣結びと云ふものなりと書きたるがありし、之は先年大阪の八陣が東京に來りて横綱土俵入りを爲せし際に、大砲の如き結び方を爲し居たるを見たる人が其新聞社員を惑弄して八陣結びなりと戯れたるを、愚弄さるゝとは知らず之を物識面に受けつぎて書きたることにして、新聞の相撲記事には斯る滑稽多ければ力士社會にても一二の新聞の外は何を書きても冷笑し居れり。

◎横綱を東方に置くの説　近時にては西よりも東方を上位とし同じ大關にても東の大關を強味とし殊に横綱は必ず東に廻すことゝなせり、即ち西の海が横綱を張りし日にも西より東に廻し、今回大砲が横綱を張りしにつきても西方全体を舉て東に移せり、然ど之は後世のことにして谷風、小野川より強かりしも依然西方にありて横綱を張り稲妻も秀の山も陣幕も皆西方のまゝ横綱を張りたりしなり、且つ番附の上に特に横綱の二字を書添へしも後の事なり。

◎横綱の數人ありしこと　横綱は元來一人たるべき筈なれど其元祖とも稱すべき谷風小野川が同時に横綱を張りたるを以てすれば東西に一人づゝ二人の横綱を同時に置くことは已むを得ざるべきか、之れとても小野川の方は久留米侯の威力を假りたるものなしとは云ひがたし、後に不知火、陣幕が兩横綱の際、鬼面山が阿州侯の力に依りて強て横綱を張り一時に三人の横綱を見るに至り今も尚ほ物笑ひとなり居れり、然るに近時亦此惡例を引て三人の横綱を置くに至るべしとの説を爲すものあり、其は大砲にのみ横綱を與へては常陸山が不平を起すべし常陸山にして横綱を張ば梅ヶ谷も亦之を希望すべしとの

推測に依るものにして後に悪例を遺して再び物笑ひとなるを察せざる説なり、然れども實事の之れに近づきつゝあるは翁等の苦々しく思ふ處なり。

土俵の秘密

正面子

一口に勝負は時の運と稱する中にも回向院の勝負ほど異變の生ずるものなし、是れ蓋し力士が地方巡業中に於て私かに研究する處の千番に一番の秘密を只一場の勝負に於て利用するを以て其秘密の工夫にして能く奏功する時は、意外の強敵を打破することあり、又其秘密にして敵手の悟る處となり、却つて其乘ずる處となれば我幾月日の工夫は偶ま敗を招くの禍種とならざることなし、故に力士は皆我に對する難敵ある時は百方苦心して其難敵の弱點を發見することを務め、其弱點を發見するに及んで、之を破ぶるの工夫を研究し、地方巡業中に在りては決して之を利用することなく、回向院本場所に於て始めて其秘密を利用するに至るなり、然れば地方巡業中に於て幾度敗れしと雖も、回向院

に於て必ずしも勝ち難しとは斷定しがたく、又回向院に於て幾度の敗を取りしと雖も、力士は之に依て決して挫折することなく次ぎの本場所までには、再び種々の研究を重ねて之を秘密に附して、一日利用する處あらんとするなり、之に依て怜悧なる力士は地方巡業中に在りて我難敵に對しては却つて屢ば申合を要求し《互ひに技倆を試合を申合と云ふことは人の知る處ならん》我長所は之を隱して利用せず、幾回か敗れつゝある間に私かに敵の長所短所を研究し行くなり、之がために東西合併の興行は好角家の厭嫌するのみならず、力士等に於ても亦之を厭嫌し、偶ま弱敵に糧を送るの不利ありと稱し居れり然れども多くは無邪氣なる力士社會なれば地方に在りて此申合を拒絶するもの少なく對手より望まるゝ時は三回に一二度は終に之に應ぜざるを得ざるに至り、知らず識らず敵に糧を送ること少なからず、或人曰ふ逆鉾は地方巡業中に申合を爲すことを嫌ひ、容易に他の求めに應ずることなし、と之れ他なし、彼は体格小にして寧ろ非力の力士なり、而して回向院の土俵上に能く強敵を制し得らるゝものは、其取口の敏捷にして端倪し易からざるがためなり、然るに屢ば申合せを爲して敵をして悉く其出る處を知らしめば後

には力と体とを以て闘はざるべからず斯の如きは逆鉾に取つて最とも不利なる處なり、故に力めて申合を避るの意あり、然れども數年間の地方合併興行中には多少敵手に悟らるゝ處なきにあらず、是れ即ち逆鉾の成蹟近年に至りて前年の如き能はざる所以なり、と或人の說、果して逆鉾に於て然るや否は姑く置き、斯の如きの結果は他の力士に於ても屢ば見る處なり、之れを是れ察せずして單に『強きものは勝ち負けたるものは弱し』との原則を以て力士を評する時は大關を破りたる小結は大關よりも一段強く、小結を破りたる前頭は大關よりも二段強く前頭を破りたる二段目は更らに大關よりも三段強く斯の如くにして序の口の力士に至りて大關よりも十段強きの結果を生ずるに至るべし、新聞紙の批評未だ斯の如く甚だしきに至らずと雖も、所謂力士の秘密に至りては多く察せざるもの多し、足下は日に力士等を近け日々勝負の工夫、結果に此て聞知する處少なからざるべし、豈新聞紙の記事を以て盡せりとし筆を投じて已むことを爲さんや、衆口の唯々は一の諤々に若ずと云ふことあり、予は好んで足下の評を聞かんとするものなりと即ち友人の敎唆に乘じ見聞する處を記して好角家の敎を乞はんとす亦是れ申合を望れて

自ら弱點を露はすの愚を學ぶに過ぎざるなり。

◎常陸山――梅の谷――荒岩――稻川等の工夫應用　今の大相撲とも云ふべきは常陸山對梅ヶ谷、常陸山對荒岩にして、之れに次ては大砲、朝汐、稻川、等の各敵に對する勝負なるべし、而して之等の力士は互ひに工夫を心中に凝らし、一擧して其の强を挫かんとしたるものなれども、其の秘密の敵に悟られたると悟られざるに依つて奏功若くは失敗したり、所謂工夫と云ひ秘密と云ふは力士社會にては一般に注文と云ひ又は勘定を附けると云ふ梅ヶ谷曰ふ荒岩と稻川の相撲に荒岩が二度の敗を取りしは甚だ了解せざること久かりし其先年來地方巡業中に在りて荒岩と稻川と申合を爲すに荒岩の稻川に對するには『サア來い』と右でも左でも勝手に來させてグッと締めて一振すれば夫にて形のつきたるものなりしが、何ゆゑか本場所にては荒岩が二度の不覺を取りたり、之れ畢竟は敵を輕んじたるためにもあるべきが、然りとても餘りの不審なれば能々研究して後に其理を得たり是稻川が地方巡業中に荒岩に對して私かに研究したる結果にして荒岩は不覺にも三場ともに之を悟り得ざりしなり、故に一度は腕力に任せて幸ひに勝ち得たりと雖

も二度は其爲めに破れを取りたり、而して其稲川の注文と云へるは必ず我より立ざるに在りて、荒岩の先づ立ち兩脇の明たる處に乘して諸ざしとなつてアビセ縣るに在るなり、先年三場所の兩力士の取口を見るに悉く一樣にして、始め荒岩より聲を縣けて荒の兩手が稲川の肩に屆くまでは稲川は必ず立ちあがらずして待たかと思へば之れ待たにはあらずして殆んどペテン立ちの如くに荒岩の少しく氣の拔けたる處を直ぐ諸ろざしに行くを常例としたり、荒岩は立合ひの立派を保つ爲めに何時もヤッと聲を縣くるや兩手にて稲の兩肩を押へるを形としたれば、稲川は此始めの諸突を肩にて受くるに兩手は未だ土俵に据あるを以て少しも感ずることなし、然るに荒岩は兩手を延て敵の肩にあるを以て、兩脇は全く明きを生じて空虛となりたる時に、稲川は待の氣味を見せながら、荒岩の少しためらふ隙に忽ち飛び込んで諸ろ指しとなり、荒岩は非常の不利益なる取り口となるなり、之れ稲川が深く研究したる秘密にて狡猾の誹りは免がれざるべしと雖も之を二場所も三場所も悟らざりしは畢竟は荒岩の不覺にして稲川を尤むべきにあらずして工夫上手の荒岩にしては珍らしき不覺なり、因て次の四度目の場所には必ず此不覺をせざるや

う我よりも忠告したることありしに荒岩は答へて其事は我も悟らざるにあらず、然れども敵の諸ろざし何程の恐れあるべきとの念慮絶えざりしを以て何時も斯の如く相撲たりき、然れども危險は十分戒めざるべからず、此場所には必ず一工夫あるべしとて其工夫を語りたるは、未だ其場所の開かれざる幾日前の事なりしが、斯て兩力士の登場の日に我《梅ヶ谷》も亦溜りに在りて荒岩の注文を見たるに從前場所とは異りて頗る腰を低くし敵の十分立ち氣となるの機を伺ひ例年の如くヤッと聲を縣けたるも、此は只虛聲にして兩手は敵の肩に至らず我胸前に備へて稲川の立ち上るを待たり、稲川は十分立ち氣の滿ちたる處に敵より聲を縣けられ、其手の眼前に閃めきたれば例年の如く敵の手の我肩に及びしを察するに暇なく荒の虛聲に誘はれて其まゝ立ち上りたれば荒は猶豫なく之を突き出し少しも危き處なく勞せずして勝を得たりし是れ荒が敵の謀の裏をかさしもの にて相撲は立ち合ひの工夫が第一なり云々と之を聞きたる荒岩曰く、稲川の注文が何れにありしやは知らざれど我工夫は全く梅ヶ谷の說く處の如くなりし、然れども此秘密一たび敵に用ひたる上は敵亦此上の手を工夫すべし、次の場所には我も亦工夫なかるべか

らず云々と以上は兩力士の本場所閉場後に予の前にて語りしものなり、只一日の勝負にも斯の如き苦心慘憺あるを知るべし。

◎前章は荒岩が稻川に對する工夫の成功したる秘密談なり、次には荒岩が常陸山に對する工夫の失敗に歸したる秘密談を記さんに、兩力士の相撲に荒岩が常陸山を蹶返さんとしたるを唯一の目的の如く評するものあるも、荒の目的は實は此にあらずして蹶返しは單に臨機に發したるものと云へり、荒岩は地方巡業中に常陸と數回立ち合ひしも、其取口は何時も正面より寄り合投合たるのみにて少しも奇手を弄するとなかりし、而して其間に私かに研究する處ありしが、其結果常陸が前に脆き弱點あるを察し、此場所には先づ一と突して其手を常陸の押へて泉川に撓めんとするを素早く引き抜て其機に敵の手を手繰て美事に前に引き倒さんとするに在りて、之を必勝の注文となしたり、然るに兩力士が對場の前日に於て計らずも海山が此注文と一樣の注文を以て美事に常陸山を引き倒したれば、常陸をして大に戒心する處あらしめ、荒に於ては稍躊躇の心を生ぜしめたりき、是に依つて荒は登場、心に惑ふ處あり、始めより注文の一點張に出てずして蹶返の

一手を試みしむるに至りたるが、其蹶返の奏功せざるを見て再び先の注文に出、常陸の泉川に來るを引拔て一と足退ぞき常陸の再び押へんとする處を素早く右に常陸の左を押へて我左を添て、金剛力にて前に引倒さんと工夫したるに、此工夫は却て敵の乘ずる處となり其泉川を引き拔く途端に常陸は何時もの如く再び押へんとは來ずして珍らしくも荒の肩の下をトンと一と突き劇しく突きたり、荒は敵の泉川を拔きたる處を意外にも劇しき鐵砲を受けたれば計謀全く齟齬して忽ち腰の碎けんとするに至り、終に第二の鐵砲に敗を取るに至りたりし、此鐵砲は或は偶然のことなりしやも知るべからざるも平生の常陸ならば斯る場合には必ず突き出すことなく再び敵の突き來る手を待つて押へて泉川に撓めんとするなれど、此日は巧みにも荒の引き拔ひて退ぞく虛に乘じて劇しく突き立てたる手段は優に荒の計謀の裏をかきしものにて、之れ荒の工夫の破れたるものにて畢竟は前日海山の成功に常陸の戒心あるを忘れたりし荒岩の不覺なり、年寄八角荒岩を戒めて曰く彼相撲は決して惡き立合ひにあらず、蹶返しの殘りて直左り指しとなりたるまでは十分の相撲なり縱令泉川に撓められたりとも其腰(荒を云ふ)にては撓め出さるゝ

恐れなし宜しく十分に腰を落して撓められたる手を預けて敵の廻を引くことを力むべし廻さへ引かば縱令へ勝ざるまでも分け預りは容易なり況して手にも足にも腰にも種々の技を持ちたる力士なれば《荒を指す》勝ち味は十分にありたるものなりしに惜ひ哉此大相撲をケレンにて勝んとしたるは不覺なりし、海山の勝たるは申分なしとは云へ實はケレンなり敵を再び此ケレンに懸けんとは自から死地に入るものなり、斯る相撲は十分骨を折つて居る心ならざれば多く過ちのあるものなり云々と之を傍聽したる一力士曰く、老巧の八角が始めに其注意を與へたらんには荒岩は斯る不覺は取ざりしならん歟、其は其年中九州久留米の興行中の事なりし或る日荒岩と稻川とが數番の申合を爲したるに稻川は續て數番の敗を取りたり、之を見たる常陸山はツト立上りて我一番相手せんと既に鹽を摘んで進みたれば荒岩は騎虎の勢ひ已みがたく終に兩力士の申合となりたるが、此申合は始めは互ひに戯れの心なりしも立ち合ひてのちは非常の大相撲となり、互ひに必死と爭ひたれば、双方危きを殘すこと三回づゝ終に荒岩の勝ちとなりたりしは、到底回向院にては見るべからざる大相撲にて、若し回向院にて斯の如き大相撲を取りた

らんには場中殆んど割返るなるべし、故に荒岩にして眞個に力を盡して相撲んとしたるならんには此場所の相撲は必ず彼の如きアッケなき勝負とはならざるべかりしに、折角指したる手を引き拔たるために遺憾にも取り返しのつかざる機を奪はれて終に脆き敗となりたりと、之れ荒岩の工夫の敗れたる秘密談なり次に梅ヶ谷が常陸山を破りし工夫を記すべし、從來梅ヶ谷は退て敗れしこと少なく進んで敗れしこと多し、縱令ば大見崎に常陸山に皆我出端を前に引かれ或は捻ねられたりしなり之に依て梅は難敵と見れば力めて機會を伺ひ輙くは進まずして十分大事に相撲ひ敵に隙あるを見て此處ぞと云ふ時に始めて突き進むを得意とせり、常陸に對しての相撲も之までの取り口は決して我より進むことなく十分廻しを取てのちに敵の虚を伺はんとするにあり然れども毎回其注文に達せずして常陸の破ぶる處となりたりしは、其注文の何時も敵に裏をかゝれ咄嗟に機先を制せられて反對に攻勢を取られし所以なりし、是に於て後の場所には梅の爲めに說くものあり從前の如き注文は最早成功しがたし今回は宜しく注文を改むべし、思ふに今回も常陸は梅が四つ相撲を希望するならんと豫想し組て後に梅が廻を探る機會に金剛力を以て

捻ねる歟寄るか投るか引き落すかの數途に出づべし、故に今回は四つ相撲を望まず全く敵の意想外に出で是まで曾て施さゞるの手段に出るを可とす其は立ち上り敵の腰の未だ定まらざるに乘じシャニムに突きかけて一氣に勝ちを制すべし、今一場の敗を賭するも目を閉ぢる如くして一ばいに突かけ敵が引き落さんとするも其暇なく、再び突きかけて行かんには凡そ二本の突にて大抵は敵に土俵を割らすことを得べし、と此忠告は有力の好角家。巧者の力士が共に梅の谷に與へたる處なりしかば梅は始めには鬼胎を抱かざるにあらざりしも、後には決心する處あり尙ほ自ら研究する處ありて登場果して其注文に出て第一着に先全力を以て突きかゝりたれば、常陸は其意外の鐵砲に少し受け兼ねたる氣味にて反身となりたる處を梅は猶豫なく第二に左を敵の右下たにかひつゝ右を當てゝ只一氣に体と共に押しかゝりたれば、常陸は力を出すの暇もなく忽ち土俵ぎはまで踏み退さ此にて漸く踏み止りて先づ右にウッチャらんとし次に左にウッチャらんとせしが其時梅の左は十分に常陸の右脇にかはれ右は一ばいに肩の上より預けられたれば常陸の体換ること能はず、其まゝアビセられて梅の勝となりたり、勝負終つて後に予梅に對し

て其注文の成功せしを祝せしに梅曰く斯の如く注文通りに行きたるは珍らしきことなりし、再度の突きまては我も期したることなりしが土俵ぎはにて餘りシャニムに行きたらんには或はウッチャられんかとの懸念ありたれば、此にては十分左右を預けんとの考へなりしに之れも注文通りに預けることを得たれば、敵が左右ともにウッチャリを試みて奏功せず終に我利となりたりき是れ偏へに好角家諸氏及び他の力士等の忠告を辱ふせるに依れり、敢て我强さにあらざるなり云々と梅が遜讓して我强さにあらざるなりとは姑く置きて力士が秘密の工夫の恐るべきこと斯の如し、

◎梅ヶ谷＝朝汐　朝汐が梅ヶ谷を破りしは三十一年の一月場所なりし、此時は朝が左に梅の前三つを取り右に上は手廻しを引きて、十分の得意を以て寄り倒せしなりき、其後數場所とも梅は廻しを引かせず、朝の廻しを狙ふ處を忽ち突き出すの一手に在りし、然れども朝は毎場梅の廻を狙つて一度も其注文を改めざりし大關の相撲としては素より然るべき理にして大見崎の如き取り口は大見崎としては可なるも朝汐としては勝つも寧ろ愧づべき取り口なり、然れども昨年の場所には朝の成蹟頗る上出來にして殆んど常陸

山を壓するの勢ひあり、是を以て梅との相撲には今回は必ず勝ちを制せんとの野心あり因て一塲の工夫を爲し伏波將軍尙ほ用ゆべしとの奇功を奏せんとの意なりしもの丶如く例年の如き廻を狙ふことを止めて一合して手先を搦み解けて離る丶機會にット腰を落して飛び込んで梅の足に附との注文に出たり之足取に行きしか無双に出んとせしか、大關の相撲としては立派なる者にはあらざれども、兎も角例年に異りたる注文をつけたるには相違なかりしも、梅の腹の突き出て足の深かりしため此注文は奏功せず其機に却て一と突きされて忽ち腰を碎くの不覺を取りたり、此日勝負了りてのち朝汐は力士部屋に歸りて茫然自失する如く、又沈默熟考する如く獨り此日の取口勝負を瞑想し塲了て他の力士等の悉く去りたるをも忘れたる如くなりしが人足等が『關取方は皆お歸りなされました』と注意するに至り、始めて心づきたる如くにして歸り去りしと云へり、之れ我注文の不覺なりしを悔ひたるに依るか、若くは連塲梅の爲めに破らるゝを遺憾としたるにありしか心事未だ聞くを得ずと雖も、思ふに此間に百方沈思して如何せば梅に勝ち得べきかを研究し未だ十分の策を得ずして終に歸るを忘るゝまでに至りしならん、朝汐

今は常陸山に及ばずと雖も西方に在りては未だ第三流に下らず、況や彼關脇以來常に一方の雄として甚だしき失体を取らず、極めて尊敬すべき大家にして而して尙ほ其苦心慘憺たる斯の如きを思へば他の綱かに幕内に進みたるのみの力士にして忽ち慢心を生じて花柳に戲れ工夫を怠るものに比して雲泥月鼈の差あるものと云ふべきなり。

◎常陸山――大砲　常陸山が大砲に對するの工夫は全く奏功したり、常陸として大關としては上乘の取り口にはあらずと雖も、兎も角工夫は奏功したるに相違なし、從來兩力士の相撲は大砲が右を指さんと來るを常陸が左にて防ぎつゝ一方は互ひに押し合ふに過ぎざりし、之に依て毎塲引分に了り終に勝負を見ること能はざりしなり、而して好角家の見る處は大砲にして右を指ば常陸之を防ぐ能はざるべく常陸にして引落しを試みば大砲或は敗るべしとは異句同音の如くなりしなり、然れども常陸も敵に右を指せざる代りには又引き落しのケレン相撲を取らず、飽まで正面の攻め合ひのみを試み居たれば昨年も亦大砲は例年の如く右指しに行かんとせしを常陸は豫て注文を爲したるものなるべく、例年の如く左脇を狹めて之を防ぐことは爲さず、大砲の右の力を込めて押し來る途

端を輕く右に避けて大砲の浮て廻らんとする處を押し出し、少しも力の入らざる勝を取りたり、之れ全く注文の奏功せしものにて、此注文は地方巡業中に於て常陸が工夫し置きたるものにして一日之を用ひんがための秘密なりし、此勝負の數日前に於て或る人大砲に向つて常陸に對する注文を叩きたりしに大砲は答へて常陸山は昨年も頻りに勝ち身に成りし程なれば本年は一層勝ち身に成るなるべし、其我横綱となりしと常陸山が大關となりしの二つあれば本年は引分けには了らざるべし、幸ひにして我右を指し得ば我も十分の相撲を見せることを得んか云々、と云ふに在り、大砲は右を指して十分に力を闘はすの一途に在りて、他の注文はなかりしものゝ如く況で常陸山がケレン相撲を取るべしとは夢想せざりし處なりし、然れども勝負は勝負なり、大砲が常陸の注文を察せざりしは均く其不覺たるは免かれず、力士の用心すべきは我注文のみにあらず敵の注文を察するも亦大必要なり。

◎小松山――谷の音　小松山と谷の音の勝負ありし前夜或る人、小松山に對し谷の音と兄弟の如く親睦なれば明日の相撲は今より思ひやられたり、其は立ち上るや直ぐ谷の

足癖にて兩体に倒れて預かりとなるならんと云ひしに、小松も笑つて本場所なれば故らに負んとの注文もあらざれど然りとて工夫して迄も勝たんとの注文も無し先方も亦我と同樣の考なるべきに、歸する處は貴說の如く足癖にて倒るゝことゝなるべきかと答へしが、翌日の相撲には谷が飛び込み來るを小松一寸身をかはしてハタキたるに谷は鼠の如くに敵の溜まで走り込たり、此取口餘に意外なりしかば後に小松に質せしに之は臨機の注文にて決して奏功し得べしとまでは思はざりし、溜りに出でし時までは何の注文もなかりしに、我前に取りし源氏山と國見山の相撲に國見山が源氏を一とハタキにして力を勞せざりしを可笑きとに思ひ、急に思ひつきて試みに之を眞似たるに意外にも一つにて極りしは我ながら驚きたる程なりし云々と然れは力士の注文に蓄藏したるものと臨機のものとあり、能々前後を考へて敵を知るは殆んど軍事に均きの趣きあり、荒岩の注文が前日の海山に依つて端なく敗れを招き、小松山の注文が前への國見山に依て咄嗟に產み出されたる如き最も力士の戒心を要すべき處ならずや。

大相撲雜記

好角翁

◎遺憾にあらず幸ひなり　或日梅ヶ谷が常陸山を破りし日、雷權太夫は少しの慾ありとて、家に在りて場所に來らず其夜、或る處の宴會には病を推して出席したりしかば、一人の梅ヶ谷びいきありて雷に向ひ貴公少しの病氣を苦にして場所入りを爲ざりしため梅が入幕以來第一の働き振を見落したり、遺憾至極ならずやと云へば、傍に在りし檢査役八角は頭を振て曰く、否遺憾にあらず幸ひなりし、何時も雷が四本柱にある時に限るが如く梅ヶ谷の失敗あり本日も丁度柱に坐るべき順なりしに雷が出場せざりしため、却て延喜が直つて梅の勝利を得たり、小見の喧嘩でなくとも角力にも矢張り親の出ぬものなりと眞目くさつて述たれば、坐客も大笑して實は雷も夫を察して出場せざりしならんと急所を突ての攻擊に雷答へやうもなくイユ全く痴氣の氣味でと腰を撫でずに却て頭を撫ること頻りなりしかば一座又痴氣は頭にはあるまじきものをと益す動搖き渡りたり。

◎二大行司の失敗　梅ヶ谷、源氏山の相撲に行司木村瀨平が勝負を見誤りて梅ヶ谷に團扇を上げ其翌日木村庄之助も亦大砲と源氏山の相撲に源氏の踏み切りたるを知らず、向ふに控へたる檢査役の若藤が頻りに注意せしも後ろ向きなりしかば庄之助の耳に入らず他の一人の檢査役も注意したれど尙ほ庄之助の悟らずして『殘つた〳〵』と叫び居る中、再び寄り切て大砲の勝となりたれば先きの源氏の踏み切りは有邪無邪の中に立ち消となり、別に尤むるものもなく了りたるが、萬一此相撲にして後に大砲が踏み切りでもなしたらんには一場の大苦情となり庄之助も瀨平同樣の失策を暴露したる處なりし、目下の二大行司が二日續て此失策ありしは特書して戒めざるべからざるに瀨平の方は世に知られて庄之助の方は二人の檢査役及び好角翁等一連の外は知る人少なし、然して瀨平は協會へ辭表を出し《右に及ばずとの意にて却下はされたれど》庄之助は今尙ほ自身も之を悟らざる色を爲し居れり、此に明治初年の事なりき當時の人氣力士境川と綾瀨川との相撲に際し先代木村庄九郎が軍配を引き此相撲境川の勝と軍配を指したるに綾瀨川は其軍配を不當なりとし手にて之を拂ひ落したれば庄九郎は大に激し司御行事の軍配に對し只

今の所業不禮なりとて土俵上にて激論を爲したりしが勝負は庄九郎の見し通り終に境川の勝ちに決したるも之がために庄九郎は相撲曾所の意を失し、土俵上の失体なりとの批難を受くるに至りしより、庄九郎益す憤慨に堪へず、其日松島町なる自宅に歸り遺書して行司の神聖なる意を述べ豫て大坂住友家より贈られありたる小鍛冶の刀と稱する銘刀を以て咽喉を貫ぬき一旦絶命したりしも纔に蘇生したる物語りあり。我見誤りにあらずとても辱かしめられたる時は斯の如き氣慨あり、今の行司が土俵の福草履も紫房も只一つの飾りとなりしぞうたてき。

◎惡しき手本　源氏山が當今の出來榮は上々にはあらず、之を休場《横濱にて負傷のため》前に比すれば一二段の衰へあれど然れとも未だ全く棄てがたきものあり動もすれば三役を凌がんとする色あり、或る時梅ヶ谷を破たる日、某力士之を評して曰く源氏山ほど不思議の力士はなし、再勤後に別段稽古を勵みたるにもあらざれば地方巡業中にも少しも稽古せず只酒を呑み花札を手にするのみにて、なまけ放題なりしも場所にては今日の如き働きあり、然れば他のなまけ力士等は之を口實として稽古は爲ぬも好きものゝ如

き不心得を持つものあり、世に善き手本と云ふことあれど、之れ等は惡しき手本なり其癖源氏が稽古を勵たらば、疾に大關たるべかりしにとは人も自分も云ひ居りながら、なまける方には贊成者多きが我々仲間なりとの力士の本根を吐きたるも可笑かりき。

◎泉川の功能　某檢査役曰く看客は撓め出しを單に泉川々々と稱すれど撓め出しに二樣あり、先年西の海の專ら用ゐたるは敵の手を押へて向へ撓め出したるにて之が往年泉川と云ふ力士の得意としたる處なり、昨今常陸山の用ゆるものは之れと少しく趣きを異し。敵の手を引かけて逆にウッチャるを專らとし向ふへ撓め出すは、十度に一二度なり、獨り鳳凰は向へも撓め出し逆にも撓棄てる手ありしが昨今には敵が其呼吸を悟り撓められたる手を引き拔き逃げることを爲さず撓められたる手は其まゝ預けて素早横に廻つて渡し込み持れて勝を取ることを工夫し大見崎之を利用し、千歳川之に倣ひ共に同場所に成功したり、畢竟は鳳凰の撓める力、先年より衰へたるにも依るべきが一には力士の智識進歩したる證にて常陸山の撓め出しに對しても必ず防禦の工夫を案出するもの近き中に出ることとなるべし、既に海山が常陸の押へに來る處を引き落したる如き、又荒岩の奇手

を弄せんとして故さらに指し手を抜きたる如き《縱令成功せざるまでも》皆常陸山の泉川に對する研究なり、元來此泉川の手は德なるが如くにして損なる手にて餘程力量の隔段したるものにあらざれば極りがたきものなり、其は撓めたる手の深か過ぎたる時は撓められたる敵が肱を張るために成功しがたく又其の手淺過たる時は敵が技を爲し易きを以て同じく成功し難し、要するに深淺度を得て肱の屈曲せる邊を殺すにあらざれば成功しがたきものなり、常陸山の目下の元氣なればこそ十中の五六は極ることを得るなれ、夫すら大砲、梅ケ谷の如き大力士には施しがたく海山、荒岩の如き健快の力士にも成功し易からず今の鳳凰の屢ば之に依て敗れたるも即ち此理に基くなりと流石に老力士の講說斯道の指針とするに餘りあり。

◎固くなるの弊　力士が本場所に固くなると云ふことは人の常に說く處なるが、一度固くなりたる時は其注文に皆過不及ありて却て敵に乘ぜらるゝものなり檢査役友綱曰ふ懸賞と云ふこと三役力士などにありては然まで心に懸ることなきも其以下に至りては却つて体を固くするの恐れあり、特に幕下力士などが地方巡業の際などに既に數日の勝越を

爲して懸賞を得べき望みの生じたる場合ひには夫よりのちは土俵に上つても体が石の如く固まり少しも働き得ざることは、近年屢實見する處なり彼鬼龍山とても七八日頃まては自から懸賞の競爭者中に加り得べしとは信ぜざりしを以て却て無心にして働らき易かりしなり、彼が懸賞の望みの生じたるは六日目荒岩の常陸に破られたる日に一機を與へ八日目大砲の常陸に破られたるに依て始めて眞個の競爭場に立つことを得たるなり、然れば九日目の大蛇潟に對しては鬼龍大ひに心を勞し、其相撲も手繰、足取等の面白き働きを爲し得ざりし。故に鬼龍をして早く懸賞と云ふことに競爭心を抱かしめたらんには決して斯の如く出沒自在の働きを爲し得ざりしならん、懸賞の力士を固くすること大略斯の若きことありと、之れ亦斯道に有益の語にして尙ほ證とすべきは彼の毎夕新聞の投票に一二の競爭を爲したる有村は七日目までは連戰連敗一日も勝ことを得ず七日目響矢の爲めに投票の敗を取りたる翌日よりは二日相撲て二日とも勝ちたり之れ七日目まで投票に因て体を固くし其敗の歸するに至つて寧ろ働らきの自由を得たるに外ならず、響矢とても亦其成蹟一月場所に反對して九日の相撲に六日の敗を取つて僅かに三日の勝を

得たるのみなり、力士を愛せんとするものも心せざれば却て、『ひいき』の引倒しとなること少なからず。

◎小松山の有難迷惑　或年の番附に小松山は取り殘されて西に留り、其連日の敵は皆先輩にあらざれば、兄弟の如き力士なり、故に勝負少しも心に勇まず自から運敗を期し顧客に向ふごとに泣訴する處ありたれば顧客は檢査役を見るごとに其苦情を鳴したりしに、檢査役は之に對して其は無情にあらず實は番附の順にて西に留めたるにて若し東に廻せば他の力士の星數に妨げられ多少番附面の位地を下さるを得ざる結果となるを以て故らに西に留めたるものにて寧ろ有情の處置なりと、之を聞きたる小松山嘆息して曰く誠に有難迷惑とは此事なるべし番附の一枚や二枚下りたればとて東に廻れば之を來一月に保つだけの働きも出來得たるべきに、愁いに西に留められたるため次の場所には一、二枚にて濟まざる不成蹟を生ぜしめられたり云々と、

◎小綠と長龍　或る日の相撲に長龍、駒ヶ岳に敗れたれど自から物言を附け土俵に留まりて他の贊成を乞へり、然れども味方の溜りに控へたるは冠者小綠にして此小綠は前日

の相撲に十分の勝相撲を長龍のために物言ひを附けられ、却て長龍に勝星を奪はれ我は只預りの半星を得たれば恨みを尙ほ心底に藏して長龍の翌日目の物言ひには溜りに控へながらも只手を拱いて嘯き居るのみ、毫も知らざる眞似を爲したれば長龍の物言終ひに達せず恨めしさうに小綠を睥睨して引き去りたり、然れど小綠は尙ほ拱手して嘯ぶきたるまゝ枯木の如くにして次の力士に水を附ることも忘れ居たれば某顧客餘りの可笑さに棧敷より一聲『小綠』と叫びけるに小綠飛び上り始めて我に歸り慌てゝ次の力士に水を附けたり之實に外面の見る處にして小綠が枯木の如く拱手し居たるは其心裏には我此日の敵、大江山に對するの注文を考察し居たるものなりし《小綠は此日まで土附かずにして終に大江山の强敵を向けられ此勝負には即ち二十五圓と羽織一着の懸賞ありし》然れども其は只小綠と好角翁の二人が知るのみ、他は皆長龍の遺恨相撲として次の場所に二人の相撲は最も注目すべきものとなされたり。

◎玉椿と小眞龍　其出世と其体格と其取口と共に相ひ似たるを以て玉椿と小眞龍とは好一對の力士と思惟され居たるも、實は玉は小より幾段の優れたる處あり、玉の小軀普通

人に過ぎず然して能く二俵の米を結んで自由自在の曲持を爲すの膂力ありと云へり、之に小眞龍を配するものは未だ玉椿を知らざるなり。

◎三吃　力士中に甲最とも吃り、西郷之に次ぎ、小緑又之に次ぐ、甲は『待』を叫ぶ能はず、西郷は絶に『マ　マ』を叫び、小緑は物言を附け――不平を訴たふるに只口眉を動かして熱誠を打あけるのみ、小緑自から云ふ三力士の相ひ對して酒を酌む時あり、自他互ひに何事を語るを知らずと眞に一嘆なり。

◎相撲批評　普通の角通と稱するものが口に筆に相撲を批評する中に大に笑ふべきことあり、其は大相撲なり、美事の勝ちなりと稱賛するものには往々八百長《相談相撲》の勝負ありて兩力士の間に始めより面白き大相撲を取りて看客を歡ばせんとか、故ありて美事の勝を讓るとか云ふ塲合ひあるを評者其情を知らずして眞面目に稱賛するがためなり、其例に引くは氣の毒なれど鬼龍山が土つかずの塲所なりし其九日目鬼龍山と大蛇潟との相撲は鬼龍の勝ち味は例の手繰て引落すか足取に行くかの二途のみとは一般の推する處なりしに、十俵にては美事に突き出して大關めさたる勝を得たり、之れ等は一考すべき相撲なれど評者等は一同に美事々々と云へり、鬼龍が八日までの働きと其平生の孝心とを聞きては、九日の相撲一つ位ゐは好角翁之を究追するに忍びざれば、天機は之を洩さゞるべきも、彼の取り口の如きは決して美事と稱すべきにあらず、双方下手に取りたる相撲なり、相撲を評せんとするには先づ表裏の事情を明らめざれば、口を開き筆を採かたきものあり。

◎幕下の有望　早くより其名を知られて却て其進歩の遲々たるものあり、突如として起ち何時の間にか上地位に昇るあり、彼の西郷、錦山、朝日龍、朝日岳等の如きは名早くして進歩遲きものなり、獨り藤見岳と云ふ力士は甚はだしく人口に稱されざる中に早く十兩分に入り、忽ち貧乏神に進み將に幕中にも入らんとせり、名遲く進むの早き珍らしき力士なり、其も其筈、此力士初めは師の尾車すら進歩の見込みなしと稱せしものなるを荒岩之を預かり自から我敎門の子として熱心に指導する處あり、藤見自身も亦寢食を忘れて稽古を勵み終に今日の昇達を得たり、力士の進否は熱心の一つにありと云ふべし。大江山は其身長、力量太刀山、駒ケ岳に及ばずと雖も其体の捌よさと相撲の巧者なるは

遙かに二力士に超たり、藤見岳を一層大くしたるものなれば成蹟の益す好きも宜なるべし、太刀山は力量、身長拔群なり、只塲所數の少なきを以て時に無理なる相撲を取れど、一二年の後は幕内を風靡するの望みあり近く常陸山との顏合はせは今より好角家の待設たる取組にして滿都殆んど狂するに至るべし、駒ヶ岳は体格無双なれば、順に進まば三役力士として太刀山の好敵手なれど相撲を大事とせざる癖あるは年の弱きためか、

相撲雜纂

兩國河邊　黑人

得意――弱點――癖

力士の勝負を語るものは先づ各力士の得意、弱點及び其癖を知るのが肝要である、角通は疾くに承知の筈であるが、河邊の黑人は自ら黑人と名乘る丈に人の知らぬ處も知つて居る積りて、少しく之を語らうと思ふ

○朝汐　の右上ハ手が恐ろしゝとは人の云ふ處だが、此力士の取口は甚だ老實である

爲めに外に一大長所のあるのが餘り人に知られない、其長所と云ふは「出足の早い」のであるが、是は見物に氣の付人が少ない、元來朝汐が離れて突き合ふと云ふ取口がないので出足の早いのが目に付かぬのだが、之は相撲を取て見れば直に分ることだ、拙者とても朝汐と取り組んだ事は無が現に力士どもの直話が然てある、例へば荒岩の話だが荒岩は何かして朝汐を冠つて遣うと云のて二度とも腰を落して冠り懸たが、朝汐の出足が早くて荒の冠り切ぬ中に進んでアビセ懸られたのて二度とも荒が壓されて仕舞つた、三度目にも朝の右さして寄來るを廻て投を打んと試みたが、是も朝の出足の早いため廻り切れず土俵を踏み出したとの事だ、荒岩ほどの素早い力士ですら其通りだから外の力士が朝の出足の早いに閉口するは勿論てある、外にも得意が無のてはないが此出足の早いことは餘り人が氣が付かぬから特別に例を擧げて語つて置のてある、弱點と云つては此力士が一番少ない、顏付が無愛想なのて土俵が引き立たぬのが殘念なれど、之れは勝負に關係のない事、ソレから離れて取るのが嫌いて、何時でも組て勝負を決する力士だが、之とても弱點と云ふ程ではない、只離れて取るが長所でないと云ふ位の處だ、現に或

年の春場所に梅ヶ谷と離れて突合ひ跳ね合つた事もあつたが少しも遜色がなかつた、ソレから癖は大ぶあるやうだ、化粧立に敵の突き出すを何とも云はずにズーッと避けて頸と肩を張子の虎のやうに突出して敵に輕侮の体を示すが目につく癖で、其上立ちも餘り奇麗ではなく兎角敵の小癪に障る風をする、之は中々考がへのある事で敵を怒らせて我に利するには甚はだ妙だが、朝汐自身も怒りッぽい力士で敵が横着の力士だと云ふと、アノ顏を一層六ヶ敷して實に見られたものでない。

◎逆鉾　の得意は『筈』の押し切りと云ふことは人の知る處だが、組でも手のある力士だ、但体が小さく貫目が少ないので其手が十分利かぬのだが、自身の防禦策には大層益にたつ、敵が大砲とか鳳凰とか云ふ大兵であつて若し得意の『筈』が殘つた時は組で直ぐ敗れる筈なれど、組でも左右なくは敗れる心配のないのは逆鉾に手があればこそ敵が十分に寄ることも吊る事も出來ぬのである、敵が大砲の如き重荷では組でのち投げ出すと云ふ技は六ヶ敷のであるから、ッッと頭をつけて防ぎながら敵の虚を伺がつて居るのである、大砲も夫が恐しいから小兒のやうな逆鉾を押へたまゝ何することも出來ぬのてあ

る、若し大砲が勝ふと行けば逆が望みは其時にあるので大男が小男に何な目に逢ふかも知れぬ、此一事で逆鉾の得意が『離て筈押』計りてないと云ふことが分る、弱點は第一体の小さいのであるが是は致しかたがない、ソレから組で相撲のは離れて相撲より不勝手と云ふ位なだが是も前に云ふ通り弱點と云ふ程ではない。

◎源氏山　は左さして有名だが、之は敵を攻る時の得意で敵の最も閉口するのは源氏の腰の重いのである、腰が重いと云ふても目方の重いのてはない、押しても捻つても動かぬのであるが之には西方の誰でも閉口して居る、四つに組だらば大砲が捻らうとても梅ヶ谷が投やうとしてもビクともせぬ、土俵の縁に足があつて、今一と押しされたらばと云ふ處でも源氏は平氣で居る、ソレダから引分けを取ると覺悟されたらば誰でも勝つことが出來ぬ、源氏の成績に何時も引分の多いのは此腰ゆゑてあるが、一利一害は逸れぬことゝ見に其代り『出足の遲い』弱點がある、源氏にして朝汐ほどの『出足』あらば到底之に勝ものがあるまいと思ふ程だが只之れが無いために荒岩の如き素早い力士には肝要の腰を据ぬ中に敗れるのてある、癖は土俵の上て掌を叩き合せて團子をこねるやうな手

つきをしながら敵を馬鹿にして居るが之が爲め敗れる事もある、先年八劔如き小冠者に敗れたも此馬鹿にした酬ゐで甚はだ宜しくない癖だ

◎常陸山　然當時第一の力士であるから得意も澤山あるだらうと思ふだらうが、得意と云つては餘り澤山は見ない、相手が弱くて得意を顯はすまでに至らぬのであるかも知ぬが、今の處では『撓め出し』と『寄り出し』ばかりである、此力士が歸り新參後昨年まで只四五度計敗れたのみ外には引分が數度あつた計りで、其他は悉く勝利であつたが、其手は梅ヶ谷を『掬ひ投げ』谷の音、松ヶ關を無理に捻倒した外は總て『撓め出し』と『寄出し』てあつた、体が後通り申分なく小錦鳳凰を折衷したと云ふ上出來だから外の手も入らぬのであらうが、實際得意と云つては右に言『撓め出し』『寄り出し』位ゐのものであらう、弱點は今の處では顯はれぬが、癖は敵を見くびつた樣な風をするのが誰の目にもつく、實際見くびられても仕方がないのであるが、餘り可愛くない癖だ

◎大砲　は躰格が資本で、得意と云つて別段ないが、大抵は長い手で遠くの方から突張出す乎、上ハ手を引て寄り出すが此二つて成功するのである、若し敵が懐ころに飛び

込んでピタリ食付、頭を當てゝ引分けを取らうと來れば、モー大砲は勝手を知らぬと云つても可なる位ゐで、常陸山以上にも敗けぬ代りには何時でも引分を取られると云ふ不器用ものである、最も數年前の五月には敵が懐へ飛び込む處を上から『ハタキ込んで』源氏山までも敗つた事があつたが、之れも先方が萬々承知となつたので、其次の場所には用ゆる處がなかつた、ソレから又敵が何時でも下た手に組んで大砲に下から手を指せると云ふことが無いので、本場所では實見した人が少ないが、力士仲間で『申合』を取るに若し大砲に右を下手に指れたらば到底耐へる力士はなしとの事である、本場所の土俵で敵の力士が大砲の右を一生懸命に防いで指せぬは看客の皆な知る處であらうが、ソレハ大砲の右が何より恐ろしいのである、之れは土俵上の大砲を見た丈の人には其理由が分らぬのだが、仲間の話を聞けば右の次第である、ソレから弱點を云つては、有るとすれば弱點だらけだが、彼の躰では格別關係はない、只足を取られるが一番恐るべしだが、朝汐、常陸山などは流石に足取りにも來なかつたから却つて下の方の力士に逢ふのが劔呑だ、又癖と云つては外にはないが此力士は丈が餘り高く人と並んで歩いても下を

向なくては話が見えぬ上に、人の家へ云つても自分の家に居ても頭まが支へさうで氣になつて困る處から自然頭を下て計居るのが癖になつて土俵へ出ても何時も下を向て居るやうで正面の切ぬ男だが、癖と云へば癖だが、理由を聞けば滑稽の話だ。

◎鳳凰　は常陸山と一般、寄り出し、撓め出し、位るが得意だが、一枚腰だけに常陸よりも弱點がある、向ふへ出る足と腰は大丈夫のやうだが、一度受け身となつて躰の反加減に爲た時は、踏張て後へ耐へる力が甚だ不十分である、其癖に取り口が大關程あつて敵を受て引張込んで立派に相撲のであるから、逆鉾のやうな素早い突張の強い力士には敗れるのである、外に癖と云つては少しもない、番附は下つても先は大關に出來た立派な力士である

○荒岩　は得意の澤山ある力士で、得意と云はんよりも寧ろ何でも出來ると云ふ方が適切であるかも知れぬ、第一は評判の蹴手繰であるが、他の力士の蹴手繰は我片足を擧て敵の足を外から中へ蹴るのであるから利目が薄いのであるが、荒岩のは我兩足とも飛び上りながら一方で敵の出足を中から外へ蹴るのであるから、其利目が格別劇しくて小

錦でもコロリと行のだ、其上蹴た計りて極らぬと見れば、追ひかけて『ハタキ込む』と云ふ早技をする、ソレから力が体格不相應にあつて突き出も撓め出しも遣る、左を指せば投の得意があり、右を指しても人並の技をする、正面の寄り合ひを見れば寄ると見せて掬ひ投げの得意がある、ソレから未だ回向院では取つて置きの襷反と云ふ手があつて朝汐には成功しなかつたが（前章、朝汐の部に『冠』とせし者、）大坂あたりては一寸見せた事があつて評判を取つた、ソレからまだ足癖、掛投など云ふ足の技もあつて弱點と云へば少しもない、有れば土俵外の外面如菩薩だが、是も劇しいと云ふ程てはない、敵方から鬼と云はるゝ程の恐しさは確かにあると云つて可なりだ。

◎梅ケ谷　の得意は第一が鐵砲の突き出し、次ぎが腹へ乘せて吊出すのだが、梅の鐵砲を正面から食ては耐へる力士は東西を通じて二三人しかない、其他は大抵一と突きかに突だ、ソレから腹へ乘られては大砲でもなくては耐へられぬ、常陸でも助かるまい、然し横の廣い割合に縦の短かいのと年の若い丈に弱點もあるやうだ其弱點の第一は未だ腰の据らぬのであるが、是は二三年も經て二十七八になれば自然極つて來るさうだ

が、横廣縱短の爲めに、中心が取り惡いと見えて、捻られた時に脆く行きさうてある、太見崎などに敗れたも之が爲めである、癖と云つては格別ない、敗た時に悔しさうな顏をするは年だけにお若い。

◎國見山　は上手突張が專賣特許て、素早く之を食ては大抵の力士は相撲にならずに敗れて仕舞、此外には年の若い丈に格別の得意も見えぬが、体格が十分だから常陸山などの格で、細かい技は要ぬのてあらう、癖と弱點は未だ分ら無が女に見込ないやうにしてやりたい。

素人相撲

變通生

時勢に伴はれる流行の變遷は、二八月の空摸樣と一般で何時變るやら、殆推測がてき得ない、一時は赤裸踊りとまで蔑視されたる相撲は、中興全盛時代と謳れたる、安永年間谷風當時の勢力に複活し、到る處、相撲興行の流行ならさるはなし、乃て余も其の流行

熱に驅れて、諸所に流行する素人相撲を紹介するとしやう、先づ其の組織は

◎好角家の有志團体　もチト仰山てはあるが、實際相撲好きの青年が群集して、運動にやらかすのが最初である、夫から有志者が醵金して土俵の砂だの、洋燈の油だのを購求するやうになる、恁う云ふ按排だから力量自慢の連中は納涼がてらに道場荒しにてかける、其の裡には親睦して何時か一つの團体とする、すると忽ちに

◎何連とか名稱を附す　やうになるのだ、元來素人相撲を市中に於ては、兩國連とか向島連とか唱へて居るが、最早郡部へ行つたら素人相撲の名稱を何講と稱するのてある、現に府下の素人相撲團体て牛耳を取れる、小松川附近の團体を八幡講と云ひ、葛西一圓の祭禮相撲は此八幡講の力士の手にあるのだ、之に次いての勢力は四ッ目講と稱し、本所四ッ目界隈の船頭が多い、何時も祭禮相撲には八幡講へ四ッ目講が合併する事がある、併しながら勢力爭ひから

◎力士同士に爭論の　ないやう、力士全躰を支配する頭取世話人がある、八幡講の側ては鬼勝に藤助、四ッ目講ては棒半が音頭取りて、双方合併したら三百餘名の素人力士

を左右して居るので、此團体の大相撲とも稱すべき興行は、例年秋期になると二の江村の八幡宮の祭禮に、八幡講と四ッ目講が東西となつて興行するのだが、慾じの花相撲は勿々に及ばない程勢力を有して居る、其の大關と目され

◎番附面に最上級　の位置を占て居るは、柳島の小柳と云ふ男ださうな、夫から玉錦、早船などである、孰れも素人離れがして居て力士としたら三段目位の資格は備へて居るのだ、處が此力士手合の職業を解剖したら、逆井通ひの乘合船の船頭と、穢い物を肩にして妙な聲を張揚げ、市中を徘徊する兄ァ連であるさうな、此素人相撲の流行する起因と云つたら

◎飛入と懸賞品　である、孰れの素人相撲も飛入の勝者に對し、懸賞品、手拭、半紙等の懸賞品を與ゐる、何が偖て呉服物さへ賣出し外には、買ぬと云ふ當世の人情、ロハて景物が取ると云ふ處から割出し、湯歸りに濡手拭を吊ら提げ、小力量のある連中は場所入りをして、景物稼にてかけるのだが、先にも荒神さまが付いて居るから無闘と飛入には勝せない、だが併し、二三番も勝越し景物を得たら飛入の評判忽ちに傳り、遂に

は何處の誰と名を知られるやうになる夫から推選されて

◎素人相撲の群に　入る此素人相撲にも交際があつて、他の土地て土俵開と稱し世話人の花會的で、手拭や團扇を配る事がある、慾う云ふ場合にはビラに金子を添てやらねばならぬ、また八幡講などの祭禮相撲に招聘されたら、之また然るべき義理の目錄を送る此義理を受けた連中の方でも酒肴などだして、招聘した力士を優待する、乃て自然に交際が廣くなつて來るのだ、其素人相撲て

◎市中に頭角を現し　て居るのは淺草、下谷、日本橋、神田、向島、兩國の各連中である、其他、芝及び澁谷にもあるが、此二組は今だに觀察をしないから、觀察をした時に讓るとして、余が目擊した所を說う、之まて各所て催した裡では、昨年兩國連が催したのが一致整頓して居た、土俵の拵造迄も大場所に擬し、直猫、直鮪の初ッ切相撲行司は式守伊之助の正統式守刀根、慾う云つた連中だから、毎夜相撲見物て雜鬧を極めた、が、些しく障る事があつて此相撲は中絕した、斯道に取つては惜むべき事である、が、此化身として昨年も日本橋連に合併し、土用過から長谷川町て催したと云ふ事であ